

零れ落ちた美麗の雫

たけのこの里派

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

千界樹ユグドミレニアと、魔術協会・時計塔との聖杯大戦。

そこに紛れ込んだ在り得ざる15人目のマスターが、裁定者のサーヴァントと契約して介入する。

——これは、女が恋する物語だ。

※この作品は短編集からの移行したものとなります。

目次

プロローグ	1
第一話 それを人は事後承諾と言う。	16
第二話 裁定者のサーヴァント	30
第三話 聖杯大戦、開幕	44
第四話 初戦	60
第五話 殺人鬼と女帝	76
第六話 犠牲者の記憶	91
第七話 登城	104
第八話 歴代最低のマスター	115
第九話 フィオレ・フォルヴェツジの回顧	125
第十話 邪竜成らず	137
第十一話 下手しなくとも抑止力案件	151
第十二話 SAN値チェックになります	165
第十三話 アキレウスの憂鬱	176
第十四話 叛逆者の解体	189

プロローグ

— Q u e s t i o n .

平和の象徴とされる動物を答えよ。

— A n s w e r .

答えは白鳩である。

こんなものは現代に於いて常識であり、何の疑問も持たれずに答えられる正解である。

有名な洪水伝説であるノアの方舟のエピソードから、ハトは平和のシンボルとして多用されるようになったようだ。

ノア一家は方舟に乗り、アララト山の頂上に辿り着いて、新たな人類の歴史を記すことになる。

この時に鳩がオリーブの若葉をくわえて戻ってくるのを見て、ノアは洪水が引いた事を知ったという。

以上の様に、鳩を平和のシンボルとするのは旧約聖書の創世記のエピソードに由来する。

だが、どうだろう。

私にとって、鳩は決して平和の象徴ではなかった。

私達にとって鳩とは凶兆のソレだった。

いや。

そんな比喻ではなく、直接的に斥候と言っても過言ではなかったのだ。

事実近代でも帰巢本能に目を付けた軍事関係者によって、主に伝令用の他、小型カメラを装着させた敵地偵察用のスパイ鳩としてよく利用されていた鳥でもあった。

「鳩を飛ばす」なんて言葉は、スパイを送ることの隠語であったそう
だ。

そんな鳩を優秀極まりない魔術師が使ったらどうなる？

もう目も当てられない。

当時の私達は白鳩を見掛ければ即座に撤退。

最優先事項は、大量に展開、配置された鳩に見付からない事でもあった。

この前読んだコミックの、アメコミ画風の超人ヒーローと現実の平和の象徴と代わって欲しいものである。切に。

尤も、魔術師にとって大抵の動物は使い魔として使用されるから何とも言いがたいのだが。

うん？　どんな魔術師が鳩を使ってたって？

うーむ。顔は無論知ってるけど、実はそれは魔術の投影越しで直接会った事はないんだよ。

お互い気軽に会えるような立場では無かったし、アッチは兎も角私自身は直接会った事はない。

でも、どうだろう。

残虐さや暴君っていうのは本当なのだろうけども、どうだろうか。

——彼女、結構尽くすタイプだと思ったよ。

——プロローグ

「——申し訳ありません」

日本の冬木市。正確には西側の古い町並みが残る深山町の丘の頂上に立っている西洋建築の館の書齋に、二人の男性が向かい合うように座っていた。

一人は四十代の、内心苦々しくも余裕な表情を精一杯取り繕っている男性。

この屋敷の主人であり、魔術師の家系である遠坂家の五代目当主でもある、遠坂時臣。

そんな彼は、今難事を前にして表情を硬く強張らせていた。

苦渋で表情を歪めそうになるのを全身の筋力で抑え込み、更に冷や汗さえ密かに流しながらそれでも『余裕をもって優雅たれ』という遠坂の家訓だけは保っていた。

特に、彼の前で珈琲を飲んでいる者に対して、何としても失望させてはならぬと強迫観念さえ滲ませながら。

黒く染められた髪に、薔薇色の瞳。

何より、美神の如き異常なまでに美しすぎる容姿の男。

屈託のない仕種、こぼれるような笑顔、無垢な言動。

女の夢見る少年と麗しい青年の狭間。

美少年、その権化のような——遠坂家の家訓の擬人化したが如きヒト。

女は名を呼ばただけで心奪われ恋に落ち、身体を震わせ、喜びに我を忘れ、永遠の忠誠を誓い、命を賭した隷属を約束するだろう異質極まらない美貌。

そんなある種の神秘さえ感じさせる程の少年に、頭を下げていた。

時臣の謝罪を溜め息混じりに受け取った少年は、その美貌で苦笑を作り明後日の方向に向けた。

件の案件は、少年にとつても他人事ではないからだ。

「まさか——凜ちゃんが家出とはね」

「汗顔の至り。ひとえに私の教育の至らなさが原因かと。遠坂家当主として、恥じ入るばかりです」

「昔から、矢鱈と行動力あったからなあ」

遠坂家長女、次期当主遠坂凜の置き手紙を残した失踪である。

『——御父様のやり方には納得がいきません。時計塔で、魔術師としての在り方を見付けに行きます』

そんな置き手紙の第一発見者である時臣の妻であり凜の母である

遠坂葵は卒倒したそうなの。

何にせよ、頭の痛い案件には違いなかった。

「うーむ、或いはその教育が逆効果だったかな」

「……と、言いますと」

「彼女は魔術師としての潜在能力は凄まじい。そして何より賢くもあり気高くもある。君の魔術師らしすぎる冷酷さをキチンと理解したからこそその反発じゃないかな？」

「……しかしそれは」

魔術師らしい魔術師。

それは人でなしであることを表していた。

凜の魔術師としての才能は超一級。

神童と呼ばれた魔術師が本来一つである魔術特性を二つ持っていたが、彼女は五つの属性全てを兼ね備えている。

かの『四^五元素の再発見』『三原質の再発見』を始めとして数多の功績と書物とを残した、魔術師でありながらその研究成果を世間に広め、医療の発達に貢献し、人類史と魔術史の双方に名を残した錬金術師パラケルススと同じと言えば、どれだけの才か解るだろう。

だが彼女は初代当主の血も色濃く出たのか、お人好しの側面も持っていた。

そんな彼女が魔術師らしい魔術師である時臣に反発するのは、ある種の必然であった。

そして何よりの時臣との亀裂は――

「桜ちゃんの養子の件。桜ちゃん自身の了承とか貰ってなかったでしょ」

「――っ」

少年の言葉に、時臣は凶星で言葉が出ない。

それは、時臣の次女である遠坂桜の養子の件である。

時臣にとっては一子相伝である魔道の家において二人目の子供には魔術を伝えられず、そして凜と桜の姉妹は共に魔導の家門の庇護が不可欠であるほど希少な才能を生まれ持っていたため、双方の未来を救うための方策であった。

致命的なのはソレが桜の了承も得ず、加えて桜自身時臣に捨てられたと思っていた程。

これには、流石の少年も苦言を述べた。

それは魔術師の家では珍しく姉妹仲がとても良かった凜にとって、例えそれが時臣にとって桜の将来を想つての事だとしても許せるモノではなかったのだ。

それが時臣への確執の始まりだった。

尤も、確執自体少年との交流がなければ抱くことも無かったのだが。

「し、しかしあの子の稀有な資質から鑑みても、その才を潰すには余りにも惜しいと考えて——」

「勿論君の考えは理解できる。だけどソレはあくまで君の中での魔術師の父親としての理屈に過ぎず、君と凜ちゃんでは視点も思考も違うだろう？ どう思うかは彼女次第さ。」

まあ養子先のエーデルフェルトでの生活は悪くないみたいだし、凜ちゃんの遅めの反抗期と思えば良いんじゃないかな」

「しかし、結果貴方に相当な面倒を掛けてしまつて……」

時臣にとって何より問題なのは、その家出に辺り当時時計塔に居た少年のロンドンでの拠点に転がり込み、挙げ句魔術協会への口利きさえ施されたからだ。

彼にとって無視できる段階を超えている事態だった。

「別にあれくらい構わないって。それに、彼女は僕にとつても孫みたいなものなんだから。時計塔の二世とアーチボルトの嬢ちゃんには山程貸しがあるから何の問題も無い。加えてエーデルフェルトに行つた桜ちゃんとも会える。魔術そのものを嫌う事になる最悪を考えれば、随分とマシだと思うけども？」

「それはッ……」

魔導を捨てる。

凜を次期当主と定めた時臣にとって、一番有つてはならぬ可能性である。

しかしそんな可能性さえも有り得たと言外に口にする少年に、思わ

ず時臣の顔が青ざめる。

「時坊は致命的なトコで『うつかり』をやらかすからねえ。ガキの頃に治せって言ったでしょう?」

「……………時坊は勘弁してください、アラヤ師父」

アラヤ・トオサカ。

それが突然イタズラ坊主のからかい顔の様な笑みを浮かべた、時臣にとって義叔父と呼べる少年の名前だった。

明らかに中学生程度にしか見えない少年は、しかし六十年以上も前に遠坂家に養子に入った老齢の存在である。

当然時臣よりも歳上であるし、彼が若い頃に大変世話になった人間でもあった。

そんなアラヤは時臣にとって、最も頭の上がない人間なのだ。

そして何より魔術師らしからぬ彼を尊敬する理由が、魔術師らしい魔術師である時臣には存在した。

「兎に角、もう謝罪は聞きたくないよ」

「……………ありがとうございます」

「よろしい。今度桜ちゃんも誘って皆で飯でも食べよう」



遠坂家は、武術によつて根源を目指す者である。

ちよつとナニを言っているのか分からない、頭がおかしいと思うか

もしれないが、遠坂家初代当主遠坂永人は魔術と武術を同等に見ていたとされ、元々は無の境地から根源に触れようとしていたのだ。

その後とある儀式に参加して長らく別の方法で根源を目指していたが、その儀式が破綻したことにより再び魔術を学びつつ拳法で宇宙と同化する道を探っている。

つまり、遠坂家の人間は研究職とも言える魔術師にしては極めて珍しい、武闘派であった。

そしてアラヤはそちらの面でも、遠坂にとっては貴重な存在であった。

「腕を上げたかな？」

「ゼエツ……ゼエツ……。師父も、相変わらず御強い……！」

何故なら彼は半世紀の鍛錬により技術を超え、仙術の範疇に足を踏み入れている達人である。

優雅とは程遠い成りで、地面に倒れ込んでいる時臣をアラヤが涼しい顔で見下ろす。

話の後、最早恒例行事となっていた仕合を行った二人。

結果は一目瞭然で、汗まみれになった時臣に妻の葵がタオルと水を持ってパタパタとやって来る。

しかし時臣の表情に負のソレは無く、まるで憧れのサッカー選手に指導を受けたサッカー小僧の様に晴れやかだった。

優雅云々とはなんだったのか。

だが貴族然としていた時よりも輝いて見えたのは、錯覚ではないだろう。

「――― 処で。今回御帰国なされた事と協会からの依頼を御断りなさった事と、何か関係が？」

「耳が早い早い」

即座に優雅さを取り戻している時臣に呆れるような視線を向けるも、それに時臣は気付かない。

武術で根源を目指しているのに貴族然とする必要性は何処に有るのか。

軽いシャワーで汗を流した二人は、玄関に場所を移し会話を再開さ

せる。

「ユグドミレニアアって知ってるかい？」

「少しだけなら」

——ユグドミレニアア。

魔術協会から離反した魔術師の一族。またの名を『千界樹』とも。

ユグドミレニアアという一族は北欧からルーマニアに渡ってきた魔術師で、決して歴史が浅いという訳でもなかった。

事実、現在の頭目は貴族の縁談を持ちかけられるほどの能力と周囲からの評価があった。

政治能力も頗る高く、実力者が時代の世情によって死んだこともあつてか時計塔が与える最高位の評価である『王冠』を与えられさえした。

時計塔のロード達でさえ『色位』止まりの中、まさに異例である。が、80年前にある魔術師が流した彼らの魔術回路の質に対する確証の無い悪評が広まり、門閥社会から弾かれるようになってしまった。

それにより「魔術師として血を濃くし、初代が選んだ魔術系統を極め、根源に至る」という通常の方法を彼らは諦めねばならず、手段を変えねばならないほど。

そこで彼らは単純に歴史が浅く魔術回路が貧弱な一族、「衰退が始まり魔術回路が枯渇しかけている」一族、権力闘争に敗北し没落した一族、協会からペナルティを受け賞金を懸けられた魔術師など、魔術師社会の中心から弾きだされてもまだ根源への到達を諦め切れないでいる魔術師達の一族を掻き集めたのだ。

尤も、そんな彼等の評価は決して高くない。

「確か、一流魔術師達の一族。一子相伝の魔術師の風上にも置けぬ連中としか」

時臣の言葉がそれを物語っていた。

現在ではユグドミレニアアというミドルネームはそうして吸収された家門を示す名として用いられている。

彼らは魔術刻印すら統一しておらず、かつての家系の刻印をそのまま継承し使い続けている。

そのため扱う魔術系統が幅広く、西洋型錬金術・黒魔術・占星術・カバラ・ルーン・陰陽道など多種多彩なものとなっている。

だが所詮は衰退した一族や歴史の浅い一族の連合であり、平均として二流、稀に一流が出るが多くはそこ止まりで、ダーニツクの工作もあり、貴族たちからは数が多いだけの一族であり脅威にはならないと軽視されていた。

「して、その様な輩が一体？」

「時計塔に宣戦布告した」

「……………はっ？」

時臣が絶句する。

魔術協会に戦いを挑むなど、正気の沙汰であるまい。

一部の例外なら兎も角、ただの二流魔術師が大半を占めているユグドミレニアに勝てる相手ではない。

早々に磨り潰されて終わりだ。

だが、

「連中、大聖杯を持ち出したらしい」

「——まさか」

時臣が息を呑む。

大聖杯とは、時臣の祖父の代まで冬木で行われた魔術儀式の魔法陣である。

万能の願望器である聖杯を求め、七騎の英霊サーヴァントを使い魔として使役し殺し合う戦い——聖杯戦争。

その舞台装置が、七十年前の三度目の戦争の際にナチスドイツが介入、盗まれたことにより、術式が拡散。

世界中で模倣され、小規模で不完全な亜種聖杯戦争が各地で未だ起こり続けている。

そして本来の聖杯戦争の主催者だった遠坂は、元々の武術による根源への模索を再開したのだ。

そんな中消息不明だった大聖杯の所有をユグドミレニアは表明し

た。

そしてその大聖杯を用いると言うことは、サーヴァントを使役していることを意味する。

サーヴァントとは根源の渦の中の『座』より来たる、英霊。

人類史に刻まれた、名だたる英雄たちの影法師。

存在の成り立ちそのものが魔術よりも上にあり、一般に使い魔という単語から連想される存在とは別格の存在。

一般に使い魔という単語から連想される存在とは、そもそも一線を画している。

神話や伝説の中で為した功績が信仰を生み、その信仰をもって人間霊である彼らを精霊の領域にまで押し上げた、人間サイドの守護者達。

どれだけ優秀であろうと、現代の魔術師に勝てる相手ではない。

事実、討伐に派遣された精鋭たちは悉く討ち取られていた。

宣戦布告をするために生き残らせた、唯一人を除いて。

「各地で起こってる小規模の亜種でも、かつて君の祖父が参戦した七騎による物でもない。七騎と七騎、合計十四騎のサーヴァントによる赤と黒の勢力戦——聖杯大戦と」

「魔術協会と聖杯戦争を行うと？　では、師父が断つたという依頼とは」

「時計塔側のマスターとして参戦を求められたよ」

時計塔側、即ち赤のマスターとしてサーヴァントを使役しユグドミ

レニアを打倒せよ。

だが。アラヤは既にその依頼を断っていた。

「何故、依頼をお断りに？」

「私情、かな」

渡された水を飲みながら、まるで戦争に向かう我が子を悼むように表情を曇めさせる。

そしてそれはきつと、比喩ではないのだ。

「二流魔術師の寄せ集め。だけど中には一流もいる。それが偶々僕の患者だったってただだよ」

「なんと」

アラヤは武術の達人であると同時に、屈指の治癒術師だ。

それは破損した魔術回路さえ修復する、修復師としての側面もある。

ユグドミレニアのマスターの一人が、そんな患者の一人だというのだ。

治した患者が人を害するとしたら、医者はどうするか——などと言ったたいそうな話ではないが、彼には思う処があったらしい。

「——もうあの子に、聖杯に望む願いなんて無いだろうに」

外道を嫌悪し善行を尊ぶ。

そんな魔術を行使する存在としては極めて珍しい、しかし平凡な善性を有するこの少年にとって、折角助けた患者との殺し合いなど御免だった。

「ですが師父、貴方にも聖杯に——いや、聖杯戦争に求める願いがある筈では……」

「いいんだよ。亜種聖杯戦争は兎も角、今回の聖杯大戦じゃ彼女はサーヴァントとしての能力をキチンと備えた霊基で召喚されてしまう。それは問題だ」

英霊の中には、勿論現代に喚び出してはいけない存在も居る。

悪辣外道な反英雄は勿論、例えば征服王イスカンダルやモンゴル王チンギス・ハン。

前者はその征服欲で。後者はその人間性から現代にはそぐわない。

特に後者のチンギス・ハンは偉業や能力こそ凄まじいのだろうが、現代に於いてはただの下劣な犯罪者でしかない逸話が多い。

青髭のモデルになった、聖女の処刑を切っ掛けに狂った英雄である悪鬼ジル・ド・レエ。

アメリカ大陸を発見し、しかし先住民をスポーツ感覚で1000万人単位で大量虐殺したコロンブスなど。

そんな者達に勝るとも劣らない非道さと言えば、その程度を理解できらるだろう。

時代が違えば、価値観や文化さえ違っているものだ。

無論、アラヤが懸念する上記ほど狂ったサーヴァントを召喚したい訳では無い。

それでも彼の求める英霊が、現代にはそぐわないサーヴァントであることには違いがなかった。

少なくとも、そんな我欲でその教え子と殺し合いになるなど論外である。

「——では、本題と行こうか」

「師父が御預け為さっていた宝石と魔術礼装でしたら、既に御持ちしています。葵」

「はい」

葵が持ってきた宝石の入った箱と、アラヤは懐から出した包帯を丁寧に巻かれた分厚い石のような形状の物と共に確認しながら、もう一度懐に入れる。

「一応、これも御持ち致しましたが……」

「研究対象を持って行って済まないね」

「何を言うのです。コレを造り上げたのはまさしく師父御自身。それを貴方の御厚意で私が預かっていたに過ぎません」

「てつきり凜ちゃんも持っていったかと」

「……その場合、私が責任を以て誅罰しましょう」

冗談に過剰反応する時臣に苦笑が止まらない。

そんな様子のアラヤが懐に入れるには大きすぎる箱を手にする、まるで手品の様に消え失せる。

「以前紹介した僕の助手を覚えているかな？　僕が創った孤児院出身の」

「ええ」

アラヤは困っている善良な人間を見ると己の力が及ぶ範囲は助けたくなり、そして彼は莫大な資金力を有していた。

時計塔第二の足長おじさんとはアラヤのことである。

そんな彼が時計塔から請け負う仕事は、フリーランスであるが故に基本外道魔術師の討伐などが挙げられる。

そして外道魔術師の工房の中には、研究と称して拉致誘拐され様々

な拷問に等しい処置を行われた子供たちも少なくなかった。

そんな彼らを保護し、育てるために信用に足る人材を選び、経営を任せているのだ。

尤も、度々顔を出したり孤児院の子供達に神秘に関連しない事柄を教えたりと、彼自身も様々な交流を図っていた。

そんなアラヤに救い出された子供たちは当然の如く彼に恩返しを図るも、直接的にアラヤを支えられる様な裏の世界で有用な才能の持ち主はそうはいない。

アラヤ自身はそうでなくても、彼の仕事で多くの死者を生み出す外道と間接的に関わることもあるのだろう。

例えそれが書類上の者だとしても、付いていける人間は間違いなく異常だ。

そんな異常者が、彼の傍に居ることを望んだ子供が一人だけ居ただ。

時臣はアラヤの助手となった、子供から大人になった女性を彼から紹介されて知っている。

「あの娘が表の仕事の最中に連絡を絶った」

「それは——」

成る程、置き手紙を残している凜より遥かに深刻かも知れない事態だ。

だが、その娘が稀有な素養を持たない場合警察に預ける一般案件でもある。

「確かに彼女は魔術の才能は皆無で、神秘関連の素養は無い。

だが、ソレでも護身にと様々な術は教えて来た」

尤も、そんな件の彼女は魔術師では無い。

魔術回路を持たない一般人に過ぎないのだ。

故に、彼女の役目は事務仕事や一般人だからこそ出来る事前調査など。

その娘は如何せん男受けし過ぎる容姿の女性に成長した。

それこそ暴漢や変質者に狙われるのでは、と当時の院長や保育士に心配される程に。

そして幸か不幸か、その娘は魔術以外の才能に溢れていた。鍛えられた彼女は、例え訓練された特殊部隊の隊員であっても、一人相手なら容易く制圧できるほど。

一般の出自しか持たないと言うのに逸脱人と形容すべき一般人。そんな彼女が、暴漢風情に後れを取る訳がない。

であるならば、常識魔術師に対する脅威師しか答えはない。

「では私も使い魔を——」

「いや、始末自体は終わっているんだ」

「そ、そうですか」

アラヤの役に立たんと言合いを入れる時臣だが、出鼻を挫かれ明らかに消沈する。

そんな彼を尻目に、遠坂邸の扉を開ける。

その先には、その消息を絶った娘であろう女性が立っていた。

アラヤが口にした通り、娼婦の様に妖艶でありながら清楚さを兼ね備えた。

まるで良家の令嬢でさえ劣る蠱惑の美女。

問題は、彼女の側にいる二人の少女。

一人目は幼子とさえ呼べる年齢に見える、銀髪の少女。

二人目は金の長髪を三つ編みに束ね、身に着けている服も相俟って学生のような少女だった。

それだけなら、整った顔立ちの美女美少女達に目を惹かれても、それ以上に思うことは無い。

その両者が、人を明らかに超越した魔力を帯びていなければ。

「ッ……!?!」

時臣の喉が干上がる。

魔術師からすれば圧倒的なまでの神秘と魔力の塊が人の形をしているかの様に。

そんな出鱈目な存在を彼は再び眼にし、故に思い当たる名はあった。

「まさか、アレは……!?!」

「どうやらあのウチの子——玲霞を攫った魔術師がユグトミレニ

アのマスターだったらしくてね。召喚の際に呼び出す予定のサーヴァントの事件現場を再現して、縁を強くしようと考えたらいいのだけれど……どうやら、玲霞をマスターとして認識したみたいなんだよ」その言葉を証明するように、玲霞と呼ばれた女性の手の甲には魔力を伴う模様が刻まれていた。

即ち、サーヴァントを御する為の絶対命令権たる三つの令呪。

それは彼女がマスターである証明だった。

「……あれが、サーヴァント」

時臣が呻くように呟く

狼狽する時臣に言葉を紡ぎながら、そんなマスターとサーヴァント達の元にはアラヤが加わる。

「まあそういう訳で、時計塔の依頼を断った手前、胸を張るには思うところがあるけれど……」

一般人のマスターに、殺人鬼のサーヴァント。

裁定者のサーヴァントに、本来あり得ない15人目のマスターというイレギュラーを加え。

「——それじゃあ聖杯大戦、征ってくるよ」

今此処に、第三勢力が英雄達の戦いに参加する。

第一話 それを人は事後承諾と言う。

——六導玲霞の人生に於ける絶頂は、己の保護者である少年に看取られながらの死だと決定している。

玲霞は孤児であった。

裕福な家庭に生まれるも事故によって両親を喪い養子先の里親に虐待を受けていた彼女は、突如家のガラスを突き破って現れた余りにも美しい少年によって救い出されたのだ。

少年のあんまりな登場の仕方です虐待していた両親は呆然。

一言も喋る隙もなく、少年の鮮やかな掌底によって気絶する。

玲霞自身は抱えられ、突然の眠気と共に意識を失い気づけば病院のベッドの上。

そこからはあつという間で、瞬く間に彼が創った孤児院に入院し彼の養子の一人になっていた。

其処には自分と似たような境遇の子供達ばかりで、鮮やかすぎた彼の手際は事実慣れていたからに他ならなかったのだろう。

そこまでは彼に救われた子供の一人に過ぎなかった玲霞は、そして数居る子供と同じ様に彼——アラヤを慕い、憧れた。

恩返しをしたいと訴え、しかし立派に育つことこそが恩返しだと返される。

数多くの子供たちはそこで彼に直接恩を返す事を諦め、そこから財界や警察庁、様々な分野で影響力を持つ一角の人物となって彼を支援した。

だが、幸か不幸か玲霞は飛び抜けて非凡な才能があった。

元々教養に富んでいた事もだが、残酷凄惨極まる人の死を直視しても全く動じない並の魔術師を易々と上回る精神力。それに付随する行動力を彼女は誰に与えられる事無く有していた。

何故ならアラヤに出会い救われた時から、彼の役に立つ事だけが彼女が生きている実感を得られる唯一の行動だからである。

加えて精神力のみならず、深い洞察力と高い戦術眼を訓練もされずに身に付けていた。

あの惨劇を、切り裂きジャックの再現をしなければ意味はない。
あの惨殺を再現せねばならないのだから、なるべく苦しませて殺さなければ。

迷うように玲霞の美しい肢体を伝っていたナイフの切っ先が、豹馬の意思によって定められる。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば……応えよ！」

そう叫びながら、豹馬はついにナイフを彼女に突き立てた。

「っ……い！」

手の甲に突き刺されたナイフによって、玲霞に衝撃が走る。

——嫌だ。

「誓いを此処に。 我は常世総ての善と成る者、 我は常世総ての悪を敷く者」

新たなナイフが左肩口へ。

そして更に次のナイフを豹馬が振り上げた時、傷口から訴えられる激痛と玲霞の思考が一瞬肉体の制御を取り戻させた。

「 汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——

!？」

「い——や……い！」

痛みによって暗示の効力が弱まったのか、或いは彼女が限界を超えたのか。

彼女は右手を貫いていたナイフを貫かれたまま掴み、詠唱に集中し魔術行使による痛みに堪えていた豹馬の頬に突き立てた。

突然襲い掛かった激痛によって絶叫に変わった詠唱。

魔術から一瞬で解放された玲霞は、肩口をナイフで刺されて動かない筈の左手で豹馬の襟首を掴み、彼の足を縛られた両足で払いながら引き摺り倒す様に地面へ投げ飛ばした。

「がッ……!？」

予想外の玲霞の攻撃に泡を吹きながら豹馬に、その意識を刈り取るべく体勢を盛大に崩された彼へ追撃を掛けようとし——豹馬の魔術が彼女の動きを奪った。

「て、手前エ……」

それは物理破壊を伴うようなものではない。

豹馬——相良一族の魔術は代償魔術である。

日本式の呪術系統と西洋の魔術が混合された代償いけにえを利用する魔術系統。

人命を代償に建築物やあるいは人命そのものの安全を確立させる搾取型の魔術は、今回防護手段ではなくその過程によって攻撃とした。

生け贄として生命力を奪われた玲霞は、意思とは別に肉体から力が抜け出し崩れ落ちる。

豹馬が如何に二流で未熟な魔術師といえど、如何に玲霞の精神が超人に近かろうと、魔術に対する抵抗力は素人でしかない。

暗示と傷を負った彼女の動きを一旦止めるには十分だった。

起き上がった豹馬は忌々しげに彼女を睨み付け、そのまま魔術で強化した足で鳩尾を蹴り飛ばす。

彼女が才能に溢れ様々な訓練を受けていようとも、この状態の彼女にそれを防ぐ術は持っていなかった。

「か、はッ……」

彼女の内臓を深く抉ったそれは、致命傷だった。

偶々魔法陣の上に転がった彼女に、魔法陣はまだ変化はない。

触媒となる生け贄が殺人鬼による犠牲者と同数必要なのだ、面倒そうに豹馬は舌打ちする。

しかし、魔法陣の上に倒れた玲霞の胸中にあつたのは拒絶一色だった。

——嫌だ。こんなのは嫌だ。

まだ彼に尽くせていない。

まだ彼にこの身を捧げてもない。

殺されて死ぬのなら、彼によって殺されたい。

彼の命によって、彼の役に立って死にたい。

自分がこのまま殺されれば、きつと優しい彼は哀しむのだろう。それはきつと迷惑だ。

「死にたく、ない」

——こんな所で、彼に迷惑を掛けるだけ掛けて死ぬのだけは御免だッ！

玲霞の瞳から溢れた一粒の雫が、魔法陣に落下する。瞬間、魔法陣を中心に暴風が吹き荒れた。

——生きたいよね？

何とも透明で綺麗な少女の声が、玲霞の頭に響く。

その声に彼女が応える。

死にたくない、死ねないと。

最後に玲霞は、水を何かが滑る音を耳にした。

その音を、彼女はよく知っている。

彼が来たのだと、安堵に包まれながら意識を失った。

第一話 それを人は事後承諾と言う

発光し魔力乱流が魔法陣から迸った時、豹馬は歓喜した。

紛れもなくサーヴァントを召喚出来たのだと。

彼は魔術師としてどうしようもなく二流で、恐らく令呪が発現したが故に急遽マスターとしてユグドミレニア一族から選ばれた者を除けば、ユグドミレニア黒のマスターの中で最も未熟。

故に魔力消費の比較的一番マシな暗殺者アサシンのクラスで、更に霊格が低い数百年前程度の反英雄を召喚しようとしたのだ。

だが、だからこそ召喚にはより強い縁の触媒が必要なのだと。

かの切り裂きジャックを召喚するために、殺人鬼の使用していたと

される凶器と殺人現場を再現した。

それだけでなく、かつて大聖杯が安置されていた冬木の空洞に潜入し、より確実を求めて召喚に試みた。

結果生け贄として偶々目についた女に手酷い反撃を受けたが、もう豹馬は生け贄の事など頭に無かった。

魔力乱流と共に巻き上げられた土煙で人影しか見えないが、それでもその人影からはサーヴァントらしい膨大な魔力を感じさせた。

「……成功？ 成功だ！ やっ——こぼッ？」
しかし。

彼は召喚した己のサーヴァントと誤っている者の姿を見る前に、足跡処か姿さえ見えない何者かに殴り飛ばされた。

下顎が吹き飛ばような衝撃に彼の脳は耐えきれず、その意識を手放す。

そして、その意識が取り戻されることは無かった。



大空洞にて下顎を吹き飛ばされた豹馬を強襲したアラヤは、自己嫌悪に苛まれながら同じく現れた第三者を警戒しつつその足下に存在する玲霞を見ていた。

(肩と手——いや、それより口からの血……内臓か。どちらにせよ、早く診なければ)

玲霞は魔術師ではない。

魔術回路が無い以上、対魔力の礼装を身に付けても起動できない為その効果を發揮できない。

故にアラヤが出来たのは彼女に対する魔力を受けた際に彼女の位置情報を発信するカウンセラー礼装を持たせることだけであった。

魔術師は基本的に魔術回路を持たない一般人に関心がない。

それこそ今回のように生け贄や実験体程度にしか用途がないからだ。

何等かの処置や処理がされる前に駆け付けることは可能であり、事実出来た。

そしてアラヤは特に治療魔術に長けている。

玲霞の負っている傷程度、即座に完治することが可能だ。

(問題は――)

魔法陣から現れた人物。

みすばらしい襪褌で身体を隠した、短めの銀髪にアイスブルーの瞳の少女。

だが、その身から発する魔力は魔術師とは次元が違う。

それこそ、高位の幻想種を彷彿とさせた。

アラヤはその異常性から少女が聖杯大戦サーヴァントであると察する事が出来たのは言うまでもない。

魔術協会側のマスターではない。

先に依頼を受諾していた彼等の名前は聞いてる上、アラヤ自身の仕事で鉢合わせる事で全員ではないがその姿にも覚えがあった。

そもそも転がっている男には、戦闘に長けた魔術師特有の雰囲気が存在しない。

感じる魔力も、精々二流と言った程度。

そんな魔術師がマスターとして魔術協会に選ばれる訳がない。逆に二流という点。

更に召喚に態々生け贄を欲する時点で能力も低い事を現している。ユグドミレニアのマスターと考えるのが妥当だろう。

だが、

「？」

少女は転がった豹馬を見向きもせず、足下の玲霞の傍で跪いた。

「だいじょうぶ？ マスター」おかあさん

そう、彼女に対して口にしながら。

(何——)

「ちよつと待つててね。おかあさん、助けるからね。だいじょうぶ、だいじょうぶだよ」

少女——ジャック・ザ・リッパーは愛おしげに玲霞の髪を撫でる。間違はなく、彼女を召喚したのは後ろで伸びている男豹馬である。

しかし少女はそんな己のマスターに一瞥だけで、もう見向きもしていない。

そんな様子に、アラヤは一つの仮説を立てた。

それは、玲霞こそが彼女にとつてもマスターなのではないか、というものである。

「少し良いかい？」

「——え？」

アラヤに声を掛けられたジャックが、ギョツと振り返る。

そう言えば姿を完全に消失させる『圏境』を解いていなかった、と今更ながら姿を現す。

これは魔術理論ではなく瞑想の極意・体術による透明化なので、魔術理論に生きるものには絶対に感知することができない。

拙いながら結界を貼っていた豹馬が、欠片も気付かず殴り飛ばされたのはそれが理由である。

そしてサーヴァントであるジャックも、それを看破する能力は保有していない。

寧ろ暗殺者処か殺人鬼でしかない彼女に、そんな武の極致を看破できる方がおかしいというもの。

そんな完全に意識外からの問い掛けに、ジャックは檻樓の下のナイフを取り出し、反射的に構えて——忘我した。

「あ……、あう……」

「ぬ……」

余りの美しさに、心奪われる——そんな様子だった。

それは、アラヤと初対面の人間ならばほぼ必ずする反応である。

こればかりは彼の正体に関わるものなのでどうしようもなく、これこそ専用の魔術礼装で人には影響を少なくしているのだが、しかし目の前にいるのは本質的には人の上位存在。礼装が幽霊や幻想種までは効果を与えられないように、彼女はその対象外だったようだ。少女と関わり続けるのなら修正しないと——そんな思考を、即座に打ち切る。

こうも会話がワンテンポ遅れるのは面倒だが、何より今は一刻も速く玲霞を治療しなければならぬ。

そう考え、呆然としているジャックの前まで歩き、膝を付いて目線を合わせる。

子供とのコミュニケーションの初歩だ。

「その、君がマスターと呼んだ女性は俺の大切な助手でね。出来れば直ぐに治療したい。構わないだろうか」

「う——え、と……綺麗なおにいちちゃんは、お医者さんなの？」

「いいや、魔法使いだよ」

惚けるように答えたアラヤは、懐から薄く赤みがかった液体の入った試験管を取り出す。

それを、何の躊躇もなく横たわる玲霞の豊満な胸に溢した。

悪意の無さ、そして玲霞に対する慈しみを無意識に感じ取ったのか。

ジャックは止める事なく、不思議そうにアラヤの手元を見る。

「これは僕の血を混ぜた綺麗な湧水でね。水との適性の高い僕には、丁度いい触媒なんだよ」

すると水が溶けるように玲霞の中に染み込み、同時に玲霞の傷が逆再生の様に癒えていった。

青褪め死へと確実に近付いていた玲霞の肌は赤みを帯び、それ処か更なる肌艶さえ与えていた。

異常な美容効果は、完全に意図しない副産物である。

「すごい——」

「それはどうも有り難う、でもこれで一旦山場は過ぎた。後は君をど

うするか、だ」

「私達を？」

サーヴァントは基本的に全盛期の姿で召喚される。

それが精神における全盛期か、肉体における全盛期かに別れるが、子供姿のサーヴァントだからと云って本当に子供であることは殆ど無い。

それこそ出自自体が特殊な英霊のみの例外だ。

「僕はアラヤ・トオサカ。君の名前は？」

「ジャック・ザ・リッパー。ジャックでいいよ、アサシンでもいいけど」
「倫敦の殺人鬼——いや、ならジャックと呼ばせて貰おうかな。僕もアラヤで構わないよ」

しかしどうやらそんな例外に、アラヤの目の前の少女は該当するらしい。

ジャック・ザ・リッパーは未だ正体不明の殺人鬼。人類史のブラックボックス。

こんな小さな子供が猟奇連続殺人鬼だとするならば、様々な切り裂きジャックの噂や伝説の一つがサーヴァントとして召喚されたのだと見るべきだろう。

可愛らしい子供そのものの仕草の彼女はアラヤから見ても微笑ましく、頭を撫でれば擦ったそうに頬を緩める。

しかし殺人鬼として召喚されたのならば、その内には恐るべき残酷性を秘めているだろう。

どちらにせよ、放置という選択肢は彼には無かった。

「どうやら君は玲霞をマスターと定めている様だ。けど、残念ながら彼女は魔術回路を持っていない。現在君を維持しているのは彼処に転がっている魔術師だ」

冷たい岩の地面から玲霞を抱き上げながら、それより遥かに冷たい視線でアラヤは豹馬を睨む。

娘、いや孫同然の助手を拐われ殺され掛けたのだ。そんな下手人に掛ける情けは無い。

「君はアレをどうするんだい？」

「ああ、うん。連れていきたいかな。後で必要になる」

「必要？ 僕としても色々吐かせてから処分するつもりだけど」

「だって、令呪が勿体無いからね」

「成る程」

令呪。

それは聖杯からマスターに与えられる、自らのサーヴァントに対する3つの絶対命令権にしてマスターとしての聖杯戦争の参加権でもある。

その一画一画が膨大な魔力を秘めた魔術の結晶であり、戦略上の理由や、そもそも聖杯戦争への参加を拒むなど、何らかの理由でマスターであることを自ら放棄することは出来るのだ。

そのため、令呪はマスターの意思で他人に譲渡することができない。難しい手続きは必要なく、特にペナルティもない。

そしてマスター自身の意思によらずに、他人から令呪を剥奪することも可能ではある。

「剥ぎ取る前に殺しちゃうと、消えちゃうもの」

豹馬の後の生死に関わらず、彼を回収する必要はあった。

だがそれは同時に、ジャックが彼をマスターとして認めていない証左でもある。

やはり彼女は玲霞をマスターとするつもりだ。

まだアラヤの問いに答えていないが、どちらにせよ彼女には己をサーヴァントとして現界し続ける為にそれこそ莫大な魔力が必要だ。

現界維持の魔力がマスターに無いのなら、他から持つてくるしかない。

（魂喰いか―――）

他者の精神と魂を喰らい、己が糧とする。

生粋のソウルイーターであるサーヴァントは、確かにそうすることで魔力を確保できるだろう。

合理的ではあるが、しかし問題である。

魔力を欲するならばより多くの魔力を持つ魔術師を優先的に狙うだろうし、彼女が聖杯を欲するならば必然聖杯大戦の舞台であるルー

マニアに向かうだろう。

そんなユグドミレニアの管理下にある土地で、神秘の隠匿など関心の無さそうなジャックが魂喰いを行えばどうなるか。

神秘の隠匿の為、両陣営からの駆除である。

アラヤにとつて家族である玲霞をそんな危険に晒すわけにはいかない上に、ジャックはサーヴァントと断言するには余りに幼い。

「仕方が無い、か」

ならばアラヤの出来ることは、魔力供給を肩代わりすることだろう。

そうなれば魂喰いの必要は無い。

それに唯でさえ今回は勢力戦なのだ。

数百年前の殺人鬼が、ユグドミレニアや魔術協会が用意する選りすぐりのサーヴァントに勝てるとは思えない。

加えて通常の聖杯戦争の様に、聖杯を起動させるのにサーヴァントを全て倒す必要もない。

最後に漁夫の利を狙うことは難しいだろう。

無論ジャックの願望にもよるだろうが、彼女には聖杯を諦めて貰うしかない。

それこそ、代わりに現世に於ける第二の生を謳歌して貰って。

玲霞やジャックを護りつつ、教え子と殺し合いを回避するにはそれしかないだろう。

「——あれ？ アラヤおにいちゃん。その手……」

「手？ ——づっ」

刺すような痛みが、アラヤの手に走る。

玲霞を抱えながら痛みの出所である手の甲を流し見て——息を呑む。

「令呪、だつて？」

咄嗟に、ジャックが引き摺る様に運ぼうとする豹馬の手の甲を見るも、彼の令呪は健在だった。

そもそもアラヤに令呪が現れる筈がない。

1回の聖杯戦争で計21画。聖杯戦争が近づくにつれ、聖杯によつ

てマスター候補7名に3画ずつ分配されていく。

マスターの資格は、聖杯自身が「相応しい」と見込んだ者にこそ与えられるのだ。

この基準がどんなものなのかは定かではないが、単に魔術師としての技量のみを基準としているわけではない。

元々、聖杯戦争自体が外から魔術師をおびき寄せる口実であることもあって、自ら聖杯戦争に参加することを望む者には、優先的に授けられるようなのだ。

分配は基本的には、聖杯のある都市に存在する魔術師に分配される。

故に、魔術協会は七人のマスターを用意。ルーマニアの都市でありユグドミレニアの根城。

何より聖杯大戦の仮想戦場であるトゥリファスにマスターを向かわせる事で令呪を獲得させようとするのだ。

大戦に参加する依頼を受けた魔術師ならば、まず間違いなく令呪を得られるだろう。

だが、それにはルーマニアのトゥリファスに向かわねばならない。

その条件を超えるほどの聖杯への執着を持つていない以上、現在冬木に居るアラヤに令呪が発現する訳が無いのに。

それこそ、大聖杯自体がアラヤを名指しでもしない限り――

大聖杯が奪われた事を如実に現す大空洞に空いた大穴から、闇夜を照す月の光が射し込む。

豹馬の用意し、ジャックが召喚された魔法陣に再び輝きが宿り、再び超常の存在を世界に呼び込んだ。

ジャックのように人類の負の落とし子ではなく、紛れもない人から昇華された英霊。

戦場に於ける御旗。人々を魅了し奇跡を為した英雄。

「――サーヴァント裁定者^{ルーラー}。聖杯の呼び声に従い、召喚に応じ参上しました」

紫を基調とした服に、彼女が戦場に立っていたことを示す銀の甲

胃。

一つの三つ編みに纏められた長い金髪が、魔力風に靡いていた。しかし彼女の醸し出す気配は英雄というには余りにも清廉で――

斯くして、15騎目のサーヴァントは召喚された。

紛れもない、アラヤのサーヴァントとして。

「我が真名はジャンヌ・ダルク。マスター、共に聖杯大戦を護り、司りましょう」

そう、例えアラヤの預かり知らぬ話であつても、現実には揺らがない。

「えっ、知らない」

「――え？」

こうして、本来有り得ない15人目のマスターは誕生した。

第二話 裁定者のサーヴァント

——裁定者のサーヴァント。

いわゆる、エクストラクラスの一つである。

その特徴は通常のサーヴァントと異なり、マスターではなく聖杯自身に召喚され『聖杯戦争』という概念そのものを守るために動く、絶対的な管理者であること。

即ち、選手ではなく主催者側のサーヴァントである。

基本的には部外者を巻き込むなど規約に反する者に注意を促し、場合によってはペナルティを与え、聖杯戦争そのものが成立しなくなる事態を防ぐためのサーヴァント。

そのため現界するのにマスターを必要とせず、「中立の審判」として基本的にどの陣営に組する事もない。

——その筈、だった。

ホテルの一室で、ルーラーのサーヴァントであるフランスの聖女ジャンヌ・ダルクと、仮称そのマスターであるアラヤ・トオサカ。アサシンのサーヴァント、ジャック・ザ・リッパーとそのマスターとなった一般人、治療された六導玲霞。

彼女の右手には、豹馬の持っていたマスターの証したる令呪が移植されていた。

ちなみに移植したのはアラヤである。

ジャックも移植自体は可能だが、彼女の移植技術は19世紀相応のもの。

見た目の保証は出来はしない。

「さて、つまりどういうことだっただよ」

「イレギュラー、と判断すべきでしょう」

ルーラーは現在通常のサーヴァント同様マスターを持つサーヴァントとして顕現していた。そのマスターはアサシン召喚の際に受けた傷の後遺症など欠片も見せず、人数分のカップを運んできている玲霞ではない。

アラヤをマスターとして、彼に依存する形で現界しているのだ。

同時にアサシン——ジャックの魔力供給も肩代わりしている彼の魔力量に驚嘆する間もなく、ルーラーは頭を抱えていた。

「つまり大聖杯は貴方の了承を取ることさえ無く、問答無用で私のマスターに仕立て上げた」と

「まあそういうことになるね。あ、有り難う。って玲霞、病み上がりなんだから無理しない」

「私はもう大丈夫です。はいジャック、暖かいココアよ」

「ありがとうマスター！」おかあさん

「加えて、魔術師ではない一般人をマスターとするサーヴァントですか……」

聖杯戦争に一般人を巻き込む。

魔術師としては神秘の隠匿さえこなしていれば、そう目くじらを立てられるものではない。

だが、今回は調停者としてルーラーのサーヴァントが召喚されている。

そしてその多くは、本来聖杯戦争に召喚できない聖人が該当する。

そんな聖人が神秘の隠匿がなされているからと言って、一般人の犠牲を許容する訳がないのだ。

本来のユグドミレニア黒のアサシンのマスターである相良豹馬の処理は速やかに行われた。

豹馬より遥かに上の技量を持つアラヤに徹底した暗示をかけられ、洗いざらい情報を吐かされた彼の末路は語るまでもない。

そして一般人の犠牲を強いた豹馬に、ルーラーの保護を受ける権利は無かった。

そうして令呪を安全に移植された玲霞は名ばかりではあるがマスターとなり、魔力供給をアラヤが肩代わりすることで黒のアサシン、ジャック・ザ・リッパは現界を続けている。

変則的ではあるが、マスター二人組による陣営と言えるのだが、問題はその片方がルーラーのマスターに成ったことだった。

本来ならばルーラーに人間のマスターなど存在しない。それは公平性を欠くからだ。

「だけど現にルーラー、僕と君とに魔力パスは通っている」

「はい……私も貴方からの魔力供給を感じています」

全くもって不可解である。

だが、その不可解こそがルーラーの召喚に関わることなのかもしれない。
「ルーラーは本来、大きく分けて二通りの事例で召喚されます。一つは、その聖杯戦争がその枠を逸してしまうほど大規模な場合です」

そしてもう一つは、『聖杯戦争によって、世界に歪みが出る場合』である。
「勿論、今回の聖杯大戦は前者に該当する大規模なモノ。しかしマスターを有さない筈のルーラークラスに、マスターが存在するというイレギュラーが発生しています」

「つまりルーラー、君が召喚されたのは後者である可能性が高い、と」

ルーラーは勝利者が叶えようとする願望に例えそれが我欲による物であろうとも干渉しない。

だが『世界の崩壊を招く』類の願いは絶対に許容せず、聖杯戦争によって世界の崩壊が理論的に成立すると見做された時点でルーラーは召喚される。

「恐らくこのイレギュラーは大聖杯の何等かの不具合か、あるいはそうせざるを得ない事態が起こりうると大聖杯が判断したのでしょう」
「……考えたくないな」

ならば、何故アラヤを選んだのか。

60億の人類の内、何故態々彼を選んだか。

「どこのつまり、僕はルーラー——事実上の第三勢力として聖杯大戦に参加しなければならぬ。ということだね」

「はい……」

アラヤの言葉を肯定するルーラーの顔色は良くない。

聖杯大戦に参加することを拒んだ彼を、ルーラーや聖杯が無理矢理巻き込んだ形に等しい。

加えて、ルーラーのマスターとしてこの聖杯大戦で得られるモノは

何も無いのだ。

彼に報酬などなく、実質的には徒勞である。

場合によっては、死さえ起こりうる戦いに参加するというのにも関わらず。

「まあ、審判役が賞品に手を出す訳にはいかないからね」

「本来貴方をマスターとするにしても、その前に同意を得るのが道理というもの。ですが私は貴方を問答無用で危険な戦いに巻き込んでしまった。謝って済むものではありません」

「まあ、イキナリで驚いたのは驚いたけどね」

しかし、その声色に拒絶や後悔は感じさせていなかった。

それはまるで、渡りに舟と云わんばかりのもの。

「何、そう暗くなる必要は無いよ。ルーラー」

「……？」

「何せ僕は元々この聖杯大戦に関わるつもりだったしね」

「え」

事実、アラヤにとってルーラーとの強制契約は酷く都合が良かった。

「実はユグドミレニアのマスターの一人は、間違いなく僕の教え子だからだ。一族の柵に囚われそんな戦いに参加してしまうのだから、心配にもなる。何より、今回の聖杯戦争は僕自身見過ごせない理由がある」

「理由、ですか？」

「諸事情でね。僕は二つの陣営に所属せずに大聖杯の行く末を、最後まで見届ける義務がある。その為に僕は片方の陣営で、聖杯を欲するサーヴァントを召喚するわけにはいかなかったんだよ」

アラヤは少し目を細めるといふ、ただそれだけの挙動をする。

外見上変化は無く、しかしルーラーにとっては劇的であった。

「自己紹介が未だだったね、今の僕の名前はアラヤ・トオサカ。アラヤで構わないよ。宜しくルーラー」

「……！ 貴方は——」

ルーラーの瞳が驚きに見開かれる。

マスターとして彼女のステータスを視ていたアラヤは、ニカツとイタズラ坊主の様に笑った。

ルーラーとしての彼女の眼に映るモノが、アラヤの言葉に納得を与えるものがあつたのか、静かに眼を閉じる。

それは、何故己のマスターが彼女のかへの理解があつた。

「——解りました。だからこそ誓いましょう、私はサーヴァントとして必ず貴方を護り抜くと」

「無論その為に自己犠牲を、何てし出したら是非でも止めさせて貰うからね。ソレを僕と君との約定としよう」

それは彼女の第二宝具の禁止を意味していたが、はたして。

静かに跪き、聖旗を捧げる聖女はここに契約を立てる。

それはまるで、絵画の一枚のようで。

ジャックはその光景に見惚れ、玲霞はそんな彼女を微笑ましく見守っていた。

第二話 裁定者のサーヴァント

一夜が明け、ルームサービスで運ばれた食事を取る四人。

因みにアラヤが別室で寝ようとするのを、玲霞と何故かジャックは是が非でも阻んだ。

外見的にもジャックはアラヤの妹の様で、ジャンヌは彼の姉に見える。

玲霞に至っては、その何処か憂いを帯びた雰囲気から訳ありの年若

い母親の様に見えていた事から、ホテルの従業員が動揺することはあっても不思議に思うことはなかった。

実際は女子高生ほどの年頃の娘を侍らせる六十を超えるいい歳のシヨタジジイと、その孫同然の義理の娘にその娘を母と慕う幼子というカオスなのだが。

「——加えて助手がマスターになってしまったのも大きい。今は僕が魔力供給を肩代わりしているけれど、玲霞は魔術師じゃあないんだ。僕が魔力供給を肩代わりしなかった場合、ジャック。君はどうしていたんだ？」

「人から貰うんだよ。心臓を抉り取って、食べるの」

「……………成程」

鎧を解いたルーラーが、ベッドの上で頭を押さえる。

ルーラー的にも、完全にアウトだった。

属性が混沌・悪のジャックは悪人である方がより魔力の吸収効率が高いため良いのだが、そんなことは気休めにもならない。

生命力を搾取する魂喰い処か、物理的に補食している。

そして、心臓を補食され生きている人間などそうは居ない。

何よりも肝要なのは、そんな行為を平然と行うであろう彼女が聖杯に何を願うのか。

否。仮にどんな願いだとしても、ソレ以前の問題が存在する。

「僕はルーラーのマスターとなった。つまり基本中立の立場に立つてしまったんだ。だから君が聖杯を求める場合、僕は君に魔力を供給することが立场上出来無くなるんだよ」

「え？」

それに加えて難題なのが、そうなった場合ジャックは魂喰いを行う以外に現界の道はなく。

しかしそれをすれば、調停役でもあるルーラーの処罰対象になってしまうのだ。

完全に詰みである。

「……………どうしようっ！」

道に迷った子供の様に、ジャックはマスターである玲霞の腕に縋り

付いた。

そんな彼女を抱き締める玲霞は、ジャックの髪を撫でながらアラヤに向き直る。

「どうにかありませんか?」

「二つ選択肢はある。一つは、何処かの魔術師とジャックが再契約することだ」

「!」

そうなれば彼女は魂喰いなどする必要なく、聖杯大戦に参加することが出来る。

しかしそんな選択をするならば、ジャックは豹馬の処分を止めていた筈だ。

だが、その処分を最も積極的に行ったのは他ならぬ彼女である。

何よりも玲霞をマスターとして定めるジャックにとって、別のマスターなどあり得ない。

当然そんなことは、一晚彼女と過ごした三人も良く解っている。

「二つ目は、聖杯を諦めることだ」

ルーラー陣営の庇護を受けるということは、聖杯を求めない中立の立場に立つ必要がある。

加えて調停役の役割を持つ以上、その陣営に所属するには聖杯を諦める必要があるのだ。

それは、聖杯大戦からの棄権を意味している。

「ねえジャック、貴女の願いは何?」

「おかあさん……」

サーヴァントは英霊にとってしばしば第二の生と表現されることがあるが、彼女はそれに該当しない。

透明のようで、幾つもの瞳の彩飾が混ざり合った様なドロドロのジャックの眼は、一つの願望を口にした。

「わたしたちはね、おかあさんのところにかえりたいの」

「母親の元に?」

ルーラーの復唱に、しかしジャックは首を横に降る。

「おかあさんの、おかあさんのなにかえりたいの。あそこは、とつて

もとつても居心地がよかったから」

「胎内、回帰——」

ジャンヌが目の中のサーヴァントの正体を悟り、戦慄するように眩く。

それは、当時19世紀の余りにも拙い墮胎手術によって、文字通りゴミのように捨てられ産まれること無く死んでしまった赤子達の集合体であるジャックにとって、唯一求める安らぎの場所だった。

否。そこしか知らない彼女は、ソコを求める以外に何も知らないの
だろう。

「……………」

「マスター、これは…………」

しかし、ルーラー陣営の二人の顔色は悪い。

それは彼女の願いの、その無意味さを理解しているからに他なら
ない。

「こういうことは言いたくないんだが……。ジャック、恐らく君の願
いは聖杯でも——聖杯だからこそ叶わない」

「え——」

彼女の正体が『名前も与えられることなく命を摘み取られていつ
た、数万以上の見捨てられた子供たちの怨念』が『切り裂きジャック
の伝説』として取り込まれた故のサーヴァントであるならば、それは
最新新しく生まれた存在である。

故に因果的にも生物学的にも彼女の母親は、存在しない。

存在しない母親の胎に還ることは、如何に万能の願望器と云えど不
可能である。

「そんな…………」

「だから、僕が呈示できるのは次善策でしかない」

「え？」

己の願望が叶わないのだと断言され、顔を俯かせるジャックは、ア
ラヤの言葉に顔を上げる。

「ジャック、君は奇跡の様な存在だ。ジャック・ザ・リッパーが真に人
類史のブラックボックスとするならば、君はきつとこの聖杯大戦で消

滅すれば他の聖杯戦争に呼ばれることは無い。人と同じ、唯一の生だ。ソレを賭けるには、君とルーラーの能力の相性は最悪過ぎる」
ステータスはクラス的に言うに及ばず、何よりもジャックの宝具は呪いの類いだ。

しかしルーラー、オルレアンの聖女は呪いへの耐性が余りに高過ぎる。

仮に何等かの方法でルーラーの神明裁^{令呪}決から逃れられても、戦闘に於いて勝ち目は万に一つも無い。

「君が求めるのならば、僕は僕が生きる限り君への魔力供給を続けよう。何、魔力量には自信があつてね。サーヴァントの一騎や二騎、魔術行使に支障はないさ」

「本当？」

「こんな嘘をつく必要は無いよ。ただし、それは君が聖杯を諦め、人道的に許されない悪を行わない場合だ」

「むむむ？」

「悪いことを、と言われても属性が混沌・悪の世界一有名な殺人鬼は困惑するしかない。」

「君は玲霞と一緒にいて楽しくなかったかい？」

「ううん、おかあさんと一緒にいるのは、楽しいし嬉しいよ。アラヤおにいちゃんと一緒にだと、おかあさんも楽しそうだし嬉しそう。だからアラヤおにいちゃんと一緒にいるのは、わたしたちも楽しいし嬉しい。でも——」

「でも？」

「わからないから。わたしたちは何がダメで、何が正しいのかわからない。きつとみんなを傷付けちゃうこともあるよ？」

「なら、これから学んでいけばいい。君は真の意味で生まれたての子供だ。子供は教え、育てられるものだからね。その為に、君にとって役立たずな聖杯へ賭けるには余りにメリットがないだろう」

「……」

アラヤが呈示したモノは、つまり未来である。

それはジャックがついぞ与えられなかったものであり、そんなもの

を呈示されれば彼女は手を伸ばさずには居られない。

「……………」

暖かい食事と優しい『おかあさん』に、色々な事を教えてくれる『きれいなおにいちゃん』。

そして厳しくも優しい『せいじよさま』。

今の彼女に、不満はなかった。

そしてジャックは子供だとしても、決して愚かでも無ければ頭が悪いわけでもない。

彼女はキチンと理解していた。

ソレ以外に、選択肢など無いことを。

故に解答は決まっている。

「わかった。聖杯は、あきらめる。だって、わたしたちは此処に居たいから」

「——決まりだ。僕はルーラーのマスターとして、君とそのマスターを庇護しよう」

「無論、ルーラーのサーヴァントである私もです」

黒のアサシンの、聖杯大戦の棄権。

それに伴いルーラー陣営への加入が決定した瞬間だった。



「——なんて、良くもまあ話が纏まったものだ」

「見事でしたよ？ それに、黒のアサシンにあれ以外の選択肢が本当に有りませんでしたから」

地上より遙か高空。

ルーマニア首都ブカレスト行きの旅客機の中で、ルーラー陣営のメンバーは其々空の旅を楽しんでいた。

特にジャックのはしゃぎ様は周囲の客が微笑ましく目尻を下げさせる程だ。

無論、それを迷惑に思う客も確実に存在するだろうから、そんなジャックを見事宥めている玲霞の手腕は本当の母親の様だった。

「態々私達の席まで用意して貰わなくても……霊体化すれば、不要な出費だった筈」

「それぐらいの甲斐性はあるさ。金銭面で君が心配する必要は無い程度には持っているからね。それに——」

そんなジャックと比例するように萎縮するように肩身を縮めているルーラーの視線は、しかし上空を飛行する旅客機から一望できる地上と海の風景に釘付けだった。

「君達に見て欲しかったんだ、この空からの光景を。いやはや、楽しんでうで良かった」

「……ありがとうございます」

おおよそ西暦以降の英雄が見たこともない景色。

人が地に増え、海を渡り、空を裂いた事で得た光景。

それは人の英雄が心動されるには、十分な物なのだった。

尤もこの光景を見る前に、ジャックがアラヤの事を「お父さん」と呼び出して一悶着あったのだが。

「僕としては呼ばれ慣れてるから、あまり抵抗は無いけれどね」

「衆目を考えてください……」

玲霞を母と呼び慕うジャックがアラヤを父と呼び慕えば、ルーラーというよりも周囲の人間が真つ先に眼をひん剥いたのだ。

外見が中学生程度のアラヤと、二十代前半の玲霞の関係を下世話に邪推するのも無理はない。

更にソレに懐かしきでも感じたのかアラヤが玲霞を娘と呼び、ソレに悪乗りした玲霞が父と呼びながら抱き着き出したのだから混乱は加速し、ルーラーが三人を引っ張りその場を後にしなければどうなっていたことか。

そんな空の眺めに眼を輝かせているジャックと、隣で微笑む玲霞。二人の背後の席に、ルーラーとアラヤはルーマニアでの方針を纏めていた。

「ルーマニアに着いたら、一度彼女達と別れるのでしたね」

「ああ。玲霞達は聖杯大戦から既に降り、ルーラー陣^{自分達}が保護した事を赤側にもキチンと認知して貰う必要があるからね」

彼女達には聖堂教会の監督役の元へ向かい、それを赤側に認識してもらわねばならない。

何せ今回の監督役は赤のマスターを兼任している。

そんな監督役には、聖杯戦争を棄権したマスターを保護する役割も義務付けられている。

聖杯大戦という最大規模の聖杯戦争の被害を最小にしたい聖堂教会にとって、ユグドミレニア側の陣営からの棄権組の発生は監督役としても赤のマスターとしても歓迎するものであるのだから。

「それまでに、赤のサーヴァントに襲われる可能性も考えましたが……」

「昼間に向かえばいい。聖杯戦争の基本原則である神秘の隠匿を、他ならぬ魔術協会のマスターが損なうだろうか？」

加えて、そもそも玲霞は魔力を持たない一般人。

アサシンの気配遮断で身を隠してもらえば、令呪さえ隠せば例えジャックを感知できるほどのサーヴァントが赤の陣営に居たとしても、襲われることはありはしない。

「私達は黒の陣営に事の次第を説明、ですね」

「まあ色々言われるだろうけど、自分達の陣営のマスターの制御ぐらいして欲しい物だよ」

魔術師の理不尽の犠牲になるのは、常に一般人である。

それが自分の身内ならば尚更。

魔術協会はそろそろ本格的に神秘の隠匿を根本から見詰め直すべきだろう。

ソーシャルネットワークの普及により、唯でさえ難度は格段に上がるのだから。

「そして同時に、大聖杯の不備の確認ですか」

「そりゃシステム側がバグってる可能性も無いわけでは無いからね。その場合も想定しないと」

「大聖杯に問題が無かった場合は……」

「面倒な事になるね」

冬木の地脈に繋がっていた大聖杯を無理矢理強奪し、ルーマニアという別の土地で聖杯戦争を起こした際に何等かの不具合が生じたのかも知れない——など、その程度の異常なら全く問題ない。

しかし、ユグドミレニア側が大聖杯をこそ象徴として魔術協会に対して宣戦布告をしたのだ。

その要の大聖杯に異常など、あり得ないだろう。

ならばルーラーが召喚された理由は、参加者にあると考えられる。「その場合、マスターとサーヴァント一人一人と会って動機と、聖杯戦争の枠を超える宝具の所持。及び使用する可能性の有無の確認をしていかないといけませんから」

「その場合、サーヴァントよりマスターの方が余程可能性があるから、気を付けないと。前にエライ事になりかけたから」

最悪な事例としてあるマスターが過去の亜種聖杯戦争を利用し、とある『大蜘蛛』を目覚めさせようと画策した事もあった。

目論見こそ失敗したが、もし成功していれば現行人類は滅んでいただろう。

それをこそを防ぐことが、ルーラーの役割なのだ。

故に、ルーラーには其々の規準ではあるものの公平性を求められる。

ルーラーの適性者が、聖杯に対する願望を持ち得ない聖人なのはコレが理由だ。

だからこそ、そんなルーラーを従えるマスターのイレギュラーさが浮き彫りになる。

「……本当に、貴方には何と謝罪を言えば良いか……」

「君だつて似たようなモノだろう？　というか、この話は何度もした筈だよ」

「しかし……」

「君、本当に頑固だねえ」

世界で最も有名な聖女、オルレアンの乙女。

そんな彼女のめんどくさい、しかし人間らしい一面をアラヤは苦笑しながら堪能していた。

第三話 聖杯大戦、開幕

ルーマニアの首都、ブカレストのアンリ・コアンダ国際空港に到着したルーラー一行は、聖杯大戦の主催者であるユグドミレニアがセカンドオーナー管理者であり、仮想戦場であるトゥリファス——と隣接している街、中継地点で今回の聖杯大戦における監督役がいるであろうシギシヨアラを指す予定である。

より正確には、予定だった。

空港から出て、タクシーかバスで移動しようと考えていたルーラーとアラヤが、無遠慮な視線を感知した。

それは無数の鳩によるものである。

「使い魔、加えて遠見の魔術ですか。……マスター？」

「よりにもよって鳩か……」

「どうしました？」

「鳩を使う魔術師に、昔コレでもかと言うほど苦労してね。ちよいと過敏になつてただだよ。にしても——」

遠くのものや場所を視る魔術は大まかに二つ。

水晶や水鏡などを通した、何かしらの媒介さえあれば安全な場所からの見張りが出来る汎用魔術、遠見。

もう一つは小動物や肉体の一部を魔術加工することで擬似的な生命として作り上げる魔術である。

広義的には聖杯戦争のサーヴァントもコレに分類され、主人とライン因果線を結ぶことで五感を共有することが可能になる。

しかしその鳩達には使い魔特有の、ある種の知性と言うものが感じられなかった。

彼等は明らかに使い魔であるというのに、一体どういうことか。

暗示を掛けたにしてはコストが懸かり過ぎている。

しかしその鳩達の様子に覚えがあるのか、あるいはデジャブしたか。

アラヤの表情が険しくなる。

「これは……マスター？」

「……………」

ルーラーを視ていたであろう鳩達は、その視線をアラヤに釘付けにしていた。

その視線の感情は呆然とさえ感じさせている。

直後、直ぐ様鳩は飛び立ち、視線も消えた。

「どちらの陣営でしょうか」

「難しいな……あんな方法で鳩を使うマスターは赤に居ない。ならば後はサーヴァントだ。一応後でウェイバーに連絡してロツコ君に繋げてもらう。それに触媒の種類が判れば、赤の陣営のサーヴァントが大体絞れる」

「なんだか嫌な予感がするから、じゃけん魔術協会から教えて貰いましょうねー。」

ルーラーという聖杯を求めない第三勢力という立ち位置であり、協会上層にコネを持つアラヤだからこそ出来る反則である。

「となれば……私達は赤のサーヴァントの情報を待ちつつ、マスター達の居場所がわかつているユグドミレニア城塞に早く向かうべきでしょうか」

「啓示は？」

「いえ、まだ」

目的に到達するための道筋を啓示という形で取得できる、根拠が無いためカリスマスキルが無ければ他者に説明する事に難儀する、聖人に許されたスキル。

そんな都合の良すぎるその発動の兆しは、未だ無かった。

ふーむ、とルーラーの返答に顎に手を添える。

「これは玲霞達とは早々に別れた方が良いかな？」

「っ、どうしてですか？ 赤の陣営に襲われる方が一の可能性を考慮して、私達もシギシヨアラに向かう予定だった筈なのに……」

それは玲霞が相良豹馬に拉致された事によるものだった。

アラヤ自身、拐われて間もない彼女を一人にすることに抵抗があったからだ。

だが、彼女の安全を考えれば考慮しなければならない可能性があつ

た。

「ルーラー、この聖杯大戦に於ける各陣営最大の不確定要素はなんだ
い?」

「不確定要素、ですか」

強いて挙げるならば、それはアサシンであると考えた。

サーヴァントは召喚者を初めから見捨てており、一般人をマスター
に選んでいる。

黒の陣営にとってこれ以上無い不確定要素と言える。

いや、それはあくまで黒の陣営にとってに過ぎない。

全体となると、所詮暗殺者でさえない殺人鬼程度どうとでも出来る
のではないか?

そもそもジャックに勝ち目がないからこそ、彼女はルーラー陣営に
参画したのだから。

居るではないか、これ以上ない両陣営に甚大な影響を与えかねない
存在が。

「……まさか」

「そう、僕達ルーラー陣営だ」

聖杯大戦を調停する絶対管理者。

これを不確定要素と言わずに何と言う。

「な、何故です。ルーラーは味方に引き込むのなら兎も角、攻撃するメ
リットは——」

「神秘の秘匿さえすれば何でもありの残虐ファイト。それが聖杯戦争
だよ?」

「!」

それこそ秘匿さえ守っていれば一般市民が何十何百死んでも考慮
に入らない、それが魔術師だ。

そんな魔術師達の殺し合いに一般市民への配慮を優先し戦争の調
停役を名乗る聖人。

魔術師にとって、これほど面倒な存在は居ないだろう。

邪魔な存在だと判断し、排除に乗り出す可能性は十分に存在するの
だ。

「勿論そんな事にならない可能性もある。あくまで魔術師だから戦略や戦術は魔術師らしい名誉を求めた展開になるかもしれない」

ユグドミレニアは正にこれだろう。

元より魔術協会に於ける不遇に対する宣戦布告なのだから、名誉と気品を重視し寧ろルーラーを取り込もうとする可能性が高い。

だが、赤の陣営はどうだろうか？

「魔術協会に雇われたマスターは勿論、サーヴァントが軍略に長けている場合、どうなるかわからないからね」

魔術使いさえも選ばれているだろう赤のマスターは違う場合もある。

「だから僕達の傍に居る方が危ないかもしれないんだよ」

それ故に、此処で別行動を提案したのだ。

無論その場合の懸念要素も変わらず存在する。

「だから玲霞には方が一襲われても対処出来るように、彼等に頼んで備えておくからさ。それで構わないかい？」

そう言つてキョトンとしているジャックを尻目に、玲霞はアラヤへの信頼に満ちた笑みで返す。

「はい。なら安心ですね」

「マスター、お兄ちゃん達と別れるの？」

「ほんの少しの間ね」

「ジャック、玲霞を頼んだよ？」

「……！ まかせて！」

アラヤの言葉に、寂しげな表情だったジャックがやる気に満ちる。

実際はやる気を出すのではなく気配遮断を全開にして潜む必要があるのだが、そこら辺の舵取りは玲霞がやるだろう。

こうしてルーラーとアラヤはトウリファスに、ジャックと玲霞はシギショアラへと向かっていく。

そして、その懸念は的中した。

第三話 聖杯大戦、開幕

アラヤが中古の車をサラリと購入しルーラーを唾然とさせるも、その後の改造の末に魔術礼装に変えてしまった時点で彼女の視線が胡乱げな物に変貌する。

その改造車での道のりは、ルーラーの腹が立つほど快適であった。

「馬とはまるで違いますね……」

「——短い時間と材料からではありませんが、自信作です」

「そういうことではありません！」

ドヤ顔で運転するアラヤに、機械特有の揺れをまるで感じさせない車内に行き場の無い感情がたぎるが、大声を上げてしまった羞恥で顔が紅く染まる。

コンピエーニユの戦いまで共にいた白馬との思い出が、魔術的な意味での魔改造をされた車によって台無しになりそうである。

魔力障壁術式にサーヴァントの感知術式。更にサーヴァントの霊格の高さを調べるセンサー付きと、半日で造り上げたにしては余りの高性能な魔術礼装にルーラーが茫然としたほどである。

この快適さは中世と現代の変化、というよりも己のマスターの万能さと言うべきだろう。

取り敢えずぶっこんで見ました感が溢れている魔術礼装を時計塔のあるロードが見れば、その喉から手が出るほどの才能による無駄遣いに『ファックツ！』とスラングで盛大に吐き捨てること間違いなしである。

本来仮眠を含めて12時間は掛かる距離が、瞬く間に縮まりトウリファスに差し掛かろうとした時。

「あつ。やばい」

二人を乗せた車を盛大に傾ける急ブレーキによってその車体を止

める。

凄まじい気配感知能力を与えられたルーラーと、その知覚を共有して魔術礼装の車に同期増幅演算させていたアラヤは、数キロ先に存在するサーヴァントを認識した。

そして、その脅威の出鱈目さを。

「いやいやいや……、どの陣営だこんなサーヴァントを真つ先に寄越したのはッ!？」

凡そAランクの神性持ち——半神等が該当する最高数値を叩き出した探知術式に悪態をつく己のマスターに、内心全力で同意するルーラーは瞬時に車から下り、その姿を戦装束のモノへ変転させる。

「マスターは」

「一緒に行かせてもらう。このクラスのサーヴァントなら、ちよつとの距離なんて無いも同然だ」

「……解りました」

二人は弾丸が放たれる様に駆け出す。

それに内心、ルーラーは驚嘆した。

アラヤがルーラーの脚力に追い付ける訳がないのだが、彼は技術によつてそれを埋め、彼女の速力を凌駕している。

そんなアラヤがルーラーに告げる。

「ルーラー、必要なら令呪を使う」

「ッ、しかしマスターの令呪は——」

「確かに、既存のモノに比べ強制力は無い」

ルーラーとは聖杯戦争を管理する者。

それ故にルーラーは規格外の対魔力を有している。

また、そんなルーラーのマスターというイレギュラーな者の令呪もまた既存の令呪と異なっていた。

膨大な無色の魔力。

しかし、サーヴァントに自害を命じる事の出来る程の強制力は無かった。

だが、使い道が無いわけではない。

単純な魔力によるサーヴァントの強化や、魔力リソースとして用い

る事が可能だ。

「それか最悪、僕が抱えて高跳びさせてもらうさ」

「……判りました」

ルーラーの表情が緊張に染まる。

自分達を待ち受けているサーヴァントは、様々な特権を与えられているルーラーを容易く屠る程の存在なのだど理解しながら。

そして、その場に到着した。

「あの、英霊は——」

件のサーヴァントは、先程と同じ鳩が止まっている高速道路の大きな標識の上に佇んでいた。

メラニンそのものが不要と言うような、ある種の侮りを与える無造作に伸ばされた白髪白貌。

眼光は研ぎ澄まされた剣先の様で、その身と同化しているかの様に纏う輝く神々しい黄金の鎧。

紛れもない太陽の神性によって、闇夜の暗闇を照らしていた。

「——サーヴァント、ルーラーとお見受けする」

ステータスは大したことはない——しかし、ルーラーの真名看破によってその数値が変貌する。

『無冠の武芸』——開示されたスキルの中にパラメータを隠蔽、偽装するものがあつた。

それはまだ良い。理解できるし、可能なサーヴァントも多いだろう。

だが同時に開示される宝具と真名は、彼女をして絶句させるのに相応しい物だった。

「赤のランサー——太陽神スーリヤの子、施しの聖者カルナ……！」

「ほう、得物も出していないのに看破する……それがルーラーの特権の一つか」

——カルナ。

パーンダヴァ王家とカウラヴァ王家の戦いを描いたインドの叙事詩『マハーバーラタ』にて記される、人間の姫であるクンティと太

陽神スーリヤとの間に黄金の鎧を身に纏いながら生まれた、生粋の大英雄である。

パインダヴァ四兄弟最強のアルジュナのライバルとして描かれる彼は、その実アルジュナの従者にて全王神ヴィシュヌの化身であるクリシュナが「万全のカルナ相手では二人掛かりでも勝てない」と断言。果ては『三界を制覇する』とさえ称され、公正と名誉を謳った正義である筈のパインダヴァ王家が卑劣に手を染め、神々の加護とカルナへの呪いと誓約で謀殺するしかなかった不遇の英雄である。

特にカルナを不死身の英雄足らしめる、神々でさえ壊すことの出来ない太陽の鎧は、神王インドラが彼の高潔さに奪ったことを恥じた代物だ。

インドラはあまりに高潔なカルナへ、鎧と等価ではないものの自身さえ使いこなせない神殺しの光槍を与えるのだが――。

見る限り、サーヴァントとして現界したカルナは、その鎧と槍の両方を保持している。

有り体に言えば最強だ。

襲撃されるのは想定していた。

だが、これはあんまりだろう。

魔力供給さえ満たせばその時点で勝利が確定する程のサーヴァントを、初戦さえ始まっていない現時点で刺客として寄越すとは甚だ想定外である。

そして――

「俺が此処に居る理由を為すまでに聞くことがある」

「……っ」

「隣に居るのは、何者だ。ルーラーにマスターは存在しないと聞いている。だがその手に刻まれた令呪は、マスターの証だろう」

ルーラーに向ける戦意は、彼が何のために此処に居るかを明瞭に示している。

ソレでも尚、奇襲の好機を逃してもそれを問い掛ける配慮は、この大英雄の気質か。

「――初めまして、インド神話屈指の大英雄と対面出来るとは光

として聞き取れない詠唱。

それによる魔術が、ルーラーの背後という死角を利用して莫大と表現できる数の水の鎖が形成されていた。

水鎖はウォーターカッターを彷彿とさせる速度で、宝具を放とうとしていた赤のランサーの槍に食らい付く。

水と炎では、その相性は瞭然だ。

と言っても、所詮魔術師風情の魔術。

超級サーヴァントに通じるかと問われれば、答えは否である。

加えてカルナは太陽神の息子。

その鎧の効果も相俟って、宝具の発動を止めるほどの妨害にはならない。

「ほう」

筈だった。

本来対魔力に弾かれる筈の水の拘束はカルナの身体に絡み付き、槍に宿っていた炎の魔力を霧散させる。

魔術によつて操られた水鎖は、魔術と言うには余りに高純度の神秘を宿していたのだ。

「ルーラーによつて加工された聖水が元だ、効くだろうか？」

「なるほど、マスターだと侮った俺の油断だな。それに、この魔力は……」

無論その拘束も一振りですべて四散することになるが、その一瞬で十分。

再び槍を構えたランサーは、ルーラーが地面に突き立てた旗の輝く

光に目を細めた。

紛れもない、ルーラーの宝具である。

だが、カルナが真に警戒するは、彼女のクラススキル。

即ち、ルーラーのもう一つの特権である——

「何故、全サーヴァントに対する令呪とやらを使わない」

「……貴方の宝具は最上位。ですが、この場での使用自体は問題ではないからです」

神明裁決。

召喚された聖杯戦争に参加している全サーヴァントに対して、2回

まで令呪を行使できるルーラーとしての最高特権だ。カルナの宝具使用も止められる。

だがそれは、「聖杯戦争の枠を逸脱する」ものではない。

そういうならルーラーに対する攻撃は問題は問題なのだが、しかし「ルーラーを攻撃してはいけない」などというルールが明確に存在してはいないのだ。

「貴方が私を狙うというのなら構いません、私は私個人の全力を以てそれに抗うだけです。——ルーラー裁定者を舐めるなカルナ。貴方の宝具、マスターに傷一つ付けずに防ぎきって見せる」
「ほう」

自身の宝具を掲げながら、しかしルーラーの背中に冷や汗が流れる。

「ブラフマーストラ・クンダラー梵天よ、我を呪え」。

バラモンのパラシユラーマから授けられた、カルナの持つA+ランク宝具。

対国の名に相応しいその一撃は核兵器に喩えられるほどの規模と破壊力を持つ。

生半可な守りではその盾ごと消し飛ばされかねない。

放たれば、周囲の被害は計り知れないだろう。

それが、先程放たれかけていた。

ルーラーとしてトゥリフアス全域をカバーする感知能力を持つジャンヌには、周囲に人の気配は無い事は解っている。

赤のランサーもそれを理解しているが故に宝具を解放しようとしたのだろうか、万が一が無いわけではないのだ。

問題は、上記の秘匿面の問題を無視してでもカルナを送り込んだ者の真意である。

アラヤが述べたように不確定要素を排したいのはわかるが、幾らなんでも時期尚早だ。もしルーラーが苦し紛れに神明裁決を使ってしまえばどうなるか。

戦略的に考えても、この最序盤でのルーラー排除は余りにリスクが高い。

(赤のランサーのマスターは、ルーラークラスについて詳しい――
――?)

聖杯戦争は亜種として数多く勃発している。

ルーラーも同様に召喚例がある筈だ。それが要因だろうか？

彼女はそんな思考を、眼前で昂る太陽神由来の神性に集中するため打ち切った。

「成る程、ルーラーに選ばれるだけの事はある。だが俺は英雄だ、どのような城塞であろうと突き崩してみせよう」

「っ！」

にも拘わらず、赤のランサーの目標は変わらない。

令呪という最高特権を、ルーラーの矜持を、悲劇の英雄はその程度と言わんばかりに押し通る。

それこそがマスターに従うサーヴァントだと言うように。

「――やれ、セイバーッ！」

そんな中、乱入者の声と共に黒剣が赤槍に襲い掛かった。



「――どうやら、黒側のセイバーが乱入したようですね」

シギシヨアラに存在する教会。

聖堂教会から派遣された監督役。そしてそれ以上に赤のマスターとして、逆立った白髪に褐色という奇抜な容姿の少年は礼拝堂で祈りを捧げながら状況を傍観していた。

彼は使い魔を出している訳でも、遠見の魔術を使っているわけでも

ない。

単にその身に宿った感知能力でもって、数キロ以上離れた戦地を感じし続けているのだ。

「ルーラーの暗殺、というには赤のランサー^彼は派手が過ぎますから襲撃ですか。一先ず失敗ですね」

アサシンのマスター、監督役シロウ・コトミネ。

聖杯大戦の運営を秘匿面から補助する筈の人材が、運営を司る大聖杯によって召喚された調停者^{ルーラー}を害そうとしていたのだ。

しかもルーラーのサーヴァント、そのクラスに宛がわれる英霊は本来聖人聖女のみ。

加えて今回のルーラーは世界で最も有名な聖女、ジャンヌ・ダルクである。

彼女を聖人と認定した宗教の組織から派遣された神父が、彼女を害する。

裏の人間で無くとも困惑、聖堂教会の人間ならば激憤する事態だった。

しかし己の信ずる宗教の聖人を殺そうと画策しているにも拘わらず、シロウの眼には悪党特有の醜悪さが微塵もなく。

平静と、使命感に近い覚悟があった。

「黒の陣営^{ユグトミネニア側}が介入した以上、カルナとてルーラーを殺すのは難しいでしょう。黒のセイバーとの戦いで手の内を探ってから、頃合いを見て撤退させましょうか」

本来、カルナは凡百のサーヴァントの二騎程度数分も掛からず消すのに支障は無い。

魔力供給さえ万全ならば、カルナは唯一人で全陣営のサーヴァントを皆殺しするに値する英霊だ。

無論、そんなカルナと同格と評されるサーヴァントが赤の陣営にはもう一騎存在する為、そう易々といく訳ではないが。

加えて、今回介入した黒のセイバーはセイバークラスとして最高峰の一人なのだろう。

その証拠に、シロウの感知能力にサーヴァントの消滅が感じられな

い。

呪いや束縛さえなければインド神話を征したと称される太陽神の息子が、未だ黒のセイバーを仕止め切れずにいる。

それは、聖杯大戦が一筋縄ではいかないことの証明であった。

「貴女はどう思いますか、アサシン」

彼は己がサーヴァントの意見を仰ぐ。

暗殺者のクラスに在りながら、暴君としての側面を強く持つ、王者の英霊である。

キヤスタークラスとしての能力を併せ持つ固有スキルによって、シロウとは別に使い魔で戦場を俯瞰していたサーヴァントは、しかし返答を返さなかった。

それ処か、マスターとサーヴァントとの因果線ライオンは彼女の感情の揺れを少なからず伝えていた。

心の底から、動揺していると言うように。

「……アサシン？」

『——少し、儀式に集中する。暫く我に話しかけてくれるなよマスター』

念話越しに短く呟かれた言葉を残して、アサシンの気配が遠退く。



シギシヨアラ教会外縁。

幾つもの隠蔽魔術によってその建設姿を隠されていた未完の庭園内で、彼女は夜空を見上げていた。

「ああ——私は汝に恋をしている」

それは自らに対する絶対者としての宣誓であった。

かつて引き裂かれた恋を為し遂げるために。

先程の少女の様な姿は消え失せ、暴君の女帝としての壮絶な笑みが鎌首を持ち上げる。

己がマスターの行く末など、万能の願望器など、聖杯大戦など最早どうでもいい。

女帝として再び現世に君臨することさえ。

「故に此度は、絶対に逃がしはしない」

彼女の、聖杯大戦に於ける目的が決定した瞬間であった。

第四話 初戦

赤のランサーに、背後から襲撃した黒のセイバーの初撃が迫る。背後からの不意打ちだが、恐らくマスターの声によって台無しになったソレを赤のランサーは確りと弾き、受け流す。

しかし対するセイバーは弾かれた体勢を整えながら、着地と同時に二撃目を繰り出した。

ランサーはこれを神槍を盾にして受け、その余波で先程ランサー自身が佇んでいた標識が根元から削ぎ倒される。

そんな小手先が、一瞬によって行われた。

「——お前は」

傍らにいる恐怖と憎悪を露にした肥満体型のマスターであろう男に見向きもせずに、赤のランサーは冷え冷えとした声で黒のセイバーと相對した。

灰色長髪の端正な顔立ちで、胸元と背中が大きく開いた鎧に身を包み、大剣を構える長身の青年。

「その荘厳にして苛烈な剣気、黒のセイバーか。ふむ、となるとお前達も目標はルーラーか」

無言で頷くセイバーに、ランサーはルーラーへとその視線を移す。

しかしランサーの言葉の意味は、目標を同じくする彼とは真逆の物を示していた。

即ち、ルーラーの囲い込み。

そのあらゆる欺瞞を見抜くランサーの様子に、アラヤは一先ず息を小さく吐き出す。

セイバーの接近は気配感知を持つルーラーと感覚を共有しているアラヤにも知覚していた。

万が一黒のセイバーも自分達の排除を目的としていた場合、本格的に自分達の命が危うくなるのだから。

中立であるルーラーを手中に収めようとするユグドミレニアの思惑の方が、カルナの様に関答無用に殺しに来る事よりも余程対処が容易い。

というより前者は襲撃者がカルナである限り逃走できなければ、対処などルーラーの令呪でも使わない限り不可能である。

そんなユグドミレニアの思惑の代弁者としてか、肥満体形の男が一步ルーラーとアラヤに己の令呪を見せながら笑いかける。

「危ない所でしたな、ルーラーとそのマスターよ」

どうやら先程の様子を見ていたのか、本来異物であるアラヤの立ち位置を既に理解しているらしい。

逆に言えばそれまで見ていたのだろうが、ピンチになった時に助けに現れる方が好印象に繋がると思ったのだろう。

その考えを見抜かれぬ限りは、という枕詞が付くが。

「確か……ムジーク家のゴールド、だったか？」

「流石ルーラーのマスター、我が名をご存知とは解っておられる！

ゴールド・ムジーク・ユグトミレニア、此度の大戦で黒のセイバーのマスターとして名を連ねております。さて——」

ランサーに指差すと、気分を良くしたのかゴールドは声高らかにランサーを弾劾する。

「赤のランサーよ！ お前がルーラーを殺害しようとしたのを我々は確かにこの目で見た！ 聖杯戦争を司る英霊の抹殺を謀ろうなど究極のルール違反、罰則を免れるものではない！」

口にはしていることはソレほど間違つてはいない。

普通ルーラーを襲うことは、自らの後ろめたさを明かすようなものだと思えることも出来るのだから。

だが何故だろう、その口振りが慣れない演技くささを感じさせるのは。

その理由は、直ぐ様分かった。

「大人しく我がセイバーと………ルーラーである彼女達の沙汰を受けるがいい！」

チラツチラツ。

効果音を付けるならまさにこれだろう。

(なるほど、ルーラーとの共闘狙いか)

(でしようね。私の特権と黒のセイバー——ジークフリートが合

わされば、確かにあの施しの聖者を倒せるかもしれません)

(見るからに燃費激しそうだしね、あのランサー。そして一度共闘関係を結べばズルズルと、かな。因みにルーラー的にこの状況はどんな対応をするのかな?)

お手並み拝見、そんなアラヤに溜め息を吐きながら、ルーラーはゴルドを見据え彼とは違う真芯の入った対応を取る。

即ち、

「黒のセイバー、そして赤のランサー。此処で戦うというのなら異存は有りません。その場合私が手出しすることはありませんのでご安心を」

そして調停者であるが故に、当然ながらこうなる。

「……えっ」

「私の命を狙うことと、貴殿方が戦うことは全く別の案件です。故にランサー、この場で決着が着かなかった場合貴方には幾つか詰問する事になりますが——少なくとも、私はこの戦いの規律を守る義務があります」

故に、片方に加担することは無い。

それこそルーラー自身が召喚された理由である「聖杯大戦の枠を超える行動」でない限り。

そして赤のランサーの行動はルーラー個人にとっては問題でも、ルーラーという役割としては問題ではない。

彼の宝具は極めて強力でその規模は破格の一言だが、それを街に向かって撃つ事がない限り問題ではないのだ。

そもそもルーラーの言う『ルール』とは、あくまで彼女自身の基準や価値観による裁定範囲。

『巻き込まれた一般人の保護』、『神秘の漏洩を含む聖杯大戦が運営不可能な事態の阻止』、そして『聖杯大戦中に聖杯戦争の枠を超え、世界に悪影響を与えるサーヴァントの排除』である。

大きく区分すれば、ルーラーの役目はこの三つになるだろう。

ルーラーの仕事は、戦いの余波が一般人に被害を出さない為に一つ目と二つ目を防ぐことが主になるだろう。

それでも彼女が令呪を使用するのは、基本的にはこの三つ目だけ。ランサーはルーラーという調停者を排除しようとするものの、それはルーラーにとってルール違反には該当しないらしい。

「フム、俺を二人がかりで押し切ろうとでも考えたか」

呆然とするゴールドに、無表情——人によっては冷やややかな顔で己の解釈を口にする。

それは事実であり、彼の英雄性を表す言葉だった。

「お前が求めるのはただひたすらの勝利か？ 何とも浅ましいがそれもまた戦いの一つの形だ。俺は一向に構わんぞ」

『何、気にすることはない。寧ろその勝利への貪欲さは戦いにおいて必要不可欠なのだから。黒のセイバーのマスター、お前はこの聖杯大戦のマスターとして何も間違った事はしていない。無論、オレなどに言われずとも理解しているだろうが』

アラヤにはそんな副音が聴こえたが、残念ながら普通の人間にはそんな都合の良い機能は備わっていない。

赤のランサーが口にしたのはただの事実だが、凶星を突かれた人間の反応は明解である。

赤のランサーに思わず先程の危機も忘れてアラヤが孫に向けるような生易しい視線を投げ掛けるが、ゴールドは額に青筋を浮かばせ激昂する。

「こッ、殺せッ！ セイバー、あのサーヴァントを叩き潰せ!!」

マスターの命令に従い、サーヴァントである黒のセイバーが一步前に出た。

「そうか。ならば黒のセイバー、お前と二人で殺し合える様だ」

赤のランサーは黒のセイバーの眼を見据える。

マスターに忠実な、願いに応えるその頑ななまでの姿に——嘗ての宿敵を思い出す。

周囲の期待に応えようと、立場と役割を全うしていた男を。

「お前と似た眼をした男に会ったことがある」

正義と公正、誉れを思いのままに手にし、また押し付けられながら。苦悶と屈辱や様々な感情に多くの乙女を魅了した顔を盛大に歪ま

せ、卑劣な手段に手を染めてまで自身を殺したあの男を。

そんな男がそうまでしなれないと思わせた己に、誇りさえ感じながら微笑んだ記憶を想起した。

「お前がその眼で俺を視るならば、俺と戦うのは必然なのだろう」

そうして、聖杯大戦の第一戦。

赤と黒、両陣営最強のサーヴァントが激突した。

第四話 初戦

——赤槍と黒剣の剣戟が、現代の地上に爪痕を刻み続けた。

振り下ろされた聖剣によって放たれた真エーテルは、地面を抉りながら獲物に食らい付く。

しかしその牙を黄金の鎧は物ともせず溶解させ、弾丸の様に飛翔する太陽の仔を竜殺しへと届かせる。

日輪を模した神槍は聖剣と打ち合い、そのまま竜殺しを飛翔する勢いのまま大岩を抉り取りつつ押し上げるも、両雄の表情は不動であった。

剣戟の度に轟音と共に衝撃波が周囲を押し、しかし両者共に傷は極めて浅い。

赤のランサーに至っては少し経てば癒えているほど。

不死身を冠した英雄達の戦いは、それこそ永遠に続くのではないかと錯覚させた。

水平線に暁が昇るのも、本当に時間の問題だろう。

そんな光景を開いた口を晒しながら、ゴルド・ムジーク・ユグトミ

レニアは呆然と見ていた。

否、まるで見えてなどいない。

小手調べであり、超級の何足るかさえまるで見せていない赤のランサーと、それに平然と喰らい付く黒のセイバーが何をしているかまるで理解できない。

マスターとしてこの場に立つ彼は、何をすべきかさえ解らなかつた。

「これが――」

現代の魔術師は、初めて観る英霊の戦いを目の当たりにしながらここまでの経緯を走馬灯の様に思い出していた。

――ムジーク家は元々歴史長き一流の家系。

かつては錬金術の大家アインツベルンにさえ比肩していた。

だがその栄光は過去のもの。

魔術協会で長年功績らしい功績を残せず衰退の一途を辿り、世間の評価は金と歴史だけは古いなどと揶揄され軽視されてきた。

それ故に、ムジークはユグドミレニアに。ひいては聖杯大戦に参戦したのだ。

サーヴァントの魔力消費を代替させるホムンクルスを、聖杯を喪ったことで他家へ門戸を開き始めたアインツベルンからの技術提供で造り出した。

全てはユグドミレニア――延いては己を華々しい唯一の勝利者とするために。

その為の魔力供給代替ホムンクルス。

その為の最強のセイバー。

――なのに。

（――こんな化け物どもの戦いの何処に、割って入る余地があるというのだ？）

大英雄同士の戦いに、魔術師でしかないゴールドが指示を出せる筈もなく。

撃ち合って仕切り直された時に漸く、己のサーヴァントが傷を負っている事に気付いた。

何より、その異常事態を。

(我がセイバーが……、ダメージを受けている……!?)

アルマーニユ最強の英霊。

遍歴騎士、不死身の大英雄ジークフリート。

邪竜竜ファヴニール討伐殺という、それを為した時点で問答無用に人理へその名が刻まれる偉業の達成者。

曰く、邪竜の血を浴びた彼は背中の菩提樹の葉によって血を浴びなかつた背中の一部以外、あらゆる攻撃を寄せ付けない無敵になったという。

その逸話は、紛れもない宝具として昇華されていた。

—— 『悪竜アーマー・オブ・ファヴニールの血鎧』

サーヴァントとしての彼は、背中の菩提樹の葉の痣以外、あらゆる攻撃をBランク分のカットが行われる。

Bランクはおおよそ平均的なサーヴァントの宝具の数値。

場合によって彼は、他のサーヴァントの切り札の直撃を受けても完全な無傷で居られる程の防御性能を有している。

それはルーミアニアにおいて最強クラスに迫る知名度補正を得た黒のランサーの宝具を、完封することが出来ることを意味している

だが、例外はある。

(赤のランサーは、そんなジークフリートの防御を貫く攻撃力を持っているというのか?)

戦闘に支障が出るような物では決してなく、強いて述べるならば掠り傷と呼ぶべきもの。

それが、撃ち合った反動で仕切り直され距離を取って睨み合った際、ジークフリートが確かに傷を負っているのをゴルドは見た。

それは、赤のランサーの通常攻撃が凡百のサーヴァントの宝具を上回っている事を示している。

(ともあれ、魔術で回復を……ッ)

即座に治癒魔術を用いて細かな掠り傷を治すが、それでゴルドの自尊心プライドが満たされる訳がない。

(それだけしか出来んというのか!?)

一体己は何をしているのか。

ゴールドが望むのは華々しく厳格な魔術の競い合い。

しかし現実は何もしておらず、何もできてはいない。

本来利点である魔力供給の肩替わりによる負担の無さも、それを増長させていた。

(宝具……いや、敵の正体も知れぬ内に切り札を出すなど……)

『お前は喋るな』

それがゴールドがジークフリートを召喚直後に行った命令だった。

彼の不死性の穴を、少しでも塞ぐためのもの。

伝承の通り背中には、菩薩樹の葉が張り付いていた葉の様な形の跡が残っている。

伝承において無敵を誇った竜の鎧はその箇所のみ効果は発揮せず、生前の死因という呪いによって英霊故にその個所を隠すことも出来ない。

その上一度背中を負傷すると治癒魔術でも修復は極めて難しい明確な弱点として存在している。

アキレウスの弱点が踵であることが周知の事実であるように、竜殺しの代名詞の一人であるジークフリートの弱点もまた明瞭である。

尤も、どのサーヴァントも死して英霊となった以上、その真名の漏洩は弱点や手の内の開示を意味しているのだが。

取り分けジークフリートの場合は真名の漏洩は致命的である。にも拘らず宝具の解放は自ら真名を暴露するも同然。

選択肢としては悪手も悪手である。そこでゴールドはルーラーを見る。

サーヴァントを視認するだけでその真名を看破する特権を持つ調停者を。

「ルーラーよ、どうかお願いします！　せめて貴女の力を以て彼奴の真名を——」

「お断りします」

「な……」

そんな安い思惑はルーラーの即答によって拒絶される。

呆然と言葉に詰まるゴールドに、出来の悪い生徒に言い聞かせるようにアラヤが補足を入れた。

「そりゃそうさ。僕らはあくまで第三者。聖杯大戦の調停者を名乗りながら、初戦で片方の陣営に荷担するとか筋の通らないことなんて、出来る訳がない」

そんな奴が英霊に、ルーラーに選ばれる訳がない。

「だ、だが、奴はルーラーを殺そうとしたのですぞ！　ここで黒のセイバーが脱落したら、奴は再び貴女を狙うやも——」

「先程も言いましたが、それはそれ、これはこれ」

赤のランサーの襲撃は、極端だがランサーとルーラー陣営だけの事情。

それを考慮することによって聖杯大戦に色を加えることを、彼女はルーラーとして召喚された誇りにかけて出来はしない。

「……ッ！」

譲らないルーラーにゴールドが歯噛みした時、轟音と共にランサーがセイバーに打ち上げられた。

様々な剣戟を交えた二人は、しかしセイバーのように治癒魔術を掛けられていない筈の赤のランサーの傷はみるみる内に癒されていく。恐らく、何らかの能力によるものなのだろう。

そんなランサーに追撃を掛けんと、セイバーも遙か上空に跳躍する。

だがそれは良手では無かった。

ランサーに炎の魔力が満ちる。

空中故に回避手段を持たない黒のセイバーに、炎の魔力放出を伴う神速の連載が叩き込まれた。

「ッ」

先程までとは比べ物にならない衝撃と爆音と一瞬日輪を形取った炎が、その姿をセイバー諸共に大地へと刻む。

その威力は、凡百のサーヴァントの宝具さえ凌駕していた。

宝具の域にある通常攻撃。

一撃一撃が対軍宝具に匹敵する赤のランサーは、正しく最強クラスのサーヴァントであった。

だが真に驚嘆すべきは、それを受けながら掠り傷程度にしてしまう黒のセイバーの防御性能か。

その魔力を伴う衝撃波でゴールドは地面に転がり、アラヤが腕で顔を庇う。

そしてルーラーは心底思った。

この聖杯大戦の主戦場が、かつての冬木の聖杯戦争の様に街中で無かったことへの安堵を。

街中でこの二人を戦わせれば、街など容易く消し飛ばしてしまうだろうことを。

「どうやら、膠着してるみたいだな」

「……」

不死身や無敵の名は伊達ではない。

一定数値の攻撃を完全遮断、軽減する黒のセイバー。

あらゆる攻撃を十分の一にカット、即時自動治癒する赤のランサー。

二人の防御性能は、宝具を温存する緒戦に於いて千日手の膠着状況を生み出していた。

そして、千日も戦うことは魔力的にも秘匿的にも不可能。

それを指摘したルーラーのマスターを、苛立つゴールドが盗み見る。ルーラーという聖杯大戦の絶対管理者の本来あり得ない付属品。

突然湧いて出た、しかしそれ故にルーラーよりかは付け入る隙もあるだろうと思い――

「えっ?」

彼を見た瞬間、ゴールドの時間が引き千切られた。

あらゆる感覚が根刮ぎ磨り潰され、思考のあらゆる語彙が消え失せた。

此方を見据える瞳は美の女神が求めた如き宝石のようで。理想的

という言葉さえ陳腐に落とす鼻梁は神々が魂を注ぎ込んだかのような黄金比であり、その全てが未成熟と成熟の狭間の青春を体現していた。

全ての形容詞がその意味を喪った果ての、つまり『理屈は無いがそうなのだ』という神々の権能の様な何か。

名門という過去をズルズルと引き摺り、現実との差異を逃避によって自尊を保っている傲慢で矮小な精神が——魔術師にあるまじき『信仰』という感情を捻り出した。

断じて魅了などという生易しいものでは決してない。

(何だコレは)

何故、先程まで気付けなかった。

そんな他人事の様思うゴルドは、自身が呼吸困難に陥っているのにも気付かずに立ち尽くす。

そんなゴルドの様子に気付いたアラヤは、同様の状態に陥っているルーラーと、戦闘を一旦止めてアラヤを見ながら目を見開いて硬直しているセイバーとランサーに頭を抱えた。

「……しまった。今の衝撃の余波で——はあ、随分脆くなってるな」

頭を抱えていた手首を翻し、黒のセイバーと赤のランサーの激突の衝撃で僅かに破損しただろう指輪を確認すると、盛大な溜め息を吐いた。

恐らく魔術礼装なのだろう。

傍にいたルーラーでも聞き取れない何かを呟いたアラヤは、指輪を修復し加工する。

「応急処置はこんな感じかな？ 今度幾つか造り置きしておくか。それより黒のセイバーのマスター、治癒魔術はいいのかい？」

「はッ!？」

そして漸く、世界は時間を取り戻した。

漸く忘我の彼方から帰還したゴルドは、アラヤが指示したように、まるで人形のように治癒魔術を己のサーヴァントに掛ける。

そんな自分に戸惑いを感じていない自分に驚愕しながら。

一方ルーラーは今のは何なのか、おおよそ理解していたからこそ戦慄を隠せていなかった。

事実仮に彼女をよく知るものが彼女が陥った状態を知ったとして耳を疑うだろう。

神に信仰を捧げた聖女が、まるで——ただの■■■のようになってしまふなど。

それはある意味、何よりも彼女に衝撃を与えていた。

黒のセイバーは両手で剣を構えつつ、跪くのを必死に堪えていた。

黒のセイバー——ジークフリートには経験が無かったのだ。

人の域を遥かに超えた領域の、他人の心を問答無用で奪う『求心力』というものを。

否、余りにも純粹で圧倒的なまでの■■■を。

そんな視線に晒されていることに気づいたのか、

「——今の無しで」

周囲が固唾を呑み込む緊張を、気まずそうにアラヤはそんな言葉で無かったことにした。

そんな訳に行くか——と、ゴルドは声を荒げなくなるも、先程の衝撃から抜けきっていない為か抜けた腰を持ち上げることが出来なかった。

或いは、アラヤに対し暴言を使うべきではないと感じたからか——。

「戦いの空気では無くなったな。黒のセイバー」

「……！」

「だがそれも致し方無いだろう。破壊神と神々の王でさえ魅了した彼の天女アラヤさえ、あれほどの美麗は誇れまい」

そんな中、平然とランサーはセイバーに話し掛ける。

ただ其処に居るだけで戦いを終わらせる。

魔性の域の魅力とはそういうものである。ルーラーのマスターに選ばれるだけのモノを、カルナはアラヤの中にあることを認めた。

次に、ゴルドに視線を移す。

「だがどちらにせよ、頃合いではあった。このままでは三日三晩撃ち合うことになる。オレは構わんが、そちらのマスターは別だろう」

「――」

ゴルドには魔力負担は無い。

ホムンクルスによるサーヴァントの維持供給の代替は、本当にこの大戦ではアドバンテージになっている。

このまま本当に三日三晩戦えば、幾らカルナが消費を抑えているとはいえ赤側のマスターに限界が来る。

一流の魔術師を一分も掛からず干からびさせる魔力放出無しとはいえ、神鎧と神槍を使用して三日三晩は不可能だ。

だが、ゴルドとて人間。

三日三晩の戦いにはとても付き合えないし、何より既に朝日が上っている。

聖杯大戦は夜の帳が不可欠。

神秘の秘匿という、これ以上ない壁がランサーとセイバーの戦いを拒んでいた。

何より、自身の無力だけを与え続けるこの戦いにうんざりしていたのだ。

セイバーはあくまで無言で剣を収める。

しかし、そんなマスターに言葉を封じられている黒のセイバーは生じる躊躇を切り捨て、口を開いた。

「願わくば、貴殿と心行くまで戦い抜きたいものだ」

初めて口にしたセイバーの言葉は、カルナが感じ入る程の切実さがあった。

だがそれは、ランサーも心から望むところ。

「……ああ、お前と初戦で打ち合えた幸運に心から感謝しよう。――」

――さて、ルーラーとそのマスターよ――

無表情ながら、ランサーの掛け値なしの称賛によって戦いの終わりの流れになった瞬間、恐らく念話で打ち合わせたのだろう。

逃げようとすれば即座に止められるようルーラーが完全な臨戦態

勢だ。

「先も言ったが、オレに答えられることは少ない。それを承知でオレを引き留めるか」

「赤のマスター達がそれぞれ何の触媒でサーヴァント召喚したか、それは魔術協会に問い合わせれば直ぐにわかる。幸いロードの一人に山程個人的な貸しがあつてね」

赤のサーヴァントは唯一人を除いて、全て魔術協会の用意した触媒を用いて召喚している。

故に、赤のランサーのマスターが誰なのか、時間さえあれば判明する。

だからこの問いは、時間の省略でしかない。

だがアラヤの直感が、そして何より。

「啓示が降りました。是が非でも、この場で貴方のマスターの名を聞かせて頂きます」

”天からの声”を聞き、最適な行動をとる。魂が持つスキル。

『直感』は戦闘における第六感だが、啓示は目標の達成に関する事象全てに適応する。

ルーラーの魂が保有するそれが、この場で発動していた。

この行動が、この場における最適解なのだ。

「……それは出来ない」

静かに目を閉じたランサーは、首を横に振る。

彼は、ルーラーの問いに答えられなかった。

「……出来ない？」

「隠す意図はない。単純な話、オレはマスターの名も、姿も知らないからだ」

「な——」

ルーラーが啞然とする。

サーヴァントが己のマスターを知らないなど、あり得ないからだ。

だが、目の前のサーヴァントは神々の王でさえその高潔さに心うたれた聖者。

拒否なら兎も角、虚偽など吐く筈がない英霊なのだ。

「じゃあ、ルーラーを討つという命令は、誰によって命じられたものなんだい？」

であれば、その命令は誰のものか。

己がマスターの不利になるのならば、ここでカルナは沈黙を選んだだろう。

だがカルナは、アラヤの問いにその名を口にする。

何せルーラーを殺せと命じたのだ、ならばこの程度のリスクは覚悟の上だと判断した故に。

そうしてその名を、ルーラーはあり得るかもしれない並行世界よりも遙かに早く知る。

「……赤のアサシンのマスター、シロウ・コトミネ。我々赤のサーヴァントの後方支援を担当する神父だ。我がマスターからその者の指示に従えと、そう念話で命を受けた」

「な——」

そう告げて、赤のランサーはおのが神性である日の出と入れ違う様に姿を消した。

そう、既に夜明けが訪れていた。

「……何故、聖堂教会の監督役が——ッ、お待ちなさい！」

虚空に消えたランサーを睨むと、ルーラーは己の疑問を口にしながら周囲を見渡す。

コンクリートによって舗装された道路は見る影もない程荒れ果てていた。

周囲の大岩は悉く微塵に還り、神性を伴う魔力は今尚周囲に満ちている。

聖杯大戦初戦、奇しくも両陣営最強の手札のぶつかり合いはこうして幕を下ろした。

だが、ルーラー達の難事はまだ終わっていない。

「クッ……、マスター——」

「……でない」

何より、この大戦が通常通りに終わる事のない楔を打ち込まれたことを理解しながら、ルーラーのマスターは返事の無い携帯電話に頭を

抱えた。

自身の備えが、間違っていないなかった事に心底安堵しながら。

「保険、掛けとくもんだなあ……」

ジャケット・ザ・リッパ
黒のアサシンと六導玲霞。

夜明けと共に彼女達が向かった先こそが、件の神父の元なのだから。

第五話 殺人鬼と女帝

夜明けと共にホテルを出て、玲霞とジャックは足早にシギシヨアラの街を駆ける。

無論ジャックは霊体化し、加えて気配遮断スキルを使い、アサシンとして徹底的に身を隠す。

それこそルーラーでさえ感知することは難しいだろう。

ジャンヌならば、聖人スキルを用いて精製した聖水による探索を気配感知に加えて漸く捕捉できるレベルだ。

玲霞の脚力は常人であり、強化した魔術師は勿論サーヴァントのそれには遠く及ばない。

故に彼女は効率を重視した。

前日でジャックと遊び歩きながらマップングを行い、教会への最短距離で到達する。

アポイントメントは既に電話で通している。

その電話の声が予想以上に若かったのには驚いたのだが。教会前に着いた彼女たちは、迷わず扉を開く。

「日の出時にもお祈りだなんて、御若いのに勤勉なんですね」

「神への祈りに、充足などありませんから」

扉を抜けて礼拝堂に入ると、そこには祭壇に向かって跪き祈りを捧げる神父服カソックの少年が、彼女を待っていた。

「――！」

少年が振り向くと、思わず目を見開く。

褐色の肌に白髪という、日本人らしい顔立ちに不釣り合いな容姿――

――など、目もくれず。

「ようこそ。私が赤のマスター、監督役のシロウ・コトミネといいます」

「黒のマスター、六導玲霞です。この度はこの場を設けて頂き有難うございます」

その表情に対し、驚愕を隠せたのは称賛に値するだろう。

何故ならその年齢に見合わない超然的で達観した雰囲気が、あまり

にも——身に覚えがあつたからだ。

違いがあるとすれば、妙に計算的に見えたり戦場にも平穩にも似つかわしくない謀略の臭いが染み付いて不信感や警戒心を抱く、といったものだろうか。

そんな驚愕を、欠片も出さずに呑み込む。

大したことはない。ただアラヤに報告することが増えた程度。

「驚きました。コトミネ神父もマスターなのですわね」

「ええ、今回の聖杯大戦は、我々聖堂教会も黒、ユグドミレニア陣営を危険視していますので。今回は特別に、ということですよ」

聖堂教会とは教義に反したモノを熱狂的に排斥する者たちによって設立された、『異端狩り』に特化した巨大な部門。

世界最大の組織であり、代行者、各教会が保有する騎士団、そして教会本部が隠し持つ埋葬機関と、強大な戦力を保有しており、吸血種をはじめ、人の範疇から外れてしまった者達にとっての天敵として君臨している。

彼らの目的は全ての異端を消し去り、人の手に余る神秘を正しく管理することである。

この為『神秘の秘匿』を第一主義とする魔術協会とは仲が悪く、幾度と無く刃を交えてきた間柄だ。

しかし彼等にとって最大の敵は吸血種である為、現在は協定が結ばれ表面上は不可侵を保ち、時として協力し合っているのだ。

尤も、実際の処は記録に残さない事を前提に、陰では現在もなお殺し合いを続けているのだが。

そしてユグドミレニアの目的は、新たな魔術協会の設立。

既に存在している時計塔などは上記の通り争い一つも不可侵を保っているが、『主の奇蹟』以外の神秘を存在ごと否定したい彼等にとって、新たな異端者の組織の誕生など、赦せるものではないのだ。

「今回聖杯大戦から降りる、という話でしたが——」

「ええ、私自身他人を殺してまで聖杯を欲する理由はありません。また、単純に聖杯を手に入れることは不可能に近いからです」

「不可能？」

すでにある程度、概要は電話で伝えている。

マスターにこそなったが、そもそも自身が一般人であり。

それに聖杯自体に興味こそあれど、人を殺してまで欲しいわけではなく。

何より、自身のサーヴァントも聖杯大戦からの棄権に賛同してくれ
たこと。

「ええ。私は魔術師ではありません。回路がありませんから。当然、
サーヴァントであるこの子に魔力を供給してあげることが出来ない」
「……では、どうやって彼女の維持を？」

「私の家族が、代行してくれています」

「おや、そのご家族は魔術師で？」

「私にはとぼけた口調で『魔法使い』と。あくまで私は養子ですので」
「そしてその人物は聖杯に興味はないと」

「より正確に言えば、嬉しいことに私同様人を殺してまで欲しいと思
うものではないそうです」

その答えに、少し思案するよう口元に手を添える。

魔術師にとって万能の願望器は、何人犠牲にしても欲するもの。

己が願いの為に一族でさえ無為に費やす外道が、果たしてそんな選
択をするだろうか、と。

『信じられんな。己の欲にしか興味の無い輩が万能の杯を欲しないな
ど————と、言うべきではないか？ マスター』
「！」

シロウの思考に呼応するように現れた、暗闇のようなドレスを身に
纏った退廃的な雰囲気を漂わせる美女に、玲霞が思わず体を固くす
る。

彼女が出会う、殺人鬼ではあるものの玲霞にとっては愛らしい己の
サーヴァントや、清き莊嚴なる救国の聖女とは違う、王者の英雄。

「赤のアサシンのサーヴァント、真名はセミラミス。そう長い付き合
いになる事はないだろうが、よろしく頼むぞ。六導とやら」

よろしく、と口にしていながら、アラヤが『異常』と評した玲霞の
観察眼だからこそ見抜けたその感情。

セミラミスの瞳の奥底の感情を、玲霞は感じ取った。

「……フフツ」

「……何がおかしい?」

そんな自身を見透かしたような微笑みに、セミラミスは仮初とはいえ見せていた歓待の表情を崩す。

「いえ、ごめんなさい。でも、長い付き合いになるのかもしれない。いえ、きつと仲良くできるわよ」

「何を——」

『人を見る目がある』って、アラヤさんが言ってくれたの」
「……………」

そんな自慢するような玲霞の言葉に、セミラミスの表情から感情が消える。

普段の彼女ならばそもそも関心さえ持たない程度の会話で、ここまですばられる様子に見守っていたシロウが驚く。

その、アラヤが見れば色んな意味で冷や汗ものの対峙に、しかし耐えられなかった者が剥き出しの警戒を向けていた。

「むー」

「あら。駄目よ、教会なんだからそんな物抜いちや」

「お兄ちゃんと約束したもん。おかあさんマスタは私が守るんだもん」

「あらあらまあまあ」

玲霞とセミラミスの間に可愛らしい威嚇をしている黒のアサシン——ジャック・ザ・リッパーが、ナイフを抜きながら実体化した。

「彼女が、貴女の?」

「ええ。ジャック、自己紹介」

「むー!」

「あらあらこの子つたら。すみません」

玲霞の言葉に、それでも敵意マシマシなジャックに、しかしそんな様子もかわいいのだと困ったような口ぶりで微笑む。

そこまで警戒されるのは流石に心外か、あからさまに不機嫌にセミラミスが眉間を寄せ、シロウは苦笑を隠せなかった。

第五話 殺人鬼と女帝

「私達がこの場に伺ったのは、黒の陣営から実質離反したこの子と、そのマスターである私が、少なくとも赤の陣営の方々と敵対しない為です」

コホン、と話を戻すために小さく咳ばらいで玲霞が話を戻す。

では、ここで玲霞とジャックの立場を再度確認してみよう。

まず、黒の陣営にとって。

この場合、本来のマスターである相良豹馬の手落ちであり、貴重なサーヴァントを奪った篡奪者である。

特にアサシンは、ユグドミレニア城塞で待ち構える立場の黒陣営にとつて数少ない『先手を取れるサーヴァント』である。

黒のセイバーのマスター、ゴールドが黒のセイバーに発言の禁止を命じたそもその理由が、背後を取り易いアサシンのサーヴァントを警戒したからに他ならない。

またそれに城塞近辺の平原での決戦において、城塞という防衛の要を持たない赤のマスターを挟撃できるだろう。

故にアサシンを奪われた形となっているユグドミレニアとは、サーヴァントを取り戻すために場合によっては敵対する可能性はあった。

では、赤の陣営にとつては？

それも明快であり、赤の陣営は上記の挟撃をそもそも警戒する必要もなくなる。

単純に数の有利を得られることもあるだろう。

兎に角、赤の陣営にとつて朗報なのは違いないのだ。

赤の陣営にとって、干渉するにしても取り込む以外の選択肢はそう
そうない。

そもそも監督役は聖杯戦争に於ける神秘の秘匿以外に、戦いを放棄
したマスターを保護する役割を持つものだから。

「では、立ち話もなんですので奥の部屋に参りましょうか。そこに他
の赤のマスターがおられます。紅茶などを飲みながら、詳しい話をし
ましょう」

笑顔のままに玲霞にそう促すシロウの言葉を、しかし彼女は笑顔で
拒絶した。

「それには及びません。私たちは、赤側の陣営に自分たちが敵ではな
い、ということをお伝えしに来ただけです」

「……おや、どういふことでしょうか」

「あなた方の庇護下にはいると、他の赤のマスターの方々から戦闘を
求められれば単純な多数決で強要されるかもしれません」

玲霞の言葉は、すなわち赤の陣営への不信であった。

「私が貴女方をお守りすると誓っても？」

「貴方は監督役ではありませんが、赤のマスターの一人でもあるので
しょう？ 如何に赤の^彼アサシン^女が強力なサーヴァントであっても、他

のマスター全員から私たちを護れ、とは言えません。それに生粋の魔
術師であればあるほど、社会的倫理から外れているそうですから」

それは単純な数値的な判断である。

他の魔術協会の赤のマスター全員が無理やりジャックを戦力とし
て運用しようとする、あるいは黒の陣営がそうする可能性があるよう
に、赤の陣営がマスター権を奪おうとするかもしれない。

そもそも魔術師とは外道。

楽観的な判断ができないという玲霞の言葉を、シロウは否定できな
い。

「では、貴女方はこれからどうするのですか？」

しかし玲霞の言葉が真実であれば、シロウには不可解なことがあ
る。

もし玲霞と黒のアサシンが聖杯を望んでいないのなら、何故ルーマ

ニアを訪れたのか。

そもそも、玲霞達はあくまでここには自身の立場表明に来ているに過ぎない。

「私たちは既にルーラーの保護を受けていますので」
「！」

「聞けば彼女は世界の危機に召喚されるサーヴァント。直接戦闘はできませんが、それ以外のお手伝いなら私達でもできると思っています」

聖杯戦争を司る、聖杯に選ばれた聖人のサーヴァント。

彼女の庇護を受けるということは、監督役が片方の陣営に居る以上聖杯大戦で審判側に回るという事。

ルーラーの選抜基準が聖人聖女である以上、正当性ならばこれ以上のものは無い。

「では私たちはこれで。何らかの連絡があればルーラーに御伝え頂ければ」

そう告げて玲霞が席を立つ。

この結果は赤の陣営としては惜しいものの、敵対しない時点で損ではない。

監督役はマスターを兼任した弊害故にどうしようもない。
落し処としては丁度いいだろう。

「——では、もう消してしまってもよかろう？ マスター」

「ええ。些か不本意ではありますが、致し方ありません」

そもそも監督役がルーラー自体をこの段階で排除しようと思っていたのなら、話は変わるのだが。

「——」
「運が無かったな、黒のアサシンのマスター」

セミラミスの美しい指が、空間を裂く様に振るわれる。
瞬間、礼拝堂の地面に術者の意思に従い魔法陣が浮かび、そこから出現した鎖が玲霞とジャックに襲い掛かった。

◇

「ッ!!」

自身を縛らんとする鎖に対する二人の対応は、ひたすらに回避だった。

アサシンであるジャックの敏捷値は最高のAランク。その上セミラミスへの警戒を常に行っていたのだ。

本来魔術師用に放たれた拘束魔術など、回避できない道理はない。

「1つならばそうだろう」
「!？」

それが、礼拝堂のいたる所から魔方陣が浮かび上がり、ジャックへと襲い掛かる。

「くうッー」

コレが黒のアーチャーならば、巧みに対処しただろう。

黒のセイバーや赤のセイバー、赤のランサーならばまとめて消し飛ばしただろう。

赤のアーチャーと赤のライダーならば、そもそも数を幾ら増やそうが影すら捕らえられまい。

だが、黒のアサシンはあくまでアサシン。

それも暗殺教団の首領ではなく、魔性であつてもただの都市伝説の

殺人鬼。

「きゃあッ!?!」

人を解体する技巧は持ち合わせても、逆境を打破するだけの力を彼女は当然持つていなかった。

「女童ならソレらしくしておればよかろうに。しかし——意外という訳でもなかったか」

「……驚きました」

シロウが、素直な驚きを溢す。

魔術鎖の大半がジャックに向けられていたとは言え、魔術師用の拘束術式。

「……」

それを掠りもせず回避し切った玲霞が静かに状況を見据える。

味方のジャックは幾重もの鎖によつてがんじがらめに縛り上げられ、露出しているのが首から上といった程だ。自力での脱出はまず不可能だろう。

敵のサーヴァント、セミラミスの事はよく聞かされている。

女帝である彼女は、同時に優れた神代の魔術師である、と。

アサシンと言ったが、それが本当とは限らないし魔術が使えない訳でもないのだろう。

そしてそのマスターであるシロウ・コトミネ。

薄い笑顔で佇む白髪褐色の少年は、酷く不明瞭であるが故に不気味である。

「何故、私達を?」

「ルーラーは私達の願いの障害となる存在。そんな彼女の傘下に入られるのは、少々不都合です」

本当に申し訳無いように眼を伏せるシロウに、その願いとやらが気になったが——。

「さて、六導とやら。前言を撤回し、我がマスターの保護を受けるというのなら、話は変わるが?」

「ぐっ……ぎゃっ」

「……!」

冷たく此方を見据えるセミラミスの鎖が、ジャックを締め上げる。苦痛の声を漏らすジャックに、玲霞の判断は即座に下された。

「——令呪を以て命じます」

『!』

故に、切り札を切るのは当然のこと。

「ジャック、一足先に宿に帰りなさい」

「な——!?!」

優しく微笑んだ玲霞の言葉に、ジャックが絶句する。

この状況でサーヴァントであるジャックを逃がすということは、マスターにとって自殺も同義。

「だ、だめだよ・ そんな、お母さ——」

令呪はその魔力を以て、命令通りジャックを教会からホテルに転移させた。

礼拝堂に残ったのは拘束対象を喪い魔力へ還った鎖群と、三者。

即ち、玲霞にとって絶体絶命を意味している。

「なぜ、その様な選択を?」

シロウが、意図なく問い掛ける。

確かに、玲霞はマスターであっても魔力供給を行っている訳ではない。故に、玲霞がここで死んでも黒のアサシンは喪われないのだろう。

無論、自殺願望者と誇られても仕方のない判断だ。

「貴様は奴に育てられたと言ったな。奴の教えとは、己の命を斯様に捨てることか?」

「いいえ」

そんな訳がない。

寧ろ生存をこそ望み、生き延びる為の術をアラヤは与えた。

故に、その行動には理屈が無ければならない。

「だって、あのままでは貴女がその気になれば即座にあの子を殺せたでしょう?」

あの時、ジャックの生殺与奪権はセミラミスにあった。

あの状況での令呪での撤退は、寧ろ英断でさえあった。

マスターが取り残されなければ、だが。

命は捨てない。

であるならば、彼女の行動はこう解釈できる。

「ではお主はこの状況を単身で潜り抜ける術があるか？」

「それも、否いいえです」

それさえも、玲霞は眼を伏せ頭を振るい否定する。

「ですが私は、此処にあの子と二人だけで来た——などと口にした覚えはないわ」

「そもそもこの話、玲霞は聖杯大戦の監督役の存在を聞かされた時から欠片も信用をしていなかった。

寧ろ怪しみ、不信がってさえいた。

であれば、万が一の保険を用意するのは必然。

キン、という音が響いて、シロウ達は自分達の足元に何か転がったことに気が付いた。

セミラミスはソレを知らなかったが、シロウは知っていたが故に余分な反応をしてしまった。

「しまっ……！アサシン、眼を塞いで——」

どちらにせよ、その目的はセミラミスの知覚を潰すためのモノ。

瞬間、轟音とあらゆる視界を潰す極光が瞬いた。

スタングレネード。

そんな現代兵器を、聖杯からバックアップを受けていてもセミラミスが知る訳がなく。

「ぐあッ!？」

数秒の間、人間の全感覚を麻痺させ動きを封じるソレを至近距離から浴びせられたセミラミスは、ジャックへの仕打ちに対する意趣返しと言うように、苦悶の声を吐き出させられた。

それも、一つではない。明らかに玲霞が隠し持つには多すぎる数のスタングレードが、死角を潰さんと極光を撒き散らした。

サーヴァントには、如何なる現代兵器を用いようとも傷一つ付けることは出来ない。

圧倒的な神秘と魔力による靈的装甲は、相応の神秘か魔力でなければ打ち破ることが叶わないからだ。

だが、何事にも例外はある。

例えば、直接傷付けるのではない音や光などの非殺傷兵器ならば、サーヴァント相手でも十分役目を果たせる。

いかにサーヴァントとはいえ耳と目を塞がれ、何より脳を揺さぶられた。それが問題だった。

ヘラクレスやカルナといった忍耐の極限と言える存在ならば、刹那も止めることは出来ないだろう。

様々な環境、魔物を相手にした英雄でも武芸に特化したサーヴァントなら、怯みつつも取り敢えず防御姿勢は取れるだろう。

しかしセミラミスは王であり毒殺者でしかない。

彼女は毒による不意打ちならばたやすく対処できるが、現代兵器など知らぬセミラミスは常人と同じように数秒の硬直時間を強いられた。

その隙に、絶大な憎悪と殺意がセミラミスを襲った。

『殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる』

あの方を殺したあの方を奪った貴様を、許さない許さない許さない赦さない赦さない赦さない赦さない赦さない赦さない赦さない赦さない赦さない赦さない赦さない赦さない赦さない

——死ね』

莫大な、何より正当な復讐心が。

玲霞を回収するだけで完了する任務を忘れさせてしまう程、彼らの恨みは深かった。

その感情は、直ぐ様行為を以て示されるが、そこまで遣られては動いてしまう者がいる。

『赤のアサシンに令呪を持って命じる、防御を！』

隣にいる辛うじて目を護った、セミラミスのマスターであるシロウの令呪が輝く。

絶対命令権であるその魔力は、眼と耳を潰されたセミラミスの状況に関係なく今即座にできる最上の防御を強制させた。

鮮やかな鱗——神魚の鱗によって防壁を作り出したのだ。

途端、青銅のダガーが赤のアサシンとそのマスターを襲った。

その勢いは正に濁流の如く。

弾幕と化したそれは憎悪さえ込められ、しかし神魚の鱗を突破することはできなかった。

「——貴様らか……ッ！」

そしてセミラミスが失調から回復すれば、逆転した形勢は再び入れ替わる。

先ほどジャックに放った鎖の倍の数の縛鎖によってダガーの弾幕を押し潰す。

「ハアッ……ハアッ……」

「……逃げられましたか」

「おのれ……！」

二人の眼がようやく視力を取り戻し音の衝撃から脱した頃には、雨あられと放たれたダガー諸共に玲霞の姿は消えていた。

聖杯大戦、事実上の第二戦目。

黒のアサシンと赤のアサシンの衝突は、両者共に令呪を一つ使わされるという痛み分けに終わった。

「チッ、斯様な玩具如きで……ッ」

「些か過信が過ぎましたね。反省しましょうアサシン。あの状況から逃げられる彼女は、確かに我々の敵なのだ」と

使い捨てられたスタングレネードを忌々しく踏み潰すセミラミスに、シロウは未だに穏やかな表情で素直に反省する。

魔術師でもない、ただの人間だと甘く見過ぎた。

今回玲霞が逃げおせたのは、やはり油断と気質だろう。

シロウは兎も角、セミラミスはアサシンではあるが、ジャック同様正規の暗殺者とは程遠い。

彼女の逸話的に、セミラミスの本分は謀殺である。

『獲物を前に舌舐めずりなど三流』というが、殺人鬼と女帝にソレを求

めるのは酷だろう。

何より、歴戦の魔術師を容易く罠に嵌めることが出来たこともソレを助長させていた。

「——何事だ」

そんな風に分析していると、ダガーと縛鎖で荒れ果てた礼拝堂に新たな声加わる。

「おや、アーチャー」

無造作に伸ばされ髪に覗く獣の様な耳と尻尾が愛らしさを思わせるが、その眼差しは獣のように鋭く。

緑の衣装を纏った野性味と気品を併せ持つ少女。

赤の弓兵のサーヴァント。

「黒のアサシンです。既の処まで行けたのですが、令呪を使われまして」

「フン、あと一息で縊り殺せたものを」

「成程……して、どの様なサーヴァントだったのだ」

「ええ。幸い真名も把握できまし——」

そこまで語ったシロウの笑顔が固まる。

「? どうしたマスター」

「アサシン、貴女は黒のアサシンの姿を覚えていますか?」

「何を……これは……?!?」

「?」

情報抹消。

対戦が終了した瞬間に目撃者と対戦相手の記憶から、彼女の能力・真名・外見的特徴などの情報が消失する。

正体不明の切り裂きジャックに相応しいスキルである。

対策という手法が取れないアサシン、それが19世紀のロンドンを震撼させた連続殺人鬼である。

「こうなつては、いよいよ庭園の完成を急がなければなりませんね」

黒のアサシンは、事実上ルーラーの陣営。

そして自分達は、丁度そのルーラーを神霊級のサーヴァントで襲撃したばかり。

第六話 犠牲者の記憶

黒と赤のアサシンたちの衝突から少し後。

場所はトウリファス付近の道路上、赤のランサーと黒のセイバーとの戦闘跡に移る。

ランサーがその姿を消して、尻餅をついていたゴールドが漸く立ち上がり、思わず歯噛みする。

「ッ……い」

何も出来なかった。

ただサーヴァントを戦わせて、それこそ三流魔術師でもできる回復魔術を使うだけ。

己の有能さを誇示したいゴールドにとって、栄えある初戦は『殆ど何も出来なかった』という結果に終わってしまったのだ。

加えて、勝手に命令を破ったセイバーを睨む。

本来、セイバーにおいて最高峰の一角の、それ以前に英霊に対しては身の程知らずな程に、道具が裏切った怒りに血を頭に昇らせながら。

一度受け入れた命令を破ったのだからそこまで不思議ではないのだが、ゴールドにとつては『サーヴァントが命令を破った』という事が腹立たしかったのだ。

それが、サーヴァントに対する恐怖の裏返しだと自覚せずに。

「さてと、どうしよつかルーラー。玲霞達の安否確認を最優先なのは当然だけど」

事実上の監督役の暗躍、及び赤のサーヴァントが指揮下にある状態での敵対。

その様な情報を得た以上、彼女達を監督役の教会に向かわせるのは得策では無くなった。

監督役がルーラーを襲う理由があるのなら、そんなルーラー陣営に与したジャックと玲霞を通常の監督役として優しく受け入れる、等ということとは有り得ないだろう。

「加えて、厄介なアサシンのマスターとは」

「実に合理的だ。僕たちさえ襲わなければ花丸だね」

本来矢面に立つつもりなど無かったのかもしれない。

しかも赤のランサーは己のマスターと直接会った事がないという異常事態。

そこにルーラー排除を企む者が、マスター殺しのサーヴァントであるアサシンのマスター。

「他の赤のサーヴァントがマスターと会ったことが無かったらアレだね、赤のマスターはマトモな状態じゃないね」

「そう考えるのが道理でしょう」

アサシンのマスターが、他のマスターを狙う。

邪道どころか王道で真つ当でさえあるその手段に、ルーラーとアライは自分達を狙いさえしなければ見事と称賛しただろう。

だが現在は難敵以外の何者でもない。

そして何よりの問題は、その玲霞に連絡が付かない事である。

だが、それでもアライには余裕の様なものがあつた。

心配はしている。しかし以前の時の様な焦りはない。

それが、玲霞を救出したかの者達への信頼であるのだと、ルーラーは知っている。

「取り敢えず、落ち着いた場所で玲霞からの連絡を待とう。少なくとも彼らもいる以上成す術もなく殺されることはないだろう」

「……では我々は、トゥリファスのミレニア城塞に向かきましょう」

玲霞達の連絡を待ちつつ、今は落ち着ける場所で一息付けることが必要だった。

勿論、黒の陣営と会談しサーヴァントとマスターの参戦動機と大聖杯の状態を把握する必要がある。

だが休息が必要になるほど、聖杯大戦で最強であろう赤のランサーの襲来は二人の精神を削り取っていた。

それにトゥリファスに入れば、流石に赤の陣営も黒の陣営に対応せざるを得ない。

堅牢なルーラーを抹殺するには困難になる。

「おおー、誠ですか!!」

そんなルーラーとアラヤの行動指針に喜んだのはゴールドだ。
先程までのセイバーへの苛立ちは何処へやら。

城塞にルーラーを引き込めたとしても考えているのだろうか、そんな
ゴールドを尻目に、ルーラーとアラヤの意識はセイバーへと移る。

「流石はアルマーニユ最強の英雄。その伝説に相応しい武勇でした」
「しかし、強いなセイバー。いやさ堅い。君と同様の竜殺しか竜殺し
の宝具無しで、君を殺しきることは極めて困難だろう」

二人の惜しみ無い称賛にセイバーは静かに会釈をするが、ゴールドは
内心冷や汗をかく。

やはりルーラーはサーヴァントの真名が視えているのだ。
裁定者の名に偽りはなかったのだと。

「で、では共に我等の居城に参りましょうか」

「いえ、私たちは一緒には行くことは出来ません」
「な」

ゴールドの間の抜けた声に、変わらぬ声色で己の立場を再度口にす
る。

「貴殿方と同行しては、公平性が保てませんので」

「な、何を……貴女達は今まさに赤の陣営によって襲われたではあり
ませんか!？」

「ええ。赤のランサーの語る赤のアサシンのマスター、シロウ・コトミ
ネ。彼には一度会う必要があるでしょう。場合によってはペナル
ティを与えるかもしれません。ですが今貴殿方と共に黒の陣営に向
かう事は、黒の陣営に与していると見られかねません」

例えシロウ・コトミネと敵対するとしても、まだ赤の陣営全てが
ルーラー達を狙っていると決まった訳ではない。

仮にそうだとしても、ルーラーが黒の陣営に合流する理由にはなら
ない。

それこそ聖杯大戦が破綻し、片方の陣営を纏めなければならぬ状
況が生じない限り。

「まあそういうわけで、トゥリファスで宿を取らなきゃならなくてね。
でも大丈夫、ルーラーにはトゥリファス全域をカバーできる感知能力

があるから」

「そッ——」

そんな事を言っているのではない！

と、アラヤに怒鳴り付ける事ができなかった。

先程の何かの影響がないわけではないが、まさかルーラー達に『手柄が欲しいから同行して欲しい』などと口にする事などゴールドには出来るわけが無かった。

しかし——

「で、ではマスターの貴方だけでも！ 歓待させて頂けないでしょうか!？」

何故、そんな事を口にしたのか。

言葉を発したゴールド自身、困惑していた。

サーヴァントとマスターを分断し、マスターを傀儡にする。そんな想像をさせて、ルーラーの心象を悪くするだけなのは、幾らゴールドとて分かっているというのに。

ただ、本命であるルーラーではなく付属品でしかないマスターを全力で持て成さなければならぬと思っただのだ。

（——何故?）

そんなゴールドにルーラーのマスターは苦笑し、

「大丈夫、ユグドミレニア城塞には今日明日中にでも向かわせて貰うよ。件の監督役のせいで調べる事が増えたから、大変だけどね」

「な、ああああ……」

じゃあね、と踵を返し置いてきた車の元に向かう二人を、ゴールドは悪態をつくことさえなく。

彼を知るものならば驚くほど静かに消沈しながら見送った。

第六話 犠牲者の記憶

その男は薄暗い部屋でパソコンを弄りながら携帯を耳に当てていた。

時間帯的に寝起きというべきなのだろうが、彼の場合は少し事情が異なっていた。

「……やあ二世、データ有難う。ちゃんと届いたよ。いやはや、ネットは本当に便利だ。法政科も新しい秘匿方法を模索しないと十年後大変だろうね」

電話の向こう側の声は、アラヤ。

そんな彼に二世と呼ばれた、眉間に皺を作って疲れをまるで隠さない声で返事をする。

「……………それは何よりです」

『……………はあ、随分眠たそうな声だ。忙しいのは解るけど、グレイ君無しで今までどうやって生活してきたかまるで想像できないんだけど』

「……………あなたの電話で叩き起されたので」

『それはすまない。けど仕方ないだろう？ 兵は神速を貴ぶと言うし、今回は時間が限られている。両陣営が全面衝突してからでは遅いんだ。それと徹夜でゲームしている君も悪い』

ルーマニアと男がいるロンドンの時差は二時間しかない。

夜明けまで続けられた赤のランサーと黒のセイバーの戦いのすぐ後に送られた一文は、ただでさえ忙しくかつ主にゲーム趣味などで私生活がだらしない男には色んな意味でキツイものだった。

ロード・エルメロイⅡ世。

本名ウェイバー・ベルベット。魔術協会の事実上の総本山である時計塔にて一級講師を務め、近年創立された時計塔の十二番目の学部である現代魔術学の学部長に収まった近年の魔術師で最も出世した男

だった。

今回の聖杯大戦には参加させるマスターの選定を担当した縁があり、一時はアラヤ本人をマスター候補として選んでいたのは他ならない彼である。

そして、魔術師としては技量も血統も歴史も足りない彼がロード・エルメロイの名を背負うはめになった際、多大な援助をしたのがアラヤである。

彼にとってアラヤとは、最早絶対服従も生温い立場の相手である。そんな彼も、参加を断ったアラヤが運営側のサーヴァントのマスターに選ばれるなど、流石に想像もしていなかったのだが。

『協会から赤のマスターに連絡したかい？』

「残念ながら、片端から掛けましたが……一人を除き、明らかに連絡内容がちぐはぐで、要領を得ませんでした」

『一人無事だったのか！ 凄いな!!』

驚きの声を称賛と共にアラヤが上げる。

女帝セミラミスの手管は伝説に記されている。

あらゆる毒を精製し操る最古の毒殺者なら、何気ない紅茶に現代の魔術師には防御感知不能な毒を仕込むのぐらい、赤子の手をひねるよりも簡単だろう。

少なくともおかしな返事をした赤のマスター5名は全滅したと考えるべきだ。

加えて返事をしたことから、殺傷性の高い毒ではなく、正気を失わせる類と見た。

でなければあの施しの英雄を謀ることなど出来はしない。

「選りすぐりの魔術師……、それこそ中には聖杯戦争経験者や一級講師も居たのですが」

『セミラミスは神代の魔術師だ。現代の魔術師なんて話にもならないさ』

神代と現代。

神を生む真エーテルが溢れていた西暦以前の魔術師にとって、現代の魔術師の悲願である根源の渦さえ『身近過ぎてそもそも到達しよう

と考えない』程、意識と実力に差が存在している。

そんな神代の魔術師にとって、現代の魔術師など超一流であっても誤差でしかないのだろう。

寧ろ回避できたその一人の幸運を誉めるべきだろう。

『しかし、サーヴァントが高ランクの直感、あるいは未来視のスキルを保有していたのか？ 何にせよ不幸中の幸いだ』

流石に七騎のサーヴァントを相手取るのは、補正と特権を持つルーラーと謂えど厳しいものがある。

凡百の英霊なら兎も角、二世が送った時計塔が用意した触媒から推測されるサーヴァントは凄まじい面々が揃っていた。

少なくとも、一対一でも先ず勝ち目がないカルナと同格のサーヴァントがいる可能性が出てきたのだ。

特に赤のランサー・カルナの神性は最高数値。

如何にスキル『神明裁判』でも、その魔力ならば黄金の鎧を含め、令呪の強制など三画使われても抵抗可能だろう。

『マスターや用意した触媒の資料ありがとう。大体の赤のサーヴァントの真名も把握できたよ』

「いえ、それは構わないのですが……まさか監督役がその様な状況とは。そのコトミネ神父についてはもうしばらく時間を頂きたい」

『流石に聖堂教会の人間のデータを用意するのは手間だろう？ 構わないさ』

聖堂教会と魔術協会——時計塔との関係は冷戦の一言である。

今回の大戦こそ協調しているが、本来は小競り合いが絶えないのだ。

そんな相手の所属している人間のデータをすぐ様用意するのは、いくらロードでも無理難題である。

『でも、できれば急いでくれ。実際会った助手によると……彼はセミラミスの傀儡ではなかったらしいからね』

「……分かりました。それと、健在だと思われるマスター——獅子劫界離に接触できるよう、こちらからも連絡しておきます」

『ああ。お願いするよ』

そうして、緊張した面持ちだった二世が通話を切る。

「はあ……」

溜息を盛大に吐きながら、思わずソファに倒れこむ。

派遣したマスター達が傀儡とされ、戦う前に事実上敗北したなど、仮に聖杯大戦に勝利しても時計塔の面子は丸潰れだろう。

最悪、仮にその監督役が聖堂教会の指示で動いているのだとすれば教会との全面戦争も視野に入る。

それこそユグドミレニアとその神父が共倒れし、かつ神父の独断だと教会が全面的な過失と認め大戦そのものを無かったことにできない限り。

軽く時計塔を揺るがす問題がポンポン出てくることに、貴族主義が蔓延る時計塔のロードの一角なんぞをさせられている二世にとって、徹夜ゲームも合わさり頭が痛いのだ。

「シロウ・コトミネ、か」

細かい経歴はこれから調べることになるが、顔写真程度は既に手元にある。

「もし本当に、女帝に誑かされていないのだとすると——」

厄介だな、と。

そこまで呟くと、眠気を噛み殺し立ち上がる。

自分同様聖杯大戦に関わる、ユグドミレニアの反乱対策を行っている召喚科学部長ロッコ・ベルフェバンの元へ向かう為、身嗜みを整え始めた。



「ユグドミレニア城塞に向かおう」

喫茶店で注文した朝食をつつきながら、アラヤは今後の予定を口にする。

『一応車を購入して向かっているのですけど……』

『びええええええええんツツッ！』

『よしよし。ごめんなさいね、もうしないから』

ホテルを確保した頃には、玲霞からそんな連絡がきた。

曰く、ルーラー陣営だと伝えた途端敵対したこと。

赤のアサシンの真名と、そのマスターの情報。

令呪を一画使用してしまったが、相手にも一画消費させたこと。

玲霞達が無事である以上、良い結果と言えるだろう。

尤も、その対価にジャックがガチ泣きし、合流するのに時間が掛かりそうだとということ。

出来る限り早く合流したいが、唯でさえ不安定なジャックの精神の安定が優先されるべきである。

精神汚染スキルを彼女が保有していることを、軽視してはいけない。

それがアラヤとルーラー双方の判断であった。

そして二つ目は、魔術協会に対する問い合わせである。

結果赤のマスターが一人を除いてズタボロであることと、赤のサーヴァントの真名がおおよそ把握できた。

「玲霞達の無事は確認できた。なら足踏みする必要はない。早々に黒の陣営と大聖杯を確認次第シロウ・コトミネを裁定する」

「ええ」

アラヤの言葉に、ルーラーが同意する。

今回判明したシロウ・コトミネの問題は、赤のマスターを傀儡にした事でもルーラーを襲ったことでもない。

問題は、何故ルーラーを襲ったかだ。

ルーラーは世界の崩壊が理論上成立した場合に召喚される。

もしシロウ・コトミネの目的が、本人の意図に沿わずとも聖杯戦争の枠組みを超えるものだとすれば、ルーラーはその使命に従い彼を排

除する必要がある。

「だけど僕達と繋がっている玲霞との交戦があつた以上、あちらも何らかの対策を考えている筈だ。恐らく既に教会には居ないだろうしね。策もなく相手の本拠地に突っ込むのは拙い。というか、彼が狙つてセミラミスを召喚したであろうことから真に彼らが拠点にする場所は、ほぼ間違いない彼女の宝具だろう」

その場合、セミラミスはあのカルナさえ打倒する可能性を得る。無策での突入は自殺行為だ。

「という訳で、策を考えつつ出来る事を遣つて行こう」

トウリフアスからユグドミレニア城塞までは、サーヴァントにしてみれば目と鼻の先。

そもそも街と隣接しているのだ、時間は掛からない。

夜になればまた襲撃が無い訳でもないのだから。

「そういえば、黒のマスターにはあなたの教え子が居るのでしたね」

「そうだよ。頭も良くてかわいい、才能溢れる女の子さ」

自慢気なアラヤの様子は、その黒のマスターとの関係を伺わせた。

まるで生徒を自慢する教師のように。

「……必要以上の肩入れはいけませんよ」

「ははは。……流石にサーヴァントを失つたら保護するよ？ それに肩入れ云々言うなら、彼女達をこんな戦争に巻き込んだダーニツクにキツイ対応をしようさ」

「まあ……それなら構いませんが」

少なくともアラヤが知る彼女は、進んで人を殺してしまう可能性のある戦いに参加するようなタイプの人間ではなかった。

寧ろ魔術師として要求される非人道的な資質を持たなかったからこそ、それに悩んでさえたのだ。

ならそんな彼女が黒のマスターになる理由は、少なくともアラヤには一族の柵以外に考えられなかった。

「真面目だなあ。僕はよく知らないが、委員長タイプというヤツかな。だけど優等生にしては……ハハ、少々食い意地が張っているね。それで何品目だい？」

「だつ、……食べ過ぎでしようか？」

「いやいや、健啖家大いに結構。若い娘がひもじい思いをすることが間違っているんだ。サーヴァントは太らないしね」

完全に子供扱いである。

どんどん食いねえ、と次々注文するアラヤに、歓喜と羞恥で縮こまる。

ここまで子供扱いされたのはルーラー——ジャンヌがジャネットと呼ばれていた、農家の娘だった頃以来だろう。

だがこのアラヤ、容赦しなかった。

虐待現場に乱入して鬼親をブン殴って子供を金と共に自設した孤児院にぶん投げる男だ。

彼女の羞恥を理解しながら凶々しく注文する様子は、伊達に六十年生きた爺ではないのだ。

「もおおー！」

「ははははははー！」

彼女に出来ることは、お腹を空かせた年頃の子供の様にお腹いっぱいになるだけ。

オレルアンの聖女、自棄クソである。

その様子がおかしくて、可笑しくてアラヤは笑った。

笑われた彼女が恥じながらお腹いっぱいになって満足する様が、英雄にも聖女にも当てはまらない。

ただの村娘の様で。

サーヴァントとマスターの関係は非常に密接だ。

それこそ、生前の記憶を夢という形で観ることさえある。

アラヤが見た光景は、敵国に囚われ罵倒されながら火炙りの刑に処される彼女。

救った祖国に見捨てられ、悲劇に終わった聖女の末路。

本来ただの村娘だった彼女が、運命の鑢に磨り潰される事を自ら善しとしたことが、哀しかった。



『——御免ね。私はきつと、多くの想いを踏みにじった』

貫かれた剣に死を感じながら、己を刺し貫く者の頬を血で濡れた掌で撫でる。

その顔立ちには、この現状を生み出した彼女の母親と良く似ていた。

『何故だ……何故貴様は——』

そんな綺麗な顔は、様々な感情に苛まれ顔を歪ませていた。

戦場で幾度も垣間見た宿敵の顔に、酷く罪悪感に胸を打たれる。

実際に心の臓腑を貫かれているのだから、悪い冗談だと笑おうとすると、血が口から噴き出した。

『貴様さえ、貴様さえ居なければ……ッ！』

きつと彼女はこれから母親を殺すのだろう。

戦争の原因である己を殺しても、その狂乱は果たして収まるだろうか。

否である。

その狂乱は方向性を変え、きつと彼女が想う民と国を更に苦しめるやもしれない。

母親譲りな聡明さで、その母の狂乱を止めるにはそれしか無いと悟っている。

そういう風に仕向けるために、こうして貫かれる己の無体に、苦笑を禁じえなかった。

『御免ね■■■■。私は、君の聡明さを利用した』

『謝るくらいならッ——！』

だが、これで良いのだ。

戦いの原因である己が死ねば、戦いは終わる。

刺し貫かれるだけで容易く死んでしまうほど弱り切ったのは、良い機会だった。

王に相応しい人間も居る以上、自分のような存在は人にとって不要でなければならぬのだから。

そんな風に言い訳をしても、この行為は人の想いを弄ぶもの。

罪悪感も微塵も薄れやしない。

この人として当たり前前にやさしい宿敵に、貧乏くじを引かせたことに変わりはないのだから。

『私も君も……セミラミスも。儘ならないね、どうも』

薄れゆく視界の中、宿敵の瞳に映る己の困ったように笑う姿は――



「どうかしましたか？」

「――気にしないで。年寄りには考え事が長いのです」

きつと今と同じ顔だと、アラヤは困ったように苦笑した。

第七話 登城

トウリファスにて合流を果たしたルーラー一行。

彼等は仮眠の後に、ユグドミレニアの本拠であるミレニア城砦を訪れていた。

街から見る事ができる程の城塞へ歩みを進めるルーラーとアラヤの傍らに、ジャックと玲霞はいない。

襲われた彼女達と離れたくないというアラヤの感情以上に、本来黒の陣営となる筈の彼女とそんな彼女のマスターである玲霞がユグドミレニアの本拠に共に赴いても碌なことにならないのは明白だからだ。

「ルーラー。君が赤の陣営ならあそこをどう攻略する?」

アラヤは自分たちが向かっている、トウリファス外縁に聳え立つ城塞を指さした。

——ミレニア城砦。

ルーマニア・トランシルヴァニア地方に位置する都市トウリファス最古の建築物。

トウリファスという街の半分を占めていることもあって、人口2万人の小さな街としては明らかに不釣り合いな威容を誇っていた。

実用性一点張りの造りで、夜にぼんやりと浮かび上がるシルエットは亡者が蠢く地獄の釜を連想させるだろう。

その為、街の住民は不吉な印象を抱いており決して近寄ろうとはしない。

私有地に立つ個人の物件というのものもあるが、呪われた城として恐れられているために観光名所にもなっていないのだ。

「而してその正体は、ヨーロッパ諸国の名城以上の大きさと複雑さとユグドミレニアが60年備蓄していたありとあらゆる魔術礼装と防衛魔術の組み合わせで、信じがたいほど強固な魔術工房である、と。生半可なサーヴァントなら相当骨が折れるだろうね」

「対城級の宝具を持ったサーヴァントがいるのなら任せ、私だけならば正面から討ち入るのみです。伝手があるのなら、弾道ミサイルとま

では云いせんが何らかの大質量を輸送し投下して物理的に押し潰すのも有りかと」

「ああ、うん……そうだね。でも前者は兎も角、後者のそういうのが聴きたかった訳じゃないんだ」

「す、すみません」

フランスの義経反則娘と揶揄される聖女の言葉に苦笑いを浮かべたアラヤは、空に放たれている監視用のゴーレムを見る。

城門や城壁にも種別の異なるゴーレムは勿論のこと、強烈な妨害と探知の魔術が無数に敷き詰められておりサーヴァントでも攻め落とすには相当の破壊力が必要だ。

加えて裏門の側にも、渡るものを阻む濁流の川や方向感覚を狂わせる幻術が仕込まれている。

生半可な魔術師では侵入は死を意味するだろう。

尤も、ルーラーの対魔力は堂々のEXランク。

どのような魔術的防衛も、彼女にとって魔術であるならばAランク宝具相当であろうとも傷一つ付けることは出来ない。

だが、重要なのはそこではない。

逆に言えば、ルーラーの対魔力でも無い限り、攻略には相応の破壊宝具が使用されるだろう。

「対軍宝具、もしくはそれ以上の宝具の余波には気を付けないとね」
「ええ」

サーヴァントは、度々現代兵器では戦闘機に例えられる。

そして宝具とは戦闘機が備える主兵装。

例えるならば、昨夜襲撃してきた赤のランサー、カルナである。

彼の対国宝具は核に例えられ、放つ方向次第ではトゥリファスが一撃で更地になるだろう。

他にも黒のセイバー、ジークフリートでも時間を掛ければ同じことが可能な筈だ。

そんな聖杯戦争がかつて冬木で行われていた。

勿論時代の移ろいもあるのだろうが、街中でサーヴァントを戦わせることがどれほど無謀なことかを知るアラヤは、始まりの御三家の聖

杯戦争創設の始まりの三人を思う。

無論、彼らの時代では安全性が確保されていたのかもしれない。

200年も儀式が成功しないなど、当時彼らには想像もできなかっただろう。

ルーラーは自分たちの進んできた道程を振り返る。

市内は16世紀に建設された民家が軒を連ねており、位置的には都市の北側、最東端に城塞は位置していた。

正面から訪れるには更に東側には三ヘクタールもの広大なイデアル森林と草原を通らなければならない。

「恐らく、この草原が決戦場でしょう。しかし赤の陣営が女帝セミラミスを用意的に召喚したのなら……」

「彼女の逸話から推察するに、城塞という拠点の有利は逆転する」

森の側から城塞を見ると高く切り立った崖となっていた。

あちら側から攻め入るのは、軍勢同士の衝突という今大戦のコンセプト上適切とは言えない。

黒と赤の総力戦の舞台となる、というルーラー達の推察は間違いないだろう。

そして、角度方向によってはそんな極めて強力な宝具が街に向けられる可能性も。

「っ、あれは……」

「当然観られていただろうけども、出迎えが早いなあ」

城塞の門はすでに彼らを歓迎するよう開かれており。

そしてその入り口にホームンクルスであろう数人の従者達。

そして、広大な森の様な清冽な気配を持った青年を連れ、二十歳前の可憐な少女が両の足で姿勢正しく立ちながら二人を出迎えていた。

赤の陣営と事実上敵対してしまった為、緊張を以って挑むべき黒の陣営本拠での初会合。

「お待ちしております。アラヤ先生」

「ああ、お邪魔するよ。ファイオレ」

その始まりはとても穏やかだった。

第七話 登城

「ようこそ裁定者ジャンヌ・ダルク様と、そのマスターアラヤ・トオサカ殿。私が千界樹ユグドミレニアの長、ダーニック・プレストーン・ユグドミレニアです。我々ユグドミレニアは、貴女方を歓迎しましょう」

黒の陣営にとって、その来訪は緊張を持って迎えなければならない案件であった。

舞台装置でしかない聖杯自体が召喚する裁定者のサーヴァントと、本来あり得ぬマスター。

先んじて黒のセイバーのマスターであるゴルドは、意気揚々と赴いておきながら、帰還した際は心此処に在らず、といった豹変振りだった。

話自体は容易に聞き出せたのだが、問題は虚勢だけは一丁前なゴルドの焦燥具合だ。

それも単純な焦りではなく、自身の不甲斐なさに落胆する。といったありえないもの。

警戒するのも無理はない。

逆に報告内容に喜色を隠さなかったのが、ユグドミレニア次期当主最有力のフィオレだった。

曰く、ルーラーのマスターが敬愛すべき恩人との事。

最早恋する乙女といった様子を隠しきれないフィオレに、弟のカウレスは苦笑せずにはいられなかった。

そしてその名を知るものは、もう一人居た。

魔術としての能力もそうだが、何より政治能力に長けた『八枚舌』とまで言われたダーニツクである。

本来彼がいた時計塔の組織内部は、貴族主義派を始めとした権威主義の温床で完全に腐敗している。

新興の名門が座る椅子は何世紀も前から存在すらしない。教育機関においてもそれは同様で、講師・生徒ともに血統の強さを重視する傾向が非常に強い。血統を重視しない派閥も存在するが、派閥間の激しい権力闘争を招くだけの結果となっており、組織の正常化にはほど遠いのが実情である。

そんな時計塔で、幾ら高位の魔術師が亜種聖杯戦争などで命を落としたと言えど、最高位の『王冠』の位階に定められたダーニツクはアラヤのことも当然知っていた。

玉座の間へと案内されたルーラーとアラヤを待っていたのは、そんなダーニツクを筆頭とした黒の陣営一同であった。

昨晚別れたゴールドと黒のセイバー。

天真爛漫で好奇心旺盛と言わんばかりの表情をした、見目麗しい可憐な少女の様な姿をした、黒のライダー。

そしてそのマスターであろう、清楚な佳人といった見た目に反して冷酷なイメージを先行させる美女は、その眼を見開きアラヤを凝視しながら盛大に口元を劣情で歪ませていた。

アラヤ達を案内していた為傍にいたフィオレが、彼女の視線から即座にアラヤを遮るように立つことでダーニツクの厳しい視線に気付かせなければどんな行動を取っていたか。

そんな様子に頬を引きつらせている、凡庸ながら聡明そうな眼鏡の少年——フィオレの弟カウレスと、その側に無言で佇む美しい花嫁姿の黒のバーサーカー。

アラヤと同程度の外見年齢の、少し癖のある髪のある少年が、肌と顔を一切見せない黒のキャスターと共に興味深くルーラー達を眺め。

そして玉座に鎮座しながら二人を見据えるルーマニアの領主たる黒のランサー。

「――― 壯観だね。ここまでサーヴァントが一堂に介する事は、そうしなければならぬ異常事態を除けばそうは無いだろう」

そんな中、畏縮することなく悠々と笑うアラヤに、ランサーが興味深く眼を細める。

「そなたがルーラー、そのマスターか」

「イレギュラーだけどね。そういう君はワラキア公かな」

たったそれだけ。

そのやり取りだけで、ニヤリと笑う両者にダーニツクがいぶかしくむ。

アラヤの経歴は既にダーニツクは調べてある。

二人に共通点など無い筈だが、しかし。

「……領主？」

「ククク、面白い。聖杯は良きマスターを選んだな、ルーラーのサーヴァントよ」

「黒のランサー、ヴラド三世」
「如何にも」

ルーマニアを支配する魔術一族が召喚し、他のサーヴァントに臣下の礼を取らせるこのサーヴァントこそそれに相応しきサーヴァントである。

―――ヴラド3世、通称ドラキュラ公。

15世紀、諸侯の権力が強かったワラキアにあつて中央集権化を推し進め、オスマン帝国と対立したワラキア公国の君主である。

日本ではしばしばヴラド・ツェペシュと呼ばれるが、『ツェペシュ』は姓でもミドルネームでもなく、『串刺し公』、原義では「串刺しにする者」を意味するルーマニア語の異名だ。

そんなルーマニア最大の英雄は、それに相応しい知名度補正という信仰を土地から受けている。

この土地に存在する限り、彼は最強クラスのサーヴァントに迫るだろう。

そんな彼はたったそれだけのやり取りで大層気に入ったアラヤから、隣に佇む裁定者のサーヴァントへ視線を移す。

「オルレアンの聖女か」

「私はルーラーのサーヴァント、ジャンヌ・ダルク。此度は私が召喚され、彼がマスターとなった原因を探す為に此方へ伺いました」

「ふむ？」

「大聖杯の不備の有無の確認の後、貴殿方の聖杯に捧げる願望を確認させて頂きたい」

「大聖杯の不備、か」

ランサーを含め、ダーニツクや一部のサーヴァントやマスターはユグドミレニアが掲げる象徴として大聖杯を見ている。

象徴に不備などあつてはならないのだから。

「勿論、大聖杯の不備によるイレギュラーはボクらの希望的観測ではない。そうだったらひたすら簡単で楽だつて話だよ。その可能性が低いということも分かっているが、一応さ」

「ふむ。ではダーニツク、その様に取り計らえ」

「はッ。ですが申し訳ありません、ルーラーのマスター殿は——」
「構わないよ。大聖杯は見たいけど、如何に裁定者とはいえ他陣営のマスターが立ち入っていい物じゃない。無用に警戒させるつもりは無いさ」

ダーニツクとしては、如何に大聖杯自身が選んだとはいえ、魔術師とおぼしき者を連れていく訳には行かなかつたのだ。

そんなアラヤの言葉に、ダーニツクが満足げに頷きながら玉座の隣から降りる。

「いつてらっしゃい」

「ええ、大丈夫だとは思いますが……」

この分断は、アラヤへの懐柔を図るつもりなのだろう。

それを承知で、彼はルーラーを見送る。

渋々ダーニツクの案内に従うルーラーの背に、ランサーが問いを突き刺した。

「——ルーラーよ。同じ神を信じる者として、我が閥下に加わるつもりは無いのか」

黒のマスターの幾人から、息を呑む音がこぼれる。

あまりにも単刀直入に、ランサーがルーラーを勧誘したからだ。赤の陣営がルーラー達を襲った事実は、当然黒の陣営も周知である。

元より勢力一つを引っくり返せる特権を有するルーラーの取り込みは、必然でさえあつたのだが、ゴルドの報告から彼女の公正さは明確。

何せランサーという知名度補正によって強化されているサーヴァントを例外にすれば、黒の陣営最強のセイバーと同等以上の赤のランサーに狙われて尚、彼女はその姿勢を崩さなかつたのだから。

過剰な勧誘は、無用な軋轢を生みかねない。

「黒のセイバーのマスターにも言いましたが、我々が特定の陣営に付く事は公正さを守るためにありません。それに、裁定者のサーヴァントには幾つか条件となる適性があります」

前置きを入れ、足を止め振り返る。

その表情に曇りはない。

だがその後の言葉は、黒のランサーにとって聞き捨てならないものであつた。

『聖杯に対し願望を持たない』——私には、貴方たちの傘下に入る理由は無いのです」

「——ジャンヌ・ダルクツ、お前の最期は知っている！ 聖女と謳われながら何もかもに、神に見捨てられた事を！ その上で虚偽を重ねるのであれば許さんぞ!!」

「貴方と私は違いますよ、黒のランサー」

ヴラド3世とジャンヌ・ダルクはある程度似通っている部分があつた。

共に同じ神を信仰した護国の英雄であり、最後は味方に裏切られ非業の最期を遂げている。

王と聖女といった違いはあれど、英雄としての軌跡は二人は似通つていた。

だが明確な違いがあるとすれば——

「主は我々を見捨ててはいませんよ。それに私は——主の嘆きを

聞いたのです」

「……」

「私はそれに背を向けることができなかった。私が旗を取ってこの命を捧げたのは、その涙を止めたいが為だったのです。ならばその駆け抜けた生涯は私だけが知るに足る充足がある。誰にも共感されないとしても、少なくとも私は己の生に一片の後悔も無く、故に聖杯に懸ける望みはありません」

そう言い切った裁定者のサーヴァントは再び歩を進める。

この聖杯戦争を正しく調律せんがために。



ルーラーが大聖杯の前と、ダーニツクの案内で後にした玉座にて、頭を振った黒のランサーが玉座にもたれ掛かる。

「――同じ神を信じながらも、相容れぬようだ」

「別に珍しくもない。でなければ同じ宗教でカトリックやプロテスタントみたいにも、分派なんて起きないさ。あるのは己の都合と解釈のみ。そうして歴史は積み重なっていくものだよ」

周囲が息を呑む対応の後に、しかしその黒のランサーとルーラーのマスターとの会話は和やかだった。

「だけど彼女は勘違いをしている。彼女が主の嘆きとやらによって戦場を駆けたように、そんな彼女に対して何らかの感情を動かす者もいるということを」

「ほう。つまり？」

「――腹立つねアレ」

「はははははは！」

アラヤの答えに、ランサーは盛大に笑った。

城塞の如き精神によって固められた論理に対し、その論理に従って背後から殴り付けられ困り果てる聖女を想像し、呵々と笑う。

「ま、彼女の信仰や生前への見解は兎も角。こうして僕は宙ぶらりんになった訳だが……、だからと云って何もしない訳にはいかない。という訳で仕事しようか」

即ち、サーヴァントとマスターの聖杯戦争の参加理由の調査である。

それに疑問を挺したのは、今まで辛うじて沈黙を保ちながら話し掛けたくてもうずうずしていた黒のライダーだった。

「ねえねえ！ それってどんな意味があるのかな！」

まるで小学生の授業風景のような様子のライダーに、アラヤは苦笑し黒のアーチャーを見る。

そんなアラヤに微笑みながら頷いたアーチャーは、ライダーの問いに優しく答えた。

「その願望が、解釈次第では世界の崩壊を招きかねない。ということですね」

「その通りだ。他の亜種聖杯戦争では、暇つぶしで世界を滅ぼしかねない災厄を目覚めさせようとした輩もいたからね。場合によっては、それが問題行動だと自覚していない者もいるのかも知れない。最有力容疑者は赤の陣営に確認しているけれど、念には念を入れて損はないさ」

周囲にいるマスターとサーヴァントを見渡しながら、性別問わず他者を魅了する美貌で笑う。

「という訳でプライベート保護の為、個室を用意してくれると有難いのだけど？」

そんな姿に、出会ったばかりにも拘らず旧友のようにランサーは笑う。

アラヤの姿に、楽しそうだと興味深そうに眼を輝かせる黒のライ

ダー。

警戒と言うより困惑が前に出ているのか、戸惑いの呻き声を小さく上げる黒のバーサーカー。

口許に手を当て微笑みながら、静かにアラヤを観察する黒のアーチャー。

静かに己が主の命令に従い佇む黒のセイバー。

「さて、誰からにしようか？」

そんな中アラヤの意識は、興味なさげに今にもこの場を後にしかねない――黒のキャスターに向けられていた。

第八話 歴代最低のマスター

アラヤは、ミレニア城内の廊下を歩く。

整い、清廉なデザインの廊下は歩を進めるに連れ、武骨から陰湿なものへと変貌している。

それはこれから向かう魔術師の部屋、あるいは工房がその雰囲気にならざるを得ない。魔術を主に扱うからだろう。

しかし、アラヤを先導する者はそんなおどろおどろしい雰囲気な廊下に反し、余りに明るかった。

「スゴイスゴイ！　じゃあ君は、黒のアサシンのマスターを救った直後にルーラーのマスターになったのかい？　まさしく劇的だ！　かつこいーなー！」

「保護者としてはそんな波乱万丈は要らなかったのだけどなあ」

桃色の髪を三つ編みにした、女性物の騎士姿をした美少女——の、様な男性。

というより、恐らく真名看破スキルを持つルーラーでさえ、言われなければ分からないほどの美少女っぷりを全身で表している彼は、黒のライダーのサーヴァント。

即座に自己申告にて明かされた彼の真名は、アストルフオ。

かの聖騎士シャルルマーニュ十二勇士の一人で、巨人退治に月への到達など様々な冒険を成した英雄である。

彼は明確に存在しなかった架空の英霊だが、そんな悩みは些細と云わんばかりの笑顔でアラヤの手を引いて突き進む。

だがアラヤは、彼女ならぬ彼の先に進む黒のライダーのマスターをこそ意識していた。

「——」
無言で、前を向く為表情は見えずに静かに進む彼女は、アストルフオのマスターであろうセレニケ・アイスコル・ユグドミレニアである。

（確か、黒魔術の……）

彼女の経歴は——というより、ユグドミレニアのマスターの情

報はロード・エルメロイ二世から送られたデータに、当然含まれていた。

黒魔術師の古い血筋であり、中世の魔女狩りから逃れるために西欧からシベリアに逃げ延びたものの、魔術基盤を失い衰退の一途を辿っていた一族アイスコル家。

そんな中生まれた、久方ぶりの才女。

(まあ、うん。趣味嗜好は人の自由だが、どうだろうね)

清楚な佳人といった見た目の銀髪美女だが、問題はアラヤに向けていた倒錯的な劣情の視線である。

加えて彼女のサーヴァントは、見目麗しい黒のライダー。ここまで来ると露骨ですらある。

そんな視線に晒された本人が、余裕をぶっこけるのは経験故か。

『はいはい！ ボクからボクからっ!!』

各事情聴取は、黒のライダーの全身の主張によって決定した為、彼女の私室である工房に向かっているが、その間は終始無言である。

それに比例するように、サーヴァントのライダー——アストルフオはアラヤに話し掛け続ける。

悪意が皆無な彼に対し、アラヤ自身も素直に返答し続ける。

普通に相性の良い二人はそのまま歩を進めながら話し続け——

「あ、着いた」

淀み無かったアストルフオが、少し躊躇う様に足を止める。

その理由は、その工房を見れば瞭然だった。

「さあ、どうぞぞ」

ゾツとするような、感情を無理やり抑え込んだ笑みでアラヤを招くセレニケの周囲には、黒魔術としても過度な——拷問器具に溢れていた。

アラヤが注目したのは、それらがキチンと使用されていること。だが、それを口にするのは憚られる。

あくまでアラヤはルーラーのマスター。

聖杯戦争の規律を護る以上の権限は存在しないし、すべきではな

い。

「さて。早速だが君達が聖杯に願う願望を聞いても良いだろうか。先程も述べたが、知らずに問題のある願望を願っている場合もあるからね」

「はいはい、特にありません！ あつても受肉くらいかなあ？」

元気良く『何も考えてねえ』と断言したアストルフオ。

彼はアラヤの視点で、この聖杯大戦屈指の問題の無いサーヴァントである。

無論神秘の隠匿や、真名隠しなどの戦略的側面から見れば問題児なのだろうが、それは協会やユグドミレニアがやるべき事。

そして最も評価すべきは、英雄らしい善を尊び弱者に迷わず手を差し伸べる人格である。

人格、能力、宝具の三点から見て、アストルフオはアラヤにとって花丸だった。

そんな二人は、そのままアストルフオのマスターに目を向ける。アストルフオは少し気不味げだった。

何せ自身のマスターは、アストルフオを召喚した直後に彼を拘束、凌辱を敢行したからだ。

聖杯大戦中なのでまだ最低限弁えてはいるが、それでも夜中にペロペロ嘗め回すと言う倒錯した愛情を向けることに躊躇など無かった。

それでもアストルフオが「面倒臭いなあ、うんざりだ」程度でそこまで強烈に忌避して居なかった為、まだ両者の関係は深刻な破綻には至っていないかったのだ。

それこそ最高純度の神秘の具現化とも云える英霊でなければ、その方法には凶器が容易く使われていただろう。

というか、使われたのが魔術礼装でもないただの拷問器具だったため、アストルフオに傷一つ付けられなかっただけである。

拷問器具に付着している、そしてこの部屋にこびりつく血臭こそが、犠牲者の存在を物語っていた。

例えば生け贄を前提とする黒魔術の使い手であったとしても、その性根が腐りきっているのは言うまでもない。

そんなマスターの聖杯への願望は、少し想像したくなかった。

だが、その行動をアストルフォが想定すらしていなかったのは、あくまで彼が純正の英雄だったからか。

あるいはその人の良さからか。

「——令呪を以て命ずる」

「はい？」

アストルフォが、すつとんきような声を漏らす。

その言葉の意味を理解する前に、セレニケの手の甲の令呪が輝く。想像もしていなかった。

まさか、陣営のトップであるダーニツクから歓待するよう命じられたルーラーのマスター相手に、その性的趣向を向けるなど。

「ルーラーのマスターを無力化し、拘束なさい」

そもそも聖杯を得ることを初めから諦めており、令呪全てで召喚したサーヴァントを辱しめる事だけを考えていたなど。

そのサーヴァントを上回る『趣向対象』を凌辱するために、聖杯大戦序盤も序盤に暴走するなど——彼は想像もできなかった。

第八話 歴代最低のマスター

セレニケは、マスターとしては最低の部類である。

あらゆる並行世界で行われている聖杯戦争。

それに参加、あるいは巻き込まれたマスターは様々居るが、彼女より劣ったマスターは一人としていない。

例えば一般人で、それこそ魔術回路を殆ど持たなくても、マスターとしてはセレニケより数段上だろう。

それは何故か？

彼女は聖杯戦争をしていないから。

勝ち抜く気概もなく、令呪も使い道は最低。

もしサーヴァントがアストルフオでなければどうなっていたか。

即座に反逆、しかも正義として殺されていただろう。

それほどまでに利己や衝動的な欲求で他者を虐げ、苦しめた果てに殺す彼女の『悪癖』は、正統な英霊が見ればその頸を落とす事に躊躇は無いだろう。

例えそれが、衰退の一途を辿る一族から生まれた才女故に、黒魔術の生け贄や残虐性を含めた育てられ方から来るものだとしても、その嗜虐の快樂に身を委ねたのは紛れもなく彼女自身なのだから。

そう。彼女は黒魔術を極める事に人生の全てを捧げていた一族の老婆たちに溺愛され、徹底的に黒魔術を教え込まれた。

黒魔術はその特性上、何の躊躇いもなく生贄を解体するため生贄の懇願に惑わされない冷酷さと、必要に応じた苦痛を与え殺戮の快樂を抑制するための理性が必要とされる。

彼女は老婆たちに教えられた通り、人の赤子、善良な人間、老人、妊婦、胎児と次々に生贄に捧げ、鉄の如き理性で傷付ける事の悦びと虐げる事への愉悅を抑え込み、『完璧な黒魔術師』としてあらゆる残虐な儀式を成功させてきた。

その能力は、一族の中から聖杯大戦のマスターに選ばれるに相応しいモノである。

——だが魔術師と彼女の『女』としての側面は違った。

彼女は感情を抑えるよう老婆たちに教え込まれた反動から、そういった我欲の抑制が全く効かない性格に育った。

溺愛されたとはいえ、それはあくまで魔術師として。

愛情を教えられないまま育てられたこともあり、儀式中に湧き上がる嗜虐性を情欲に変え、関係を持った相手に徹底的に叩き付けてしまうようになったのだ。

それらの行為はただ激しいというばかりではなく、拘束した相手の体を刃物を用いて切り裂き、抉るなど極めて残虐かつ猟奇的とさえ表現できた。

彼女と一夜を共にして無事で済んだ人間など、それこそサーヴァントであるアストルフォを除きこれまで一人も存在しない。

そしてトドメに、彼女は所謂少年愛者であった。

純粋な瞳で世界を眺める少年を見つければ、徹底的に凌辱し拷問を加え、流した涙を舐め舌を吸う。

美少女にしか見えないアストルフォに執着するようになったのも、この性癖によるものである。

唯一彼女が傷付けられなかったアストルフォをセレニケが美術品のように愛でるだけで済んでいるのは、今のところ彼女の魔術師としての理性と、サーヴァントの肉体強度と力量の絶対的な格差が歯止めとなっているだけ。

そしてその歯止めは、アストルフォを超える性嗜好対象が現れてしまったことで完全に崩壊した。

ダーニツクへの恐怖も、魔術師としての理性も忘我の彼方。

そしてその『対象』は、アストルフォの様なサーヴァントではない。完全に強姦魔の思考であったが、もう彼女は自身を止めようとする意志さえ残っていないかった。

目標は、ルーラーのマスター。名前はアラヤ・トオサカと言ったか。日本人のような名前だが、明らかに日本人の容姿ではない。

だが、人種などどうでもいい。

セレニケにとって重要なのは容姿と年齢だ。

アラヤはまさに美少年そのものであった。

幼さを兼ね備え、青年へと成長する直前の年頃。

何から何までセレニケの性癖に突き刺さっていたのだ。

そうして彼女はアラヤを自身の私室——拷問部屋に招き入れた。

もう辛抱堪らないと云う様に、即座に令呪で以て無力化を試みる。セレニケがもし、聖杯戦争をアストルフォと共に生き残った場合、彼を凌辱するために費やそうと考えていたモノだ。

サーヴァントという人類最強の兵器に対する絶対命令権であり、人が英霊を御す為の首輪。

それは確かに、セレニケの欲求十割で使用された。

「ウツソオ!」

如何にアストルフオがその宝具によって、Aランク相当の対魔力を持つているとしても。

短期的、かつ単純な命令は堪え難い。

特に今回はアストルフオの不意を突いた命令だった。

事実、令呪によって機械的に放たれた初撃は完全に彼の意図は無かった。

動きを助長することも、止めようとすることも。

だから仮にアストルフオが令呪に抵抗するのは、その一撃をアラヤに叩き込んだ後になる。

果たしてセレニケがそこまで計算していたか定かではない。

ただ重要なのは――

「……は？」

――令呪に抗えずアラヤに襲い掛かったアストルフオが、壁にめり込んでいることである。

「ノウマク サンマンダ バザラダン カン」

間髪入れずに唱えられた不動明王の真言に応じて、嘴の様な形の光がアストルフオの四肢を啜える様に抑え込む。

それは令呪の様な特殊な契約無しには、現代の魔術では決して意味を為さない最高ランクの対魔力を、貫通していることを意味していた。

「あり、えない――。一体……いえ、今のは!」

「呪術さ」

古来からアジア、中東、南米などに伝わっている魔術体系。

それによる、不動金縛り。

修験道の一つで、不動明王の持つ羅索によって魔を縛る呪術。転じて、人を自由に動けなくする術である。

そして何より重要なのは、呪術は対魔力を貫通する。

魔術が『そこにあるものを組み替えるプログラム』であるのに対して、『自身の肉体を素材にして組み替えるプログラム』であり、物理現

象にあたる。

この性質故に、何れ程優れた対魔力でも一切威力を阻害できないのだ。

そんな呪術を魔術協会は学問ではないと蔑視しており、中東圏に大きく遅れをとっている。

が、黒魔術は非常に類似している点があるため、セレニケでも分析は不可能ではない。

だが、そんなことは重要ではない。

「そつちじゃない！」

確かに白兵能力はお世辞にも優れているとは言えないアストルフオだが、それは英霊の中ではという前提でだ。

アストルフオの筋力ランクはD。御世辞にも高いとは言えない。

だが彼はCーランクの怪力スキルを持ち、肉体のリミッターの解除によって筋力を向上させることが可能だ。

尤も、その性質上自らの身体を酷使する為、その都度ダメージを受けるのだが——たかが魔術師程度、磨り潰して余りあるだろう。

ソレを——

令呪によって振るわれた、アストルフオの手札で最も無力化に優れた突撃槍^{ほうちく}を苦も無く避けながら、一步で懐に侵入。

放たれたアラヤの手掌が、顎を掠める様に振るわれる。

脳を揺らされたその時点で、アストルフオの意識は殆んど暗闇に落ち掛けた。

そのままアラヤは流れる様に並足を揃えて、膝で軽くしゃがみながら踏み出しアストルフオの足を引っ掛けて背中を押し出すように投げたのだ。

これが、アストルフオが吹き飛ばされた——否。投げ飛ばされた全貌である。

勿論、セレニケには一瞬アラヤが消えたようにしか見えなかったが。

その技の名は——鉄山靠。

何故か日本ではあまりに有名な八極拳の技の一つで、正式名称は貼

山靠である。

勿論、そんなことをセレニケは一切知らない。

それを察したアラヤは、それを修得するに至った理由を述べた。

「実家が懇意にしている神父が、八極拳の達人だね。無論家の意向もあつて、自分もそれなりに修めているんだ」

根源に武術で到達する。

そんな荒唐無稽な手段を掲げる遠坂家の一員たるアラヤも、漏れなく武術への造詣は深かっただけなのだ。

勿論、セレニケの理解を置き去りにしたままだが。

「サーヴァントを、そんなもので……!?!」

「技術と神秘は対極にあるものだ。

科学と魔術がそうであるように、神秘は古ければ古いほど力を増すが、技術は世代を経るにつれ研鑽される。

如何にサーヴァントと謂えど、万全な心構えなら兎も角、不意を討った令呪での強制じゃあ隙だらけだったよ」

「ふっ——」

ふざけるな!

そう口にする前に、アラヤの腕が肩口から消える。否。彼女にはそう見えた。

拘束されているアストルフオ同様に、アラヤの手掌が彼女の顎を掠め、脳を揺らす。

サーヴァントさえも気絶させる、典型的な脳震盪の症状だ。

落下するような感覚と共にセレニケの意識は闇に落ちた。



彼女が目覚めた時、彼女の傍にはアストルフオもアラヤも居らず。

それどころか、残っていた令呪さえ無かった。

代わりに目の前には――――怒り心頭な一族の長が青筋を浮かばせていたのだが。

漸く冷静になったが故に、反射的に青ざめるセレニケにダーニツクはその顔を大いに憤怒で歪ませる。

その場で殺されなかったのは、奇跡だったのかもしれない。

だが、彼女のマスターとしての命運はここに決定した。

セレニケ・アイスコル・ユグドミレニア――――戦う前に脱落。

聖杯大戦最大の賢者である黒のアーチャーに聞かずとも、その経緯を聞けば誰もがそう答えるだろう。

――――まあそうなる。

第九話　ファイオレ・フォルヴェッジの回顧

ミレニア城塞の一室。

ユグドミレニアの長であるダーニツクの私室である。

その場に、部屋の主であるダーニツク自身と彼のサーヴァントである黒のランサーが居た。

しかし本来の従者と主という関係が逆転しており、ランサーは寛ぎながらワインを楽しんでいた。

それはダーニツクが臣下として振る舞っているからだだろう。

王として在ったヴラド三世との円滑なコミュニケーションの為である。

そしてその部屋には、セレニケの工房を後にしたアラヤと、ダーニツクと共に大聖杯の不備の有無を確認しに行ったルーラーが招かれていた。

尤も、残念ながらそこに和やかな空気は決して流れていなかったのだが。

「——と、云う訳で。彼女の持つライダーの令呪残り二画は、此方が預からせて貰う。これは我々の自衛と、何よりこれ以上のセレニケ女史の暴走、その抑止のためだ。事後報告になって悪いけど、了承して貰うよ」

「……………」

大聖杯の点検に行っていたルーラーとダーニツクが、共に顔を顰めて頭を抱えていた。

ルーラーは、巻き込んでしまった『護ると誓ったマスター』を危険に晒してしまった、自責の念によって。

しかしそんな聖女の苦悩が目に入らぬ程、激情を抑え込んでいる者がいた。

ダーニツクの顔は、彼を臣下として扱うヴラド三世でさえ憐憫を向けるほどだった。

特に彼は生前、売国貴族という使えない部下に苦しめられた過去を持つ。

それが結果として12年もの幽閉生活を余儀なくされ、挙句幽閉中に妻を失ったのだから、部下の裏切りとも言える暴挙で去来している感情への共感は一際である。

即座にセレニケを殺しに行かなかったのを、逆に称賛するかもしれない。

それほどに、彼は激情を必死に抑え込もうとしていた。

無論、そんな者をマスターに選んだことに関しては、失望を禁じ得ないが。

「とまあマスターの方は兎も角、黒のライダーに関しては何の問題も無かったよ。」

——ルーラー、大聖杯の方は？」

「えっ、……ええ。此方も不備はありませんでした。万能の願望器、大聖杯の威光に不足無しです」

そんなダーニツクを尻目に、アラヤとルーラーは己の仕事の確認をし合う。

結果として、最も簡単に楽観的な候補は外れであった。

舞台装置である大聖杯に問題無し。

であるならば、尚更候補は参加者に絞られた。

このミレニア城塞で行うべき事は、黒の陣営のマスターとサーヴァントの参戦動機や、問題になりうる宝具などの確認になるのだが——

「……アラヤよ。我が陣営の者が失礼した」

「何、気にする程のものじゃない。こうしてペナルティを与えた以上、もう何も言うことはないさ」

「……ッ！」

これにて手打ち。

事実上ルーラー陣営を敵に回す程の事態を手打ちとする。

しかしその引き換えとするのが黒のライダーの令呪というのは、かなり大きな痛手である。

「ダーニツク。厳しい措置かもしれないが、この程度のトラブルは多発するだろう。少なくとも、今後このユグドミレニアを新たな魔術協

会とするならば、もっと厳しい道程が待っている筈だからね」
「……その通りです」

魔術協会三大部門の一つ、時計塔。

たかが零落した一族の寄せ集めにとつて強大過ぎる敵だが、その答えが大聖杯だ。

時計塔がかつて、その地下で眠る『霊墓』から発掘される様々な成果でもつてその勢力を伸ばしたように。

ユクドミレニアは、大聖杯によつて時計塔を上回る。

『霊墓』が危険な発掘作業と、そもそも『霊墓』自体が「巨大極まる竜の遺骸」というモノである以上、発掘できる資材には限度が付き纏う。

だが完成された大聖杯は、そんな生還するだけで讃えられる様な危険性など有りはしない。

万能の願望器、その名に偽りは無いのだから。

ルーラーが既に確認済みなのだが、ダーニツクの大聖杯への願望は無い。

本来大聖杯を手に入れた魔術師ならば、その願望は「根源への到達」である筈なのだが、最早ダーニツクには『ダーニツク・プレストーン』としての人格は殆んど残っていない。

複数の魂を喰らい、肉体的全盛期を維持する為に彼は『ユクドミレニアの長』としての己以外を犠牲にしている。

そしてダーニツクの目的は、大聖杯を旗印にした一族の繁栄そのものの。

それは願望器で願う類いのもではなく、精々が自分の後継達の一助と思う程度。

であれば成る程、この程度の不利は跳ね退けられねばこの大戦に勝利した後がない。

逆に考えれば、爆弾を予め発見できたと思えば随分マシである。

少なくとも黒のライダーが消滅した訳でも、赤の陣営に寝返った訳でも無い。

少し考えるだけで湧いて出る最悪に比べれば、随分とマシだ。

その程度に事を収めてくれたアラヤに、ダーニツクは小さく会釈し

た。

それは、一族の長としての冷静さを取り戻す冷水を浴びせてくれたアラヤへの感謝だ。

その感謝を受け取ったアラヤは、改めて黒のランサーに向き直る。

「では——ヴラド三世。貴方の願いを聞かせて貰おう」

「無論、我が名に被せられた汚名の払拭。ただそれのみよ」

ヴラド三世に着せられた汚名——即ち、『吸血鬼』^{ドラキュラ}である。

彼の父の呼び名から派生した小竜公^{ドラクル}と呼び讃えられ、基督教最大の護国の英雄の一人とされる。

そんな彼の風評を貶めたのは、一つの創作。

ブラム・ストーカー作の、ヴラド三世をモデルにしたとされる『吸血鬼ドラキュラ』。

全世界に大ヒットし、現在の吸血鬼のイメージを作り上げた作品である。

それこそ、経済対策ではあるもののルーマニアでも吸血鬼を前面に出した商業アピールさえ成されている。

「余の生涯に悔いは無いとは言わん。だが、その行いを後世にどのよう^うに評されようと文句は無いのだ」

確かに、ヴラド三世の生涯は悲劇的なものだった。

幼少期から不遇な扱いを受け、王となつてからも強大な隣国と売国貴族達に苛まれた。

それを覆し、領地を護るため悪魔と揶揄される行いもした。

故に、その行いに恐怖した味方に背中を刺され幽閉の果ての最後であつたが——全ては己が行った事なのだから。

その結果の悪評や汚名は自業自得。ヴラド三世は受け入れるだろう。

「だが、アレは到底我慢ならん」

ミシリ、と彼の手が添えられた椅子が軋みを上げる。

全く自身に関係の無い、基督教徒としては最も嫌悪すべきものの一つである死体の怪物。

そんな存在として自分が描かれ、挙句それが全世界に広まってい

る。

それこそヴラド三世本人の影さえ歪ませる程に。

意味が分からない。

執筆者が眼前に現れれば、彼は英霊として持ちうる全てを以て拷問の果てに凄惨な死を与えるだろう。

しかしそれでも彼の怒りは収まらないのだ。

身勝手に、理不尽に着せられた汚名を完全に払拭し、人類の歴史上から完全に消滅させる。

それこそが、ヴラド三世の聖杯に捧げる願いなのだ。

ヴラド三世の怒りに対し、同じく時計塔で風評被害故に通常のアプローチを経て根源へと至る道を閉ざされたダーニツクは、深い共感を。

同じく魔女というレッテルを長年着せられ、しかし全ては承知の上。加えて現代において名誉挽回されたジャンヌは憐憫を。

そりやそうだ、と風評に自身も巻き込まれた事のあるアラヤは、当たり前前に理解を示した。

「黒のランサー。君の第二宝具は禁断の、そして諸刃の剣だ」

「……ッ！」

故にアラヤの口から告げられたそれは、正しくヴラド三世にとっての逆鱗である。

「ダーニツクも聞いてくれ。その宝具を発動すればランサーの尊厳と君の命を引き換えに、このルーミアの知名度補正を超える強大な力を齎すだろう。だがもし……方に一つの可能性によってそれが発動され、拳句暴走した場合——僕達ルーラー陣営はソレを討伐対象にする」

ヴラド三世の禁断の第二宝具——『レジェンド・オブ・ドラキュリア鮮血の伝承』。

後の口伝によるドラキュラ像を具現化させ、吸血鬼へ変貌する宝具である。

その戦闘能力は全世界に波及する規格外の知名度補正と怪物のポテンシャルによって、超級サーヴァントにさえ匹敵する。

無論、ランサーはこの宝具の発動を何より嫌悪しており、ダーニツ

クにとって令呪による強制は死を意味する。

だが、世の中何が起るか分からない。

「そう、その宝具の発動は決してあり得ないことじゃないんだ。例えばダーニツクが操られたり、令呪が奪われる——なんて状況もあり得る。」

そしてそれが暴走した場合の脅威は、聖杯大戦の枠組みを容易に飛び越えるだろう」

吸血鬼は、人の血を吸うことで眷属を増やす。

ポピュラーでさえある吸血鬼の危険性であり、同時にバイオハザードを意味する。万が一暴走した吸血鬼が野に放たれば、どれだけの人間が犠牲者になるか想像出来ない。

一人でも逃してはいけないし、その吸血対象はサーヴァントにも及ぶだろう。その危険性は計り知れない。

「二人とも、本当に気を付けてくれ」

令呪の奪取。

それは考えて居なかったのだろう。

アラヤの言葉に頷いた黒のランサーは、自らの口に手を当て思案に耽っていた。

だからこそ、アラヤがダーニツクに視線を一瞬向けたことに気付かない。

そうしてダーニツクは一連の忠告の意味を知る。

——これは警告だ。

ヴラド三世に対してではない。彼は死んでも第二宝具を発動することは無いのだから。

この警告は追い詰められた場合、恐らく躊躇せずに強制するだろうダーニツクに対してである。

つまりアラヤはダーニツクにのみ告げられている。

——『発動させるのなら、後先を考えて発動しろ』と。

もし警告通りに、聖杯大戦の枠組みを超えて暴走した場合、ルーラーは全サーヴァントに討伐命令をその特権によって行使するだろうと。

然して、この忠告は特別な意味を持たなかった。

この大戦の結末を変えることは出来ず、大した変化をもたらすことは無かったのだ。

しかし、無意味では無かった。

ダーニツクの選択によつて、この大戦最後の戦いが一族に有利に関わってくるのだが――。

とはいえ、彼には関係の無い事柄でしかなかった。

第九話　ファイオレ・フォルヴェツジの回顧

――ファイオレ・フォルヴェツジ・ユグドミレニアは魔術師として欠陥品である。

ダーニツクの後継者、つまりユグドミレニアの次期当主と目され、一族の中で最も有望視されている才女。

ユグドミレニアのマスター達の中でも実質的なナンバー2に位置し、その美しい外見に相応しい柔らかさを持ち、そして凜とした物腰はまさに貴人。

そんな彼女には、生まれつき欠陥があった。

類稀れな魔術の才を有していながら、その歪んだ魔術回路を持つが故に両足は機能しない。

時に耐えがたい苦痛に襲われ続け、車椅子による生活を強いられていた。

彼女の魔術回路は両足に存在し、足を治療するためには魔術回路そのものを切除しなければならない。

逆に言えばそれだけで彼女は健全な両足を取り戻せるのだが、逆に言えば両足を取り戻すには魔術師としての才を棄てなければならな

い。

そして魔術師の将来を熱望する一族や両親の期待と長子としてのその義務から、フォルヴェツジ家の後継者として魔術を捨てることは許されなかった。

そもそもそんなことで思い悩む時点で、彼女に魔術師としての資質など無かったのだろう。

彼女は魔術を行使する才に恵まれはしても、魔術師としての資質非人間性を持ち合わせてはいなかった。

彼女の不幸は、そんな非人間性を持ち得ていなかったにも拘わらず、魔術師として自身を取り繕い、時計塔でやっていくことが出来た事だろう。

例えそれが血の滲む努力によって成され、しかしそれが周囲の魔術師達からは「当たり前前なこと」として受け入れられてしまったとしても。

そんな彼女は日々、当然のように心を擦り減らしていった。
フィオレ自身、その事に気が付かずにながら。

『おや、大丈夫かい？』

そんな中、彼女はアラヤと出会った。

弟や知り合いがいない一人の状態で、車椅子が溝に嵌まってしまいう往生してしまっただ。

魔術を使えば簡単に解決できる小さなトラブル。

しかし視線を上げれば、丁度フィオレを視る監視カメラの存在があった。

神秘の隠匿は、時計塔に於ける最重要案件。

神秘は神秘であるが故に力を持ち、その先に魔術師の到達点である『根源の渦』があるのだ。

神秘を喪った魔術は、魔術師にとって存在意義を持たない。

ある意味、魔術の発展以上に最優先されるのが神秘の隠匿なのだ。

そういう意味では、科学の発展の中でもソーシャルネットワークは致命的でさえある。

当時のフィオレ、というより魔術師全般は電子機器の類いを扱う事

を殊更不得手にしており、自動車椅子など当然扱っていない。

それでも監視カメラで魔術の痕跡が残ってしまうのは、相当な問題であることは理解していた。

少なくともこの状況で、溝に車椅子の車輪が嵌まる程度で魔術を使う訳にはいかなかったことは。

そんな最中に声を掛けてきたのが、彼だった。

恐らく、他に善人が通り掛ければ手伝ってくれたかもしれない。

故に、そこまで珍しい出会いでは無かった。

アラヤとの出会いは、そんなありきたりなモノだった。

後に時計塔で再会し、フィオレの足を治せる人物であるなど。

況してや、信仰に近い思慕を向けることになるなど、思いもしなかった。

それからは、彼女の学生時代に於ける絶頂期であった。

完治した両足で、野原を駆ける喜び。

当たり前の事が当たり前に出来る、その事の何たる幸せか。同時にそれを与えてくれた主治医、アラヤに感謝した。

アラヤは魔術師というより、魔術使いであった。即ち、根源を目指していないということ。

本来根源を目指す魔術師にとって唾棄すべき存在であったが、彼は極めて例外的であった。

何故なら彼は至った者。魔術師が敬う事はあっても、低劣な魔術使用と同列視などあってはならない。

そしてフィオレの感性にとって、魔術師らしくないアラヤは砂漠に出現したオアシスそのものであった。

話し、傍に居るだけで魔術師として振る舞わなければならない彼女のストレスや負担はどんどん癒された。

『それは、そうだね……魔術特性みたいなモノなんだよ。マイナスイオン発生装置だと思えば……え？ ああ、マイナスイオンとはね——』

彼と傍に居るだけで、余りにも直接的な幸せを実感できた。

魔術師的な思考を持たず、ただの少女の様に扱ってくれる。

それだけではなく、魔術師として振る舞わなければならない時にも主治医として、あるいは魔術師として様々な助言をしてくれた。

そんなフィオレがアラヤに対し、思慕するのは時間の問題だった。

『——うん、君はもう大丈夫だね』

だけれど、アラヤはフィオレの恋人でもなんでも無かった。

エルメロイ教室——ロード・エルメロイ二世が学部長を勤める現代魔術科に託した後、アラヤは彼女の傍から居なくなった。

当然だ。あくまでフィオレの両足の主治医であり、そこから個人的に魔術の発想等の手助けをしていた教師でしかない。

時計塔に所属していないフリーランスのアラヤが、フィオレの傍を離れるのは必然であった。

未だに彼女にとつて最初の『死』であった、最初から殺すために飼っていた愛犬。

そんな事とは知らずに、飼い犬として愛してしまった時のそれとはまた、別の喪失感。

——傍に居たい。

恋慕、と安直に表現して良いのか。

そもそもフィオレには恋愛経験など無いし、身近な異性など最愛の弟だけ。最愛と表しても、あくまで姉弟としての意味合いしかない。

余りにも強烈な感情に対して、彼女は上手く折り合いなど付けられなかった。

だから魔術に没頭した。

漸く両足の不随が完治したのである。

彼女がそんな両足を使って、より自由に駆ける為の礼装を造ろうとするのは当然の帰結だった。

アラヤに紹介された師の指導が、余りにも長けていたからか。

フィオレが造った魔術礼装は、何時しかフォルヴェツジの至上礼装等と呼ばれる様になった。

そんな噂を聴いたのか、アラヤが彼女の元を訪れた。

フィオレはアラヤの称賛を、麻薬の様だとさえ思った。

もう一度彼に褒められる。ただそれだけに人生を賭けたくなる程

に溺れた。

魔術師にとって、魔術とは根源の渦へと至るための道標。

故に魔術師は魔術を道具としてしか扱わない者達を、魔術使いと蔑んだ。

その思想は、父からフォルヴェツジの魔術刻印を受け継いだフィオレにも確り根付いていた。

しかし、もう駄目だった。

彼女にとって魔術とは、アラヤの役に立つ道具に成り下がっていた。

フィオレが、ユクドミレニア一族の中でも、長であるダーニツクに次ぐ能力と立場に至っていたにも関わらず。

優れた魔術師になる。

全てはアラヤに褒められる為に。

そんな事を彼が知れば、きっと良い顔をしないでだろう。

そんなフィオレの執着とは裏腹に、アラヤは何処か人が自身に縛られる事を望まない節があつた。

子供が独り立ちする事を望む父のように。

『——酷い男だ。人を虜にすることに關して右に出る者が居ないというのに、奴はそんな者達が自らの元を飛び起つ事を望んでいる。挙げ句他の■■々の様な人でなしという訳でもない。』

奴は決して、自らに継るものを見捨てないのだ。これほど人間に都合の良い■■は居ないだろう。加えてどの様な悪人であろうと、奴の前では只人に成り下がる。

次第に悪人は駆逐され、善良な者達だけが溢れ、健やかな環境が形成され——結果、理想郷が誕生するのだろう。外敵が居らず、奴が■■として振る舞えば、の話だがな。

だが、奴は■■としてではなく人として民草に接し、外敵から民草を護る為に人として死んだ。遺された者達がどうなるか理解しながら、未来の為に自身の死を最大限利用して。

そら、酷い男と呼ぶしかないだろう？』

最も彼を望み、結果として外敵となった女はそう答えるのだろう。

フィオレを指して、よく見た光景だと溜め息を吐くだろう。そんな中、聖杯大戦が起こった。

ユグドミレニアの一員として、その能力故に黒のマスターに選ばれたのだ。

そうしてフィオレは、黒のアーチャーを召喚した。

彼女が用意した触媒は『青黒い血が付いた古びた矢』。

場合によっては、射たれた者ではなく射った者が喚ばれていた可能性も大いにあった。

それこそ最強の英雄であっただろうが——フィオレにとっては、射たれた者こそが最適だったのだから。

「こういうやり取りも久しぶりだね。元気そうで何よりだ——お邪魔するよ、フィオレ」

「はいっ、——ようこそお越し下さいましたアラヤ先生！」

全ては、彼の役に立つ者に成る為に。

第十話 邪竜成らず

アラヤにとつてフィオレという少女は、本当に驚くほど『優等生』と表現すべき人間だった。

魔術師としては天才と呼ぶべき潜在能力を持ち、同時に冷酷な求道者たる魔術師としては失格と呼ぶべき人間性。

優れた才能に他者の為に涙できる優しさを両立している、まさしく好ましい人間だった。

先天的な障害を足に持っていたが、其処は老人のお節介で既に解消済み。

魔術世界では些か生き辛いだろうが、そんなもの幾らでも周囲がカバーすればいい。

実際、彼女は姉弟にも恵まれていた。

人格的な素養こそ魔術師向きではあるものの、弟のカウレスも中々どうして悪くない。

才能こそフィオレの足元にも及ばないだろうが、そんな事は、友人のロードに任せればどうとでもなる。

何より、姉弟仲は頗る良かった。

だからだろう、彼女が聖杯大戦等という仕様もない争いに参加していると知った時。

アラヤは素直に首を傾げた。

——何故？

足に障害があるのなら理解出来る。

聖杯でも、或いは召喚する英霊に治療して貰うというなら理解出来た。

だが、それはアラヤが既に完治させている以上、あり得ない。

再発するようなモノではないし、仮に再発しても自分に連絡すればいいだろう、と。

それとも聖杯で根源に、^{から}に到達する？

確かにあの大聖杯なら、可能性が無い事も無い。

合計十四騎ものサーヴァントが召喚されるこの聖杯大戦ならば、難

易度も相応に下がるだろう。

無論、根源への到達は抑止力の排斥対象。どちらにせよ至難の業だ。

まあ魔術師としての参戦理由としては、そうおかしな事では無いが——果たして彼女はそういうタイプの非人間だったか？

否である。

故に、直接本人に確認すればいいだろう。

ルーラーのマスターとして彼女との会合を設けられた時点で、アラヤにとって聖杯大戦の五割の目的が遂げられていると言つて良かった。

残り五割はルーラーのマスターになった後に、突如生えてきた問題であるので、本来の目的は彼女とその弟を無事に存命させることだけである。

そんな「分担して行く。効率優先効率優先」と、つい先程自分のマスターを不在故に危険に晒した事に自責の念を抱いているルーラーを丸め込んで別れたアラヤは、フィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニアと再会した。

第十話 邪竜成らず

「初めまして、黒のアーチャー。今のボクの名はアラヤ・トオサカ。かの偉大なる大賢者と会えて、心から光栄に思うよ」

フィオレに召喚された黒の弓兵アーチャーのサーヴァント、その真名を『ケイローン』と云った。

ギリシヤ神話にて、綺羅星の如き大英雄達を育て上げ大成させてきた半人半馬の大賢者。

この場に居るケイローンの下半身は人のそれだが、その真名を隠すためのモノだろう。

敏捷を筆頭に複数のステータスを低下させても、必要な措置だ。

しかしその秘された外見にたいして、ケイローンはケンタウロス族という訳ではない。

ギリシャ神話にて当初権勢を誇っていた、ティターン神族。

その神王たる大神クロノスを父に、女神ピリユラーを母に持つ紛れも無く完全な神である。

ろくでなしのバーゲンセルと言つて過言ではないギリシャ神話の神々に於いて、あるいは蛮族犇めく神代ギリシャ世界に於いて。

異様なまでに良識と善良な精神性を持った、殊更稀少な存在だ。

弓兵のクラスでは、その精神性と器用万能と表現できる能力。

燃費や気高さや理念から、合理的や悪い意味で利己的な魔術師とその英雄らしきから関係に齟齬を起こしやすい者の多い中。清濁併せ持ち他者を慮る事の出来るケイローンは、紛れも無く聖杯戦争に於いて『大当たり』に分類されるサーヴァントだ。

そんな彼は、己のマスターから熱心に聞かされていた少年と対し、即座にその正体を理解した。

裁定者のサーヴァント、その在り得ざるマスター。

己がマスターであるフィオレにとって恩人であり、思慕を向ける人物でもある——そんな情報が些事と呼べるほどの事実、瞠目する。

「こちらこそ。マスターからお話は兼ね兼ね、マスターの恩人というならば、心からの歓迎を」

それでも、流石は神話屈指の大賢者。

刹那に彼へ様々な感情を抱くも、笑顔で差し出された握手に応じる。

そこにアラヤなりの誠実さを感じ取ったからか、或いは——。

「しかしフィオレ、本当に大当たりを引いたね。彼はこんな戦争に収まるサーヴァントではない。

君が聖杯大戦に参加したと聞いて心底不思議で心配だったが——

——成程。彼を召喚できる触媒を手に入れたのだとすれば、その価値は万能の願望器にさえ比肩する」

「その通りです、アラヤ先生。私が大聖杯を得た暁には、彼の願望とは

別にアーチャーの受肉を願うつもりです」

アラヤの言葉にはにかみながら肯いた彼女は、己の聖杯大戦への参加理由を口にした。

つまりフィオレという少女は聖杯による万能の願望器を、学費として使うつもりなのだ。

医神アスクレピオス。双星の英雄神カストル。英雄船長イアソン。駿足のアキレウス。

そして——最大最強の大英雄ヘラクレス。

何れもギリシャ神話に名高い英雄たちを育て、いずれも大成させてきた神話屈指の教育者である。

太陽神アポロンから音楽、医学、予言の技を。

月女神アルテミスから狩猟を学び、その他にも神々から様々な智慧を授かって、バンクラチオン剣術・槍術に加えて拳闘と組技を複合させた世界最古の総合格闘技『全ての力』を習熟している神代の万能者だ。

その教育範囲には、無論魔術も含まれている。

そんな大賢者の教えを受けられる。

所詮英霊の複写である使い魔風情と侮る魔術師も居るやもしれないが、少なくともフィオレはその価値を正しく理解している者だった。

——大賢者ケイローンの教えを受ける。

それがフィオレ・フォルヴェツジ・ユグドミレニアが聖杯大戦に参戦した全てである。

総ては、己自身がアラヤの役に立つ為——そんな想いが下地に

あるのだが、そこはケイローンも語るのは野暮と良く理解している。

そんなフィオレに、思わずアラヤは胸を撫で下ろす。

ケイローンの願いが何にせよ、この賢者の求めるものは決して裁定者が動かなければならないようなモノではない。

そう断言できるだけの人徳ならぬ神徳を、初対面ながら感じ取れるからだ。

視線を向けられたケイローンは自らの胸に手を当て、己の恥ずべき願望を口にする。

「私が聖杯に捧げる願いは、嘗て手離した『不死』^{神性}を取り戻す事です」
「それは——また……」

故に、告げられたケイローンの願いが聖杯レベルの物が不可欠だということも理解できた。

神話曰く、かの大賢者はとある諍いを止めようとし、誤って神毒の矢を受けてしまったという。

ヒュドラ——かの神代の九頭蛇の身に宿る神毒は、かつて完全なる神であるが故に不死だったケイローンを、無限地獄に叩き落とした。

人類最古の英雄譚の、原初の英雄王から『忍耐の究極』と称され、そもそもケイローンに神毒をもたらしてしまったオリュンポスの大英雄さえ、その神毒には自害という選択をさせた程。

ケイローンは己にとって最後の生徒を送り出した後に、己が不死を叡神プロメテウスに差し出してその地獄を終わらせた。

例え、それが異形^{半人半馬}に生まれたが故に愛されなかった、両親との唯一の繋がりだとしても。

結果として彼は己を人の領域に貶めたとされるが故に、神霊は召喚出来ない聖杯戦争で召喚されうるのだ。

その証拠に、本来純血の神である彼の神性は評価規格外^{Ex Rank}が相応しいにも拘らず、サーヴァントとしてのパラメータはCランクにまで低下している事を示していた。

死が恐ろしいのではない。

ヒュドラの神毒を知るケイローンは、死もまた救いになる事を身を経て知っている。

彼が取り戻したいのは、愛されなかった両親との唯一の繋がりだけなのだ。

しかしてそれを取り戻す方法など、ソレを受け渡した相手であるプロメテウスからの返還か、万能の願望器ぐらいしか有りはしないのだから——。

◆
アラヤと黒の弓兵との会合は、あまりにも穏やかに終了した。

そもそも問題が発生する余地が無いのだから、当然の帰結である。

「……………はあ」

余りに熱の籠った息を、フィオレは緊張と共に吐き出す。

それは見栄の為に溜め込んだ、彼女の慕情の深さからか。

ユグドミレニアの事実上のNo.2という立ち位置は、フィオレから相応の時間を奪い取った。

聖杯大戦の為に、サーヴァントの触媒を得るための下準備等。

宣戦布告までの、時計塔での下準備。

宣戦布告後の、今まで。

一体、アラヤと再会したのは何時振りか。

彼が己のサーヴァントとして、かの聖女を連れている姿に、自身の不足を感じた。

自分達より先にアストルフオが彼を連れていった時、彼のマスターの悪癖から何れ程心配したか。

「私は、何処かおかしくはなかったですか？」

髪や服装を改めて見て、ふと自分の身体を見る。

最初に気にしたのは、完治して随分経つ両足だった。

一時期歩ける事、走れる事が嬉しくて堪らなくて走り続けていた。

結果、衰えとは程遠い太腿が完成してしまったのだ。

アスリートとも言えるガチガチのソレに、思わず青ざめたのは良い思い出である。

勿論今も趣味はジョギングではあるが、魔術さえ使って納得できる脚線美にしたのだ。胸部もそれなりにあると自負しているが――

「むむ……」

脳裡に浮かぶのは、アラヤに侍る一人の美女。

仕事の助手役——所謂表側の秘書、助手である六導玲霞だ。

やや自己を過少評価しがちなフィオレでも、それなりに容姿には自信がある。

そんな彼女からして魅力的なのだ、玲霞は。

女性としての魅力を数値で表すなら、フィオレは彼女に一回り劣ると断言できる。

アラヤが多くの子供達を引き取り、孤児院をスポンサーとして援助している事も、彼女がそういう境遇だとも知っている。

彼女をアラヤが傍に置くのは、そんな彼女が魔術師とはまた違うベクトルで『普通ではない』とも。

だがアラヤを慕うフィオレにとって、そんな事は重要ではない。

そんな彼が見馴れる女性のレベルが高いと、非常に不味いのだ。

其処にオルレ안의聖女が加わった。

今は義務感で彼を護っているだろうが、果たして何時までもつか。

成る程、聖女に相応しい清廉で潔白。そして何より信仰深い人なのだろう。

だが、それはあくまで聖女として。

彼女を構成しているのは、聖女として神の声を聞いてからの七年間だけではない。

それまでの、村娘ジャンネットとしての彼女こそが聖女ジャンヌ・ダルクの土台だ。

アラヤの機能は、ソレをこそ注視する。

その人柄も、彼女が犠牲とした村娘に手助けしたいと考えるだろう。

「やっぱり、ライバル多いなあ」

そこまでの事をフィオレは知らない。

解るのは、知っているのは後者のアラヤの人柄だけだ。

そもそも、異性として見られているかも怪しい。

少なくとも六十歳以上等という曖昧な自称である。

アラヤにとってフィオレとは、孫娘も同然やも知れないのだ。

その難易度は計り知れないだろう。

それこそ、聖杯をと考えなかったとは言えない程に。

「でも、恋心を聖杯に捧げるのは——ちよつと処じやなくみつともないよね？」

聖杯大戦？ ユグドミレニア一族の行く末？

そんなもの、フィオレにとつて心底どうでも良いのだ。

誰かがアラヤに、その想いを告白する時が来るだろう。

それがフィオレか、あるいは知らない誰かがかは解らない。

ただ解ることは、一人が走り出せば全員が走り出すと言うことを。

なればこそ、その本命の戦いの為に出来うる限り準備することこそが肝要なのだ。

「でもアーチャーの用事つて、何なのかしら？」

笑顔でアラヤを送った、アラヤとは別の信頼を向ける大賢者。

彼は、フィオレの私室に居なかった。

『少しお時間頂けますか？ 少し、マスター抜きでお話したいのです』

フィオレの私室から、名残惜しさを湛えつつも笑顔で送り出されたアラヤ。

そんな彼はケイローンに密かに囁かれた言葉と共に、彼から先導を受けていた。

「アーチャー、君から見てどう思う？」

「ルーラーが召喚され、そのあり得ざるマスターである貴方が選ばれた理由、ですか？」

その最中、聖杯大戦に於いて最高の頭脳たる彼に問い掛ける。

「赤の陣営、七人のマスターの内六名が音信不通……宜しいのですか？ 黒の陣営の一員の私にその様な情報を明かして。私はマスター

やランサーに求められれば、ソレを告げなければならぬのですか」

「そりゃあ、君は僕のサーヴァントではないからね？ ちよつとした知見を得るのだから、君相手なら十二分な協力だ。対価を払うのは当然の義務さ」

ぶつちやけ、こういった推理どうこうはアラヤが得意としているモノではない。

こういった類いは、最早アラヤのパシリと化した時計塔エルメロイ二世の君主が、それこそ助手の玲霞の領分である。

特に赤のマスターを傀儡に堕としたのがかのアツシリアの女帝だとすれば、魔術的なアプローチに対する対策は万全だろう。

「大聖杯の不備の無さは、既に確認済みでしたね。そして我々黒の陣営が問題で無いのだとすれば——最早私等に問う必要もないのでは？」

あらゆる虚偽を暴く赤カのランサールの言葉が、最早犯人を指し示していた。

——シロウ・コトミネ。

聖堂教会から派遣された監督役。

しかし時計塔から派遣された赤のマスターを、一人を除く全員を掌握した可能性がある最大の容疑者。

「いやあ、仮にルーラーが聖杯大戦の管理の為に召喚されたのだとしても……僕のようなイレギュラーを聖杯が呼び込む程の要因を、少々想像したくなくてね」

「……成程」

「で？ 僕は一体どこに向かっているのかな？」

「向かっている先は、各サーヴァントに用意された私室です。そこに、少々困った案件がありまして」
「ほう」

二人が城内の一室の扉の前に辿り着くと、自室と言ったのに反し態々ノックをした。

「私です」

『ハイハイー！ 今開けるよ!!』

それに対し、返ってくる元気のいい返事。

その声に、アラヤは覚えがあつた。

「ライダー？」

「あれ？ ルーラーのマスター？」

内側から開かれた扉。

その先には、先程無力化された黒のライダー・アストルフオ。

——そして、付設されたベッドに寝かされている、衰弱したホムンクルスの姿があった。



そうして語られる、名も無きホムンクルスの冒険。

そのホムンクルスは、ゴルドがアインツベルンからの技術提供を受けて造り上げた、魔力供給用の人形であった。

アインツベルンの技術が高過ぎた為に人の形と自我を獲ているが、その用途は唯只管の魔力タンク。

それに対する、そのホムンクルスはバグが生じたとも言える。在り得ざる自我の発生。

とある事情から生まれた死の恐怖。

彼は胎児そのものと言える有様でありながら、自ら自身を閉じ込めていたフラスコを魔術で以て破壊し脱走。

すぐさま見付かり、場合によっては処分される筈の彼の運命は終わらなかつた。

『うん！ 助ける!!』

英霊アストルフオ。

生粋の英雄にして、その逸話によって理性が蒸発しているサーヴァント。

今回その癖の強すぎるスキルは、正しく善い方向に機能した。

あらゆる疑問を挟まず「彼を救ける」という結論を即決出来たのだ。そして唯一この事を相談できるケイローンに頼り、現在に至るとい

う。

「ほー、すんばる」

その余りにも英雄譚の始まりの様な一連の話に、アラヤはケイロー

ンの顔を見る。

話の続きを綴るならば、彼等が如何に魔術師の城から脱出するか?!
といった処だろうか。片割れが異性なら文句なしなのだが、そこは
アストルフオの容姿でゴリ押せるだろう。

その状況に苦笑だけで返すギリシャの大賢者に、アラヤは思わず小
さく拍手すらしした。

知患者すら居た。キャステイング完璧である。

「ボクを彼と引き合わせたという事は、ルーラー陣営に保護を求める
という事かな?」

「彼を助けてあげて!」

アストルフオの、珍しい真剣な声色にベッドに横たわるホムンクル
スの少年を診る。

医神アスクレピオスの師であるケイローンがこの場に居る以上、ア
ラヤが医術的にどうこうする余地は余り無いのだが――。

「アーチャー、君の見解は?」

「設計段階での構造欠陥と、其処から来る過労ですね」

「となると……調整は後でやるとして、それこそ一先ず彼をこの城か
ら連れ出すくらいしか、やる事が無いんじゃないのかな?」

そのホムンクルスが寝たきりの状態なのは、そもそも彼が生まれた
ての赤子も同然というだけである。

そんな出産直後の赤ん坊が、長時間這い続けたらこうなるだろう。

「魔力供給用のホムンクルス……この城に來た時からわかっていた
が、アインツベルンからの技術提供でも受けたのかな? 完成度が高
すぎる。用途的にヒトガタにする必要も無い筈だし、自然の嬰兒と呼
べる程ではないが非効率だ」

「どうやらキャスターが、その宝具に優秀な魔術回路を保有した個体
が必要だそうで」

「黒のキャスターか……」

まだ面会を行っていない、ユグドミレニアが召喚した魔術師のサー
ヴァント。

城の周囲に配置されていたゴーレムからの予想と、そもそも当人の

顔を既に見ている為に真名だけはアラヤも把握している。

「取り敢えず、彼を保護する事は了承するよ。彼が自我と生存欲求を取得した段階で、ルーラーのマスターである僕は彼を無辜の民と判断した」

「おおー やったー!」

アラヤの言葉に、アストルフオが両手を挙げて喜びの声を上げる。

「よかったね、君!」

「あ、ああ……。だが、いいの……か?」

そんな彼に辛うじて返事を返すホムンクルスは、しかしやや遠慮しがちにアラヤに自らの懸念を問い掛ける。

「あまり喋らない方が良い。君にとつて喋る事はおろか、口を開く事すら億劫の筈だ。君の質問だが、勿論大丈夫だとも」

ユグドミレニア側に見れば、彼は唯一では無いが貴重な資源・資産の一つである。よそ様に軽々にくれてやる物では無いのだ。

だが、彼等は既にライダーのマスターがアラヤに手を出している。アラヤは手打ちとしたが、彼等の矜持的にそんな訳にはいかないのだ。

少なくとも、ルーラーのユグドミレニア側への心情が劣悪なのはどうしようもない。

魔力供給用のホムンクルスは、幾つも存在している。

その内の一体を見逃すだけでルーラーの心象を少しでもマシに出来るのならば安いモノである。

尚、ホムンクルスを文字通り燃料にしている時点で、それを知った聖女たる彼女の心象はより劣悪となるのだが――。

「――そもそも、彼等に話を通すつもりは無い」

尤も、あくまでそれはホムンクルスの少年の保護を、ユグドミレニア側に馬鹿正直に伝えた場合の話なのだが。

手を少年――というよりは彼の寝ているベッドそのものに向け、アラヤは己の魔術回路に魔力を焚べる。

瞬間、ベッドの床に裂け目が生み出され、ベッドが立つ部屋の床がまるで底なし沼のように変貌する。

「これは……」

「少し目を閉じて居なさい」

それはホムンクルスの少年への配慮なのだろう。

緩やかに沈むベッドに戸惑う少年の目を覆う様に手を翳し、彼の意識を奪う。

「何これスゴイ!？」

「まさか、虚数魔術ですか？」

「桜ちゃん——まあ君たちだから話すけど、実家の子が虚数属性でね。その時にちよーつと見取らせて貰ったのさ。」

まあ詳しくは言えないけど、多芸なんだよボク」

地水火風空の五大元素に寄らない、実数ではなく虚数という架空元素を操る素養——虚数魔術。

魔術において「ありえるが、物質界にないもの」とされ、極めて稀少とされる魔術属性である。

——あり得ないことだった。

アラヤ・トオサカの扱う魔術は、水にまつわるものだった筈である。虚数と水の二重属性？

無論あり得ない事では無いが、しかしその力は赤のランサーを一瞬とはいえ動きを封じる程であった。

それに加えて、虚数属性まで極めているなど信じがたい。

その段階で、その力量は君主ロードと呼ばれる者の域を遥かに超えるだろう。

しかしアストルフオは希少属性に目を輝かせるのみであり、そもそもケイローンは既に察している。

幸いながら、ソレを追求する者はこの場にはいなかった。

そうしている内に、ベッドが完全に虚数の裂け目に沈没するのを三人は見届けた。

「イメージは湖面かな。虐待された子供を保護する際も、こういった窓口を創る事で緊急避難させているんだ。これなら親御さんを考慮する必要はないからね」

「僕も入っていい!？」

「駄目です」

——こうして、名も無きホムンクルスの少年は物語から離脱した。

今後彼は肉体の調整をアラヤによって行われ、決して長くは無いが短命を少しだけ克服。

後に己の同胞を助けたいという願いを抱くが、しかし彼が戦場に出る事をアラヤは許すことは無かった。

他に虐待されている子供がいると訴えたからと言って、保護した子供を親元に向かわせる愚行を許す訳が無いからだ。

斯くして、彼が邪竜に成り果てる可能性は失われる。

死に瀕する事が無く、故に竜殺しの心臓を与えられることは無い。

故に短い間に人間性を育む出会いも失われるものの、それが不幸かどうかを論じる事が出来るものは、少なくとも彼ではなかった。



ケイローンの私室を後にしたアラヤは、他の組み合わせと面会していたルーラーと念話で会話していた。

黒のアーチャー、その問題点の無さと、ホムンクルスの少年を保護した旨を伝えた彼は、しかし何かを言い淀む彼女に言葉を止める。

『——マスター、問題発覚です』

黒のキャスター、アヴィケブロンゴーレム・ケテルマルクトの宝具『王冠：叡智の光』。

彼が生前完成を願い、叶わなかった至高のゴーレム。

強大なユグドミレニアの切り札の一つ、それ故の問題点が浮き彫りに成った。

第十一話 下手しなくとも抑止力案件

黒の狂戦士・フランケンシュタインの怪物は、そのルーラーのマスターが苦手だった。

血や臓物を「美しい」と思うなどの常識からは逸脱した感覚をもって生まれた彼女は、その感性故に創造主であるヴィクター博士から「失敗作」の烙印を押された。

『——お前は狂った怪物だ』

生前、その絶対的な呪詛を定められた罵りを受けたことが、彼女にとって最大のトラウマとなった。

その時から理性を持ち、常識を理解しようとしている。

それこそ、狂化スキルがDランクという低さに現れる程。

そんな彼女にとって、アラヤという人物は未知そのものであった。

「(キレイ——)」

生前に見た、犬の内臓。

歪んだ感性故に美しいと感じたソレが、路傍の石に見える程に美しいヒトガタ。

死体の接ぎ木が、落雷によって稼働した偶然の産物が、その価値観を根底から揺るがされた感覚。

「そうか、生前得られなかった花婿を……。その渴望の根底にある感情を察するのは、初対面の僕などでは無神経窮まるだろう」

ただひたすらの■——美を叩き込んでくるそれは、きつと己の美しさを最大限抑え込んでいるのだろう。

もし、その美しさを全開にすれば、そんな思考をバーサーカーが出る余地がある訳がない。

その美は、人の価値観を揺るがす——否、人に価値観を教えるものなのだから。

少なくとも、彼女はそう直感した。

この調停役を名乗るマスターは存在しているだけで争いを治め、あるいは存在しているだけで争いを生んでしまうのではないか。

そんな支離滅裂な妄想さえ浮かんでくる。

「ウ、ウウ……ッ」

「だけど、君は胸を張って欲しい。人の願いに矮小も崇高もありはしないが、本来君のソレは祝福されるものなのだから」

彼女は、ほんの僅かに後退りながら呻くしか出来ない。

自分の願いに一切の悪意なく感情移入し、中立の立場とはいえ応援してくれる。

彼に己の願望を肯定されれば、気を抜けば嬉しさの余りに涙が溢れてしまうかも知れない。

自己の価値観の否定、ではない。

これは矯正というには余りに優しく、啓蒙というには余りに暴力的である。

フランケンシュタインの怪物は、心底恐怖していた。

もし己を召喚したマスターが、彼ならば。

聖杯への願望など、彼への感情に塗り潰されていたかもしれないと。

「——濟まないカウレス、僕は些か彼女とは相性が良くないみたいだ」

黒のバーサーカーの聴取が終わり、彼女の私室を出たアラヤは、即座に彼女のマスターに頭を下げた。

カウレス・フォルヴェツジ・ユグドミレニア。

フィオレの弟であり、黒のバーサーカーのマスターだ。

「意外ですね。アラヤさんは、誰にでも好かれるものかと」

「保護した孤児なら兎も角、あくまで聴取程度で終わるべき関係の彼女には、そこまで深入りすべきじゃないよ。

それに、ああいう反応は珍しくないさ。虐待され親に愛されなかつた子は、特にね」

「あ、はい」

サラリと、彼が孤児院のスポンサーでありその孤児の大半をアラヤ自身が直接保護している事をカウレスは実感した。

子供の味方であるその姿は、その外見からピーターパンを連想させるに十分だった。

「カウレスも元氣そうで何より。姉弟揃ってマスターとは、運が良いのか悪いのか」

「姉さんの付き添いでこの城に来たら、令呪がポンです。」

思わずその場で、ロード・エルメロイ二世に電話かけそうになりましたよ」

「それはそれで、爆笑できそうなのが何とも」

カウレスは、姉フィオレを通してアラヤと知り合った。

フォルヴェツジの才媛、その最大の瑕疵である両足の不随。

それを取り除いてくれた恩人である。

姉の苦しみを良く知っていた弟としても、純粹な感謝があった。

元々両親から姉のような才能と万全の肉体を望まれ、然れど凡才故に失望されたのが彼だ。

姉の身体面と常識面でのサポートを任じられるという中々に酷な境遇で育つも、しかし姉への嫉妬はごく一般的なものに留まり、厭世的にはなったものの、魔術師の人でなしな生き方は嫌っているため現状に満足していた。

だが、フィオレの両足の快復と共にカウレスは、本当に『用済み』となった。

無論万が一のスペアとしての役割はあったが、瑕疵の無くなったフィオレの才覚は、カウレスの存在を両親に忘れさせるほどであった。

元より魔術師としての執着は無く、それどころか敬遠すら内心していた。

フィオレのリハビリが終わったら、身を引くのも良いと思ってさえた時。

フィオレの経過を診に来たアラヤが、カウレスにも声を掛けた。

『君達に紹介したい講師が居てね。きつと、君達を良い方向に導いてくれるだろう』

とある顔の怖い魔術講師と出会い、カウレスは変わった。

『原始電池』と呼ばれる魔術の適性を見せ、フィオレの才覚に埋もれる筈だった凡才は、見事エルメロイ教室の生徒として成長していった。

後数年もすれば、フィオレほどでは無いにしろ魔術師として過分無く大成したと言えるだろう。

カウレスは、アラヤと彼が巡り会わせてくれた師に心から感謝している。

そんな彼が本来ユグドミレニアが敵対した時計塔のロード・エルメロイ二世君主と、未だに強い繋がりを持っているのは当然であった。

間者と言うには無能極まり、裏切り者というには生温い。

カウレスは自身の勝利も狙いつつ、より穏便な結末を望んでいた。

正しく、アラヤが望むモノと同じ結末を。

「カウレス、君達は生き残る事だけ考えなさい」

「分かっていますよ、アラヤさん。俺、姉さんより視野広いですから」

カウレス・フォルヴェツジ・ユグドミレニア。

彼は姉が人を殺せない善人であることを、よく知っている。

フィオレは決して、人でなしに成れないことを。

「姉を支えるのも、弟の仕事ですよ」

第十一話 下手しなくとも抑止力案件

ルーラー、ジャンヌ・ダルクの問題報告。

共にいたケイローンと即座に別れ、彼女の下に馳せ参じる。

つまり、その問題となったサーヴァントとマスターの元に。

「先生の、一体何が問題なのさ」

「マスター、少し静かにしていてくれ」

「……わかりましたあ」

キャスターのマスターは、アラヤとルーラーに対し酷く気に入らない顔付きの少年——ロシエ・フレイン・ユグドミレニア。

最早睨み付けているレベルに顔を顰める彼は、ある意味フィオレと類似していた。

ユグドミレニア自体が、歴史が浅く魔術回路が貧弱な一族の集まりでありながら、若冠13才にして人形工学の分野で名を馳せる天才児。

そして聖杯に対する願望が、召喚したサーヴァントを受肉させその教えを得るというものだった。

ロシエとフィオレとの決定的な違いは、その人間性だろう。

魔術師として必要な欠陥の無さが、彼女の欠点だとするならば。

ロシエは魔術師の資質以上に欠陥を持ってしまった点だろう。

彼の生家であるフレイン家は、生まれた子供の養育の一切をゴーレムに一任する奇矯な教育を行っていた。

刻印の移植が可能になるまで工房からほとんど出る事もなく、両親とさえ一度も顔を合わせることもさえ無かった。

結果として彼は、自分を世話したゴーレムは形状の一つも残さず記憶していながら、人間に対して興味を持たない少年として成長した。

そんな彼が現状、唯一例外としているのが、彼が召喚した黒のキャスター、アヴィケブロンである。

「アヴィケブロン、貴方の宝具は聖杯大戦の枠組みを超えています」

ルーラーが厳しい面持ちで相對するサーヴァントは、顔の一切が隠されていた。

貌だけではない。青いマントとボディスーツで全身を隠した、老練な魔術師や気位の高い知識人を思わせる雰囲気を持つ男。

本名、ソロモン・ベン・ユダ・イブン・ガビーロール。

十一世紀の哲学者にして詩人。

そして魔術の一ジャンルである「カバラ」の基盤を作ったと伝えられているカバリストだ。

史実に於いて、アヴィケブロンはその哲学的な思想をアラビアからヨーロッパに伝えたと言われる。

言うなれば、ルネッサンスの文化を生み出すことに助力した偉人だ。

魔術基盤の一つを生み出したという、魔術世界において非常に重要な影響を与えた魔術師でもある。

魔術師の英霊として召喚される事も、納得の英雄だ。

そして黒の陣営において、ゴーレムの生産と宝具の設計・開発に明け暮れる『ゴーレムマスター』。

それ故に、ルーラー陣営の問題提起は彼にとって無視できない一大事であった。

「……我が宝具は、私の生前からの悲願なのだが？」

既に、彼の願望はルーラーが聞いている。

アヴィケブロンが生前完成を願い、叶わなかった至高のゴーレム。

彼の見果てぬ夢が宝具化した、受難の民族を樂園に導く王にして守護者であり救世主。

宝具『ゴーレム・ケテルマルクト王冠：叡智の光』。

その完成と発動こそが、アヴィケブロンが聖杯大戦に召喚された悲願である。

その宝具を「発動させるな」と裁定者気取りの聖女に口にされれば、如何に小心者を自称する彼と言えど、黙っている訳にはいかなかった。

「別に強さは問題じゃない。その巨軀も学習能力も、再生能力もどうこう言うつもりは無いさ。

「ただ君の宝具は現行テクスチャを塗り替える」

手に顎を乗せたアラヤは、困り顔で紙にその宝具の問題点を書き込み始めた。

「自立した固有結界、拡大し続ける『樂園』か。そりゃあ見過ごせないとも。比喩抜きで特異点さえ発生しうる」

『ゴレム・ケテルマルクト
『王冠：叡智の光』の問題点。』

それは自立した固有結界という性質から、『周囲の大地を際限なく
「楽園」へと塗り替えていく』という途方もない性質だ。

その楽園は物理法則を覆し、彼の思想も合わさり新たな神代の始ま
りになるやもしれない。

即ち、現代社会の終わりとも言える。

「黒のキャスター。もし貴方がこのままその宝具を発動させた場合、
我々はその特権を用い全サーヴァントを招集。全力で排除します」

正直、その判断は言い掛かりではある。

何故ならアヴィケブロンは特別なルール違反はしていないのだ。

「僕の宝具は、人を救う為の存在だ」

「残念ですが、ルーラーのサーヴァントとしてその宝具が発生させる
『楽園』を見過ぐす訳にはいかないのです」

しかし、彼の想いをルーラーは容赦なく斬り捨てる。

どれだけアヴィケブロンが人を救うと主張しようとも、その主張は
十一世紀のサーヴァントの信仰心でしかない。

元より極度の厭世家である彼が思う楽園が、彼の想像通りのモノで
ある保証はどこにもないのだ。

アヴィケブロン『楽園』が人を許容しなかった場合、責任の取り
様が無いからだ。

アヴィケブロンは間違いなく、聖杯戦争に勝利してはいけないサー
ヴァントの一人と言えるだろう。

それも、彼がサーヴァントである事を差し引いた上の話。

今を変える事が出来るのは、今を生きる人間だけ。

根本的に過去の存在であるサーヴァントが、今の世界を変える事を
アラヤとジャンヌは許す訳にはいかないのだ。

『
』
チリ、と。

二者の間の空間がひり付く。

お互いの主張が折れない場合、待っているのは武力衝突だ。
ユグドミレニア城塞は、最早アヴィケブロン工房である。

聖杯大戦開始の時点で、彼が製造したゴーレムは千体を超えている。

ルーラーが如何に強力な英霊といえど、マスターを抱えるサーヴァントではない。

マスターであるアラヤを集中的に襲うことが、アヴィケブロンが取るべき戦術だ。

無論、それでもルーラーを敵に回すのは愚かだろう。

アヴィケブロンは、カルナのような超級サーヴァントではない。

彼我の戦力差は歴然と言えど、アヴィケブロンの勝機が皆無とは決して言えないのだ。

だが、彼の悲願を果たす直前のこのタイミングで、それを否定されれば戦うしかないのだ。

「……なので、お互いの着地点を用意しよう」

その戦意に水を差すのは、アラヤの役割であった。

「……マスター」

「ルーラー、何事も頭から否定するのは良くないさ。」

アヴィケブロン、取り敢えず君の宝具によってもたらされるリスクについて理解して貰えたと思う。

少なくとも我々は、それを見逃すことが出来ない」

「だが、私がそう易々と妥協する訳が無いのも、君達に伝わったと思うが」

「それは最終的には、だろうか？」

その過程を、上手く取り繕う事も出来る筈だ」

元よりユグドミレニアの尽力により、『ゴーレム・ケテルマルクト王冠：叡智の光』は完成間際だ。

しかし、そこに必要な最後の材料が不足していた。

即ち、『ゴーレム・ケテルマルクト王冠：叡智の光』を半永久的に稼働させる為の『炉心』。

より具体的には、優れた魔術師そのものが。

現状、炉心足り得る魔術師は見付かっていない。

否、手段を選ばなければ無い訳でも無いが、それによって生じる問題は無視できないモノだった。

「僕らは君の宝具の完全発動を許す訳にはいかないが、逆に言えば『楽園』の無制限の拡大以外は問題ではないんだ」

「つまり、敢えて未完成にしろと？ それは妥協ではないのかな」

「妥協しない事自体が、現状は短慮そのものと言えないかい？ なら、より確実な道筋を選択すべきだ」

「……………」

そういう意味では、敢えて『アダム』を未完成にするという選択もありではあった。

アラヤの言うとおり大戦に勝利出来れば、聖杯を用いてより完璧な『アダム』を造ることも不可能ではない。寧ろ推奨すべきだろう。

「それと、もし君の宝具を戦力ではなく救世主として運用するならば、試行実験をして欲しい」

「……………何だつて？」

「君はこの宝具を生前に完成させられなかった。それはこの地上が『楽園』となっていない事から明らかだ。つまり君の宝具がどんな『楽園』を齎すか、君自身が確認出来ない。」

先ほどもルーラーが言っただろう？ 我々がネットクとしているのはそれなんだよ」

『アダム』が、救世主に足り得ないと？」

「それを確認する為にも、予め何度も試運転するのは寧ろ当たり前では？ 申し訳ないが、万が一の失敗も許されない以上、こちらとしては検証に検証を重ねて欲しい」

アヴィケブロン信仰心を否定する様なアラヤの言葉は、逆に言えばルーラー陣営が出来る精一杯の譲歩と助言である。

「これは君の信仰心如何の問題じゃないさ。」

そうだ、いつその事月辺りを『楽園』にすればいい。そうすれば検証するのに周囲を気遣う必要はない。

テラフォーミングと言えるかは分からないが、素で人類の発展に繋がらそうだ」

「君は——」

否定ではなく肯定を。

どんどん溢れ出るアイディアと活用法に、素直にアヴィケブロンは感心した。

ある意味、ルーラーのような優等生とは程遠いだろう。

何せ問題の活用法を考える調停者の主など、問題極まるのだから。

「――ここで君達を敵に回すより、『アダム』を完成できる可能性は高い、か」

遠回りではあるが、ルーラーと彼女が召集する全サーヴアント。それらを敵に回してしまえば、たとえ『アダム』が完成したとしても破壊される可能性は十分にある。

少なくとも赤のランサーと黒のセイバー、この二騎を同時に敵に回しては一溜まりもない。

黒のランサーを筆頭として、アヴィケブロンが確認しているサーヴアントも非常に強力で、あるいは厄介な存在だ。

少なくとも、一か八かに賭けて失敗した場合を考えれば寧ろ当然の保険だ。

もし、ここで召喚されたルーラーがジャンヌ・ダルクではなかったら。

具体的には聖女マルタだったら、ガタガタ抜かす前にアヴィケブロンを拳でブチ抜いて黙らせただろう。

あるいは、そのまま退去させていたかもしれない。

万が一にも、聖杯大戦が無辜の民を脅かす事の無いように。

あるいはジャンヌ・ダルクが、誰かを依り代にした召喚形式であればその特権で宝具の完成そのものを禁じたかも知れない。

無論、それによって様々な問題、あるいは軋轢が生まれたかもしれない。

そういう意味では、ルーラーとアヴィケブロンという歯車の間に、アラヤは水というより油を差した、というべきだろうか。

チラリ、とアヴィケブロンはルーラーを見る。

少なくとも、彼女は己のマスターの考えに理解と納得を見せていた。

「ルーラーのマスター」

「？」

果たして、アラヤの判断が正しいものかは解らない。

だが、アヴィケブロンはアラヤの配慮を理解した。

自分を気遣い、出来る限りの譲歩をしてくれている。

その気になれば、その強権を用いてアヴィケブロンという問題自体を消すことも出来るだろうに。

聖女のサーヴァントにお似合いなのは、聖人めいた精神が必要なのだろうか。

どちらにせよ、如何に人付き合いが苦手なアヴィケブロンといえど、伝えなければならぬ事がある。

「——君の配慮に、感謝を」

「何、どうやらそれが役目らしいからね。

まあ報酬が無いのが、何とも言えないが」

「それは仕事と呼べないのでは？」

「其処ら辺は、大戦が終わったらルーラーに要求しよっかなあつて思ってる」

「私ですか!？」

一番貧乏くじを引いているのは、或いはこの聖女かも知れない。先程の剣呑さなど忘れ、アヴィケブロンはそう思った。



「いやあ、取り敢えず出てきた問題が黒のキャスターだけで本当に良かった」

「本来、問題無しが最上なのですが」

「流石に其処までは高望みだよ。まあ、本来なら黒のセイバーとゴルド氏みたいなデイスコミュニケーションが主なんだろうけど」

黒のセイバーのマスター、ゴルドの私室を後にする二人は、ミレニ

ア城塞での役割を果たしたことを確認した。

「顕在的な問題は黒のキャスターの宝具ですが……」

「あれだけ釘を刺してやらかしたら、申し訳ないけど退去 unavoidable なあ。一応ダーニックにも伝えて居るから、今出来るのはこれくらいさ」

そして潜在的な問題である、黒のランド三世ヴラド三世の第二宝具。

此方も黒のキャスター同様に、それを発動させるであろうマスターのダーニックにも忠告した。

「この後僕らに出来るのは、万が一に備えることだけさ。

想定できる最悪に、出来る限り対策を行う。戦争だろうと何だろうと、必要だと思うよ?」

「その通りです」

後者に関しては、成り果てる対象が『吸血鬼』ドラキュラであるならばルーラーが正に適任である。

聖女として聖人スキルを保有する彼女は、特効となる聖水の作成は勿論、それを用いた聖別も容易だろう。

吸血鬼はその強力なスキルと膂力の数々に比例するように、その弱点は非常に多く何より致命的なものだ。

その中でも聖女が作成した聖水を用い、聖別された武器を用いれば、自慢の不死性もクソも無い。

そういう意味では聖人が召喚されやすいとは謂え、裁定者としてジャンヌ・ダルクが召喚されたのはヴラド三世にとって福音に近い。

「アヴィケブロンアヴィケブロンの宝具に関しては、既に『保険』の仕込みも終わっている」

「! …… 『彼等』ですか」

「この城の把握するついでに、君から連絡を受けたと同時にね」

「周到ですね」

「そうじゃないと、すぐ殺されちゃう処だったからね。『私』も、彼等も」

裏工作などお手の物、と言わんばかりの口振りにルーラーが苦笑する。

そのままこの城塞を後にする為、城内の警備をしているホムンクルスに声を掛けようとし――。

「ツ！」

ルーラーのその広大な知覚能力が、新たなサーヴァントの気配を感じ知した。

そんな彼女の感知能力と同期しているアラヤも、その新たなサーヴァントの様子をある程度理解する。

「うーん、清々しい程の暴走っぷりだ」

「行きましょう」

「という訳なんだ。ダーニック達に謝ってくれと助かる」

「畏まりました」

二人に頭を下げるホムンクルスに手を振りながら、近場の窓から身を翻しミレニア城塞を後にする。

同時に、事態は急速に動き出した。

その存在をユグドミレニア側が感知し、ゴーレム越しの投影で姿を確認。即座に戦場を指定する。

二度目の戦場は、東側の広大なイデアル森林。

そこに防衛のゴーレムを蹂躪、あるいはその攻撃全てを受け入れながら満面の笑みを浮かべる狂戦士が戦端を開いていた。

そしてそれは――筋肉だった。

「――ふははははは!! 圧制者よ! 汝の悉くに死を与えんツ!!」

どつかの劇作家に唆され、黒の陣営に突撃した赤のバーサーカー。

真名をスパルタクス。トラキアの剣闘士であり、第三次奴隷戦争の伝説的指導者。

かのサーヴァントについて特筆すべき点は、最高ランクの筋力でも、評価規格外の耐久でもない。

バーサーカーのクラススキルである狂化。その堂々の評価規格外に至って尚、決して揺らぐ事の無い精神性にこそあった。

その性質上、偶々聖杯戦争に巻き込まれた一般人が、偶々スパルタクスを召喚でもない限り――彼は最悪のサーヴァントと言え

るだろう。

彼は圧政者を赦さない。

そういう意味なら、虐げられる一般人と契約した場合は非常に頼り甲斐のあるサーヴァントとなるかもしれない。

万が一マスターが理不尽に虐げられる子供の場合、狂化されている事を感じさせない程、理知的かつ穏やかに応対するだろう。

だが現代魔術師という、その大半が貴族等の支配者層な者達だ。つまり自分を支配し、使役する為の契約である。

そんな隷属を、彼は絶対に赦しはしないのだから。

そして今彼が目指すのは、生前からして圧制者である黒のランサーである。

彼はその圧政故に売国貴族たちから国を護り、更には驚異の犯罪率ゼロ%を為した。

しかしその圧政故に、恐怖した貴族達に背中を斬られた。

英霊に至って臨機応変に対応することはあっても、彼の『王』としての気質が変わることは無いだろう。

無論サーヴァントは召喚したマスターの影響を色濃く受けるが、今回ヴラド三世を召喚したのはダーニックである。

つまり、どう足掻いてもスパルタクスにとってヴラド三世は圧政者なのだ。

正しく、彼は叛逆に向かって邁進していた。

加えて――

「――アレは見捨てるしかないと思うか？ 赤のライダー」

「説得できると思ってる、アンタの方が変わり者だぜ。姐さん」

一戦目とは違う、複数同時戦闘。

聖杯大戦の醍醐味、その短くも激しい第二戦目の開幕である。

第十二話 SAN値チエツクになります

黒の陣営の本拠、イデアル森林で雄々しい高笑いと共に、轟音と衝撃波が木々を吹き飛ばしていく。

赤の狂戦士・スパルタクス。

彼は自分を包囲する黒のキャスターが配置したゴーレムを破壊しながら、呵々と笑みを浮かべた。

反骨と叛逆の化身は、己を阻む壁を前にした時こそ歓喜する。

最高ランクの筋力と評価規格外の耐久値を誇る彼は、赤のセイバー相手に数合保ったゴーレムの群れを自損を完全に無視しながら粉碎していく。

「ぬん？」

其処に風を切りながら、反逆者を止める為に騎士が駆け付ける。

「コホン。——遠からん者は音にも聞け！ 近くば寄って目にも見よ！」

吹き飛ばされた木の上に、軽やかささえ見せながらマントをはためかせて降り立つ。

その容貌は可憐で愛らしい少女のようで、しかして彼は騎士である。

それも、伝説的騎士であった。

「我が名はシャルルマーニュ十二勇士、アストルフォー！」

とあるホムンクルスの少年の一件が、完全に解決した今。

真実一切の憂いを持たないアストルフォーは、高らかに己が真名を名乗りながら、叛逆の戦士に得物を突き付けた。

「あ——ツハはハハハハハハハハハハ!!」

「によわわわッ!」

しかし如何せん、騎士らしく名乗り上げるには相手が悪い。

高らかな騎士の名乗りなど、叛逆者にはまるで意味がなかった。

騎士とは即ち、王という権力者に従う走狗でしかない。

即ち、彼が打ち破るべき障害以上の何物でもないのだから。

背後の大木ごと、その手の剣が薙ぎ払う。

Aランクの筋力に相応しい剛腕とマッスルは、アストルフオが迫撃で戦うには差があり過ぎた。

「おオ圧制者よ！ 傲慢が潰え、強者の驕りが蹴散らされる時だ!!
ハハハハハハハハハハ!!」

新たな苦難。

それに悍ましきさえ感じさせざる笑みで、スパルタクスは歓喜する。しかして、戦術的には詰みに等しい「敵騎に釣られ完全に敵陣で孤立している」状況を、欠片も気にせずに。

とある極東の島国では、『釣り野伏せ』と呼ばれる戦術である。

「——全く、手に負えんな」

そんな中、戦場を俯瞰する視線が存在した。

イデアル森林のより高い木々の上で、暴走する赤のバーサーカーに『処置なし』と断ずる声が漏れる。

その影は、まるで獣人の様に獅子の耳と尾を持っていた。

赤の弓兵・アタランテ。

ギリシヤ神話に刻まれた、月女神アルテミスの加護を授かって育てられた純潔の狩人。

人類史初の英雄旅団たるアルゴ―船団の一員であった彼女は、当然ながら弓兵の英霊として召喚されていた。

暴走するスパルタクスを、同陣営故に必死に止めんとした彼女。すでにソレを諦めながら嘆息し、彼を無視しつつアタランテはもう一つの戦場を俯瞰していた。

チラリと、スパルタクスとアストルフオが対峙する戦場とは十二分に離れた場所で、口笛を吹きながら敵を待つ男を見る。

彼女と共に、スパルタクスを止めに来た赤のサーヴァント。

スパルタクスをすで見限った二人は、既に黒の陣営との戦いに思考を切り替えていた。

アタランテは弓兵らしく、森に潜みながら機を待つ。

奇縁ながら、プロレスでボコボコにした相手同世代の知り合いの息子であるかの^{ライダー}大英雄——赤

の騎乗兵は、彼女が知る限りギリシヤ神話で二番目に強い英雄だった。

その逸話と宝具も合わさって、敗北する姿を想像するのは困難である。

無論、皆無ではない。

そんな彼女が知る限り、最も強い英雄ヘラクレスが現れるなら話は別である。ギリシヤ神代の大主神ゼウス・クリロミアの血と大女神ヘラ・クリロミアの乳を持つが故に、存在するだけで重力を捻じ曲げてしまうほどの神性と英気。

少なくとも敵の本拠に此処まで近づきながら、見知ったその気配を感じない。

どうやら幸い、かの大英雄は召喚されていないようだ。

しかし、この戦場はあらゆる時代の英雄集う聖杯大戦。

そんな赤のライダーさえ凌駕しうる大英雄が、まさかの同陣営に召喚されていたのだから油断はできない。

赤の槍兵ランサー、施しの聖者カルナ。

ジークフリート、赤のライダー同様に不死性を宝具として有し、その相性から赤のライダーの不死性を無いも同然にする太陽の半神である。

であるならば、同様に赤のライダーを超える存在が黒の陣営に召喚されていないと考えるのは余りに蒙昧というもの。

人理最強の不在で漏れかけた安堵を自戒するように呑み込むアタランテの視界の先で、赤のライダーの前に二騎のサーヴァントが現れた。

黒の花嫁バーサーカーの様な少女は兎も角、片方は赤のランサーと競り合ったとの情報がある黒のセイバーである。

コトミネ神父からの情報が正しければ、異様な頑強さを持つという。

明らかに宝具による不死性の類だろう。

そして赤のライダーも、その手の類の宝具を有する。

「これは千日手になるな。であれば——」

——ならば、その均衡を崩す事こそ己の役目。

そう判断した彼女は、静かに矢を番える。

そんな姿を、姿すら消した者に見られているなど露程も思わずに。

第十二話 SAN値チェックになります

結果として、戦況はアタランテの予想通りに進んだ。

スパルタクスはアストルフオの宝具『トラップ・オブ・アルガリア触れれば転倒！』によって機動力を封じられ、そのままゴーレムによって拘束。

現れた黒のランサーヴラド三世の宝具によって串刺しにされ、黒の陣営に囚われてしまった。

独断で単騎突撃し敵陣のど真ん中で孤立するという暴走のツケは、虜囚の身という最大の屈辱で終わった。

こうなってしまうえば、己のマスターとの魔力パスを切断され黒の陣営の駒として扱われるだろう。

赤の陣営にとって凡そ最悪の結果だが、それを気にする赤のサーヴァントは既にもいない。

幾度も行われた静止を完全に無視した以上、当然の末路と判断されたからだ。

そして赤のライダーと黒のセイバートの戦いは、完全に膠着していた。

両者共に不死身の逸話から来る宝具を有し、そしてお互いの攻撃では一切の傷を与えられずにいたからだ。

お互いの首に刃を突き立てながら、お互い一切傷付かない様はそれを観測していた黒のマスター達を呆然とさせた。

透かさず、其処に黒のバーサーカーが援護に入る。
しかし残念ながら超級サーヴァント同士の戦いに、人に造られた程度の怪物では場違いではない。

ある意味ジークフリートの攻撃を一切気にする必要が無い赤のライダーは、その俊足で文字通り黒のバーサーカーを蹴散らした。

であるならば、黒のセイバーと赤のライダー各々の不死性の秘密を

解き明かすしかない。

しかし相手はその俊足で槍を振るうだけで、正体に繋がる要素が余りに少ない。

それだけで正体を解き明かすとなると、シャーロック・ホームズ そういう類の英霊が必要だ。

少なくとも、ジークフリートはソレに該当しない。

残る手段はジークフリートの持つ聖剣たる宝具なのだが、その真名解放は己の正体を明かす事と同義。

万が一通用しなかった場合、己の弱点を曝すだけとなってしまう。そうなれば、最悪の形で拮抗が崩れてしまう。

ジークフリートの血鎧で唯一護られぬ、そして突かれたが最後、死にさえ直結しかねない背中という弱点を。

そして本来、あるいは在り得たかもしれない可能性では、相互理解が余りに欠如していたが故にジークフリートのマスターが暴挙に出るのだが――。

しかしその前に、そんな拮抗をアタランテの一矢が崩す。

ジークフリートの宝具、『アーメイ・オブ・ファブニール悪竜の血鎧』。

Bランク分の攻撃を遮断する^{カット}という、防御系宝具でも屈指の頑強さを誇るソレは、正当な英霊相手にはB＋ランク分遮断する。

Bランク以下の攻撃、ではなくBランク分というのが肝である。

つまり魔法級の神秘とされるAランク相当の攻撃をしても、掠り傷程度になってしまうという有様である。

先日の赤のランサー、カルナが持つ黄金の鎧『カヴァーアーチャ&クンダーラ日輪よ、具足となれ』アーメイ・オブ・ファブニールも屈指の鎧だが、こと物理防御性能という点では『アーメイ・オブ・ファブニール悪竜の血鎧』が上回る。

無論、黄金の鎧は防御範囲が概念にまで及び、拳句致命傷に近い傷も即座に回復し、カルナの精神力も相俟って即座に戦闘を続行出来る程の自己治癒能力を持つのだが――閑話休題。

ジークフリートの血鎧の評価が上がる程、それを貫く事の凄まじさが強調される。

『――姐さんの渾身の一撃は、流石に良く効くみたいだな』

赤のライダーの自慢げな言葉が、その一矢を賞賛していた。

アタランテの持つ神造兵装、『天穹の弓』タウロポロス。

月女神アルテミスから授けられた神弓は、引き絞れば絞る程にその威力を増す。

アタランテ自身の筋力は下から二番目のDランクだが、渾身の力を込め限界を超えて引き絞れば、Aランクを凌駕するほどの攻撃力を発揮することもできる。

結果、ジークフリートの鎧を貫通した上にその身体を背後の木々ごと吹き飛ばし、瓦礫に磔にしていた。

その一撃の威力は、ジークフリートを数分とはいえ行動困難にするほどのモノ。

『ギアて——』

そうなれば、赤のライダーがフリーとなる。

ジークフリートが動けないのはほんの僅かな時間だが、しかし。

ただでさえ怪物と英雄の相関関係による、性質の有利。

最速の英霊の称号を欲しいままにする彼にとって、一秒あれば黒のバーサーカーを殺す事など殊更容易い。

『なッ、に……!?!』

しかし、赤のライダーを押し留めたのは新たな一矢。

不死身の筈の彼の肩を穿つ、あり得ざる射撃であった。

黒のアーチャー、ケイローン。

ギリシヤの大賢者の一矢が、見事赤のライダーの鎧を貫通させ先程の意趣を返した。

動揺する赤のライダーに、間髪入れず第二、第三の矢が放たれる。それを即座に回避するも、そうなれば立場は入れ替わってしまう。

黒のバーサーカーが、先程の射撃を元に赤のアーチャーへ疾走した。

『チッ。来るか、黒のバーサーカー』

無論、それで狼狽えるアタランテではない。

狂戦士の判断は悪手と言えずとも、良手ではない。

無策で射手を襲うには、黒のバーサーカーには最速の足も不死身の

鎧もありはしない。

『その無謀、血で贖うが良い——！』

ジークフリートさえ貫いた一射を、疾走することに全力を注ぐ黒のバーサーカーに、凌ぐ手段などありはしないのだから。

その時、姿を隠している者でさえ瞠目する事態が起こる。

『何ッ!?!』

威力だけなら、凡百のサーヴァントの宝具さえ上回る矢が、撃ち落とされたのだ。

愕然とする中、低ランクとはいえ狂化されているが故に黒のバーサーカーは疾走を止めない。

『向こうのアーチャーか、ならば——』

アタランテは反射的に矢を連射する。

そのどれもが、構造上行動を阻害させる部位に命中する。

だが、突撃するは曲がりなりに黒のバーサーカーで、怪物である。

引き絞る暇が無かったが故に威力が足らず、黒のバーサーカーに命中しても彼女は止まらなかった。

遂にアタランテの居る木を押し折るも、しかし目的の弓兵は居らず。

『……までか』

潮時。

それを悟った時点で、彼女は敵を称賛しつつも跳んでいた。

彼女最大の特性は、その弓兵というクラスにあるまじき脚力。

黒のバーサーカーでは、逆立ちしても追いつける相手ではない。

『勝負は預けたぞ、黒のサーヴァント』

赤の弓兵の姿を完全に見失った黒のバーサーカーを尻目に、チラリと地上から奔る流星を見遣る。

その音速にさえ達する速度から、赤のライダーの宝具による撤退だと知れた。

僅かに笑い声が聞こえる。恐らく赤のライダーは、己の獲物を見定めただろう。

であるならば、元よりスパルタクスの暴走からなる不本意な戦闘。

アタランテは、その場から完全に離脱するのに躊躇は無い。
こうして要らん失言（意図的）によつて発生した、聖杯大戦第二戦
が終幕した。



——そう、それで話は一旦区切りが付く筈だった。

「やあ」

」

その声が撤退中のアタランテの獣の耳に届いた瞬間、思考が硬直すると同時に、反射的にその声色から距離を即座に測定。

「忙しいのは承知しているが、少し良いかな？」

極近距離というありえない答えを導き出したと同時に、移動中足場としていた木々を押し折る勢いで跳躍した。

耳元に囁かれたかのように思えるほどの距離を、瞬時に突き離す。

彼女の固有スキル『アルカディア越え』。

英霊最速たる赤のライダーに匹敵する彼女の神速は、この障害物の多い森林地帯でこそ真価を發揮する。

彼女が本気で駆ければ、追い付ける者などまず存在しない。

こと狩人の森林地帯ホイクラウンドであれば、赤のライダーにさえ匹敵、凌駕するだろうという自負が彼女にはあった。

そうして距離を取ってしまえば、それで彼女の弓矢が獲物の悉くを狩り落とすだろう。

だからこそ、理解できなかつた。

「赤のアーチャー、アタランテとお見受けする。

僕の名前はアラヤ・トオサカ。知ってるかもしれないが、ルーラーのマスターだ。君達赤のサーヴァントと、色々話をする時間を頂きたいのだけでも」

「……馬鹿な」

アタランテが走る先に、既にその曲者が先回りしていた。在り得ぬ話である。彼女に脚力で勝る人間など、存在するなど信じがたかった。

そんな動揺を隠せずにいた彼女に、ルーラーのマスターと名乗った少年は時間を与えなかった。

「本当は穩便にいききたいんだけど、……これは先に謝っておくべきだね」

なまじ、赤のランサーという前例があった為だろう。

赤の陣営を事実上指揮する言峰神父がルーラー陣営の排除に動いた以上、赤のサーヴァントには是が非でも話をして貰わねばならないのだから。

であるならば、何もさせない必要がある。

己の英雄としての自負を踏み躪った輩に、アタランテが何らかの感情を抱く間もなく——故に、彼は己が禁を自ら解いた。

「——知性体教導機能、限定解除開始」

本当に申し訳なさそうに、アラヤは己の腕輪の形をした魔術礼装を自ら外した。

即ち、己の特性を抑え込んでいた枷を、解き放った。

瞬間、アタランテの視界から彼以外の全てが消し飛んだ。

「あ——」

美とは、精神攻撃である。

それが極まれば価値観、精神、自我さえ再定義する程の脅威と変貌するのは、多くの美神の権能が証明している。

ギリシヤ神話のアフロディーテは認識を容易く書き換え魂を汚染し、メソポタミア神話のイシユタルは無機物な軍用兵器さえ魅了し無力化するだろう。

アタランテの目の前に現れたソレは、紛れも無くその域に在る何かだった。

無意識に滂沱の涙を流し、そも彼を害するという意思が忘我の彼方

に消え失せる。

そんな彼女に自我を取り戻させたのは、小さな小さな疑問であった。

(何故だ?)

近づくアラヤに、脱力しながら跪く様に膝をつくアタランテは疑問を抱く。

顔を涙に濡らしながら、彼女の知る神とは似ても似つかぬ少年を見上げた。

そう。似ても似つかぬ、のに。

「アルテミス、様——?」

「うーん、そうなるのかあ」

苦笑する目の前の少年から、彼女が信仰する女神と同じ神性を感じたのだ。

あり得ぬ話である。

仮に目の前の存在がアルテミスに関わる何かを持っていたとしても、かのギリシヤ神話に於ける月女神は処女神。

三ツ星の狩人という恋人こそ存在したが、兄アポロンの姦計で彼と結ばれる事は無かった。

アルテミスに子供など存在しない。故に、彼女の系譜など存在しないのだ。

だが、アルテミスから与えられた神造兵装『天穹の弓』タウロポロスを宝具とし、真名解放時ではアルテミスとアポロンの力を直接借りるアタランテだ。

彼女が、己の養育者でもある月女神の神性を見間違ふことなどありえない。

否、それだけではない。

ありえないのは、アラヤと自称するそのヒトガタが醸し出す神性の

■は——!

「違う。私は君の神ではないよ」

アラヤは断じてアルテミスでも、兄妹神のアポロンでもない。
本人が否定するように、それは絶対なのだ。

無論、無関係というには難しいのだが。

「此処はまだ黒の陣営内だから、取り敢えず森を抜けようか」
走り出すアラヤの言葉に、アタランテは従い追従する。

まるで、神からの啓示を受けた信者のように。

後に雇用関係となる二人の出会いは、そんな些か乱暴なモノであった。

第十三話 アキレウスの憂鬱

——赤のライダーは、己の境遇を久方ぶりに嘆いていた。

トロイア戦争に行かないよう母に女装までさせられ、拳句オデュッセウスに容易く正体を見破られた時以来だろうか。

赤のライダー、その真名をアキレウスという。

ギリシャ神話の名高き、ホメロスの叙事詩『イーリアス』の主人公にして俊足の代名詞。

アルゴノーツの一員であった英雄ペレウスと、「夫としたものを超える子を産む」権能を持っていた海の女神ティティスを両親に持つ、生まれながらの英雄である。

しかし英雄であるが故に短命との予言に嘆いた母が、その運命を変えんとして多くの施策を取った。

最愛の息子に、生きて欲しいと願ったが故に。

その手始めとして神性の炎でその身を焼く事により、不死身となったアキレウスの代名詞。

父ペレウスが「人間としてのアキレウス」を殺さない為に、その踵だけを人のままにしたが故に、その踵を射抜かれ死の要因となった『アキレス腱』。

『人体の踵にある急所であり、転じて「強者が持つ弱点」を指す言葉』の語源となった英霊。

ギリシャ神話に於いて大賢者ケイローン最後の弟子となり、ギリシャ神代に於ける人界最大の大戦争。

多くの半神の英雄が参加した『トロイア戦争』に於いて尚、最強の戦士。

ことギリシャ神話に於いて頂点が人類史最大最強だというのなら、次席がアキレウスであるという声は非常に多い。

アキレウス自身、ヘラクレスにさえ負けるつもりは無いという気概もあつた。

そんな己の短命の運命さえ顧みず、英雄として走り抜けた彼は生前でさえ多く無かった憂鬱に天を仰いでいた。

事の切っ掛けは、昨晚の聖杯大戦第二戦後。

赤の陣営全体の指示役を担っている言峰神父へ、その戦後報告を行つた後の事であつた。

『明日の正午、汝の時間を貰うぞライダー』

少しばかり様子の違つた赤のアーチャーから、そんな言葉を受けたのだ。

父から教わつた、幼少からの憧れの英雄。

ペレウスと同じくアルゴナウタイの一員たる、麗しき純潔の女狩人の誘い（主観）の言葉である。

やや冗談半分ながら粉を掛け続け、悉く袖にされたアプローチ。

先の戦いで自分を見直したのかと、それはもうテンションを跳ね上げた。

これが聖杯戦争の醍醐味かと、高笑いと緩む口端を必死に抑え込んだ。

完全にデートの誘いと確信（主観）、相手から誘わせた事に失念さえ覚えた程に浮かれまくつた。

「——この方が今回席を設けて下さつた、ルーラーのマスターのアラヤ殿だ。

神父の方針はこの際忘れよ。ライダー。先に告げるが、この方への無礼は吾が許さん故、心せよ」

ウキウキで彼女に付いて行つたら、なんか男が待っていた（現実）
拳句その男に、当のアタランテは相当入れ込んでいる様子でさえある。

渋顔を手で押さえ、室内でさえ天を仰ぎたくなるというもの。

窓の隙間から、己の踵を穿つた太陽がチラ見した。

キレそうだった。

「スウ——……あー、僕がルーラーのマスターをさせて貰っているアラヤ・トオサカだ。今回ルーラー陣営としての招集を受けてくれた事へ感謝を……うん。でも、なんだ。その、何というか……」

うん！ ちょっと時間空けようか!!」
ルーラーのマスターを名乗った相手の男が、此方の顔を見て即座に内情を把握し、全力で気まずそうに配慮してくるのがとても辛い。というかその気遣いから、普通に良い奴そうなのがとても辛い。何よりアタランテが何も察していない事が、特に。

第十三話 アキレウスの憂鬱

「まず、改めて感謝を。我々ルーラー陣営にとって、暫定重要^敵参考人^的であるシロウ神父の指揮下にある君達が、僕の要請に応えてくれて本当に有難う」

一拍置いて、やり直す事になった。

赤のアーチャーと赤のライダー間で行われた、無自覚な美人局的遣り取りは、ライダーの名誉と尊厳の為に無かった事になったのだ。

アラヤによって用意された、少なくとも四人以上は過ごせる一室で、二人のサーヴァントは歓迎されていた。

軽い冷水と摘まむ程度の菓子を用意されたテーブルに、アタランテとアキレウスはアラヤと対面する形で席に着く。

「おう、赤のライダーだ。真名は流石に明かせねえが……」

「いや、ルーラーの特権によって吾等の真名をアラヤ殿達は把握済みだ」

「真名看破。少なくとも昨晚の戦いに参加したサーヴァントの真名はコチラで把握済みだよ。」

とはいえ、君達を召喚した触媒について時計塔から情報を得ているから、その精査程度ではあったけどね。

ギリシヤに名高き、俊足のアキレウス。会えて光栄だよ」

「何だよ、それなら早く言えよ」

不満の様な言葉ではあるが、アキレウスは笑顔でアラヤと握手を交わした。

師であり育ての親でもあるケイローン曰く、気に入り認められた相手には滅法甘いこの最速の英霊は、この短い間のアラヤの全力の配慮に既にそう認定していた。

勿論、野性的で男性に対して等しく素気の無いアタランテが、格別な配慮をしている事は気になったが。

「アタランテも、少々強引なお願いを聞いてくれて有難う」

「構いません。ソレに、我々も無視できない事態の様ですので」
敬語である。

あのアタランテが敬語など、一体誰なら使うのだろうか。

そんな彼女の対応に、アラヤ当人も気まずいのかアキレウスに苦笑交じりで視線を投げる。

どうやら彼方も意図した態度ではないらしいが、原因に心当たりはある為に何もできない、といった具合だろうか。

そんな風にふむ、と唇を親指で押しながら察するアキレウスは、万能勇者と呼べる程に多才である。

「それで、その無視できない事態ってのは何なんだ姐さん」

「我等のマスターに関してだ。アキレウス」
「！」

昨夜も会話の話題に出た、召喚時にさえ姿を現さず魔力供給と「シロウ神父の指示に従え」という命令だけして、音信不通である二人のマスター。

「此方でも時計塔と照会して確認できたことだけど、君たちのマスターはキャビイク・ペンテルとロットウエル・ベルジンスキーという。

これに関しては触媒を時計塔が用意したから分かった事だけど、両名共にシギシヨアラの山上教会に向かってから、連絡を絶っている。

これはあくまで推測だが、君達のマスターは君達を召喚する前に赤のアサシン——セミラミスに毒を盛られた可能性が高い」

「ッ!!」

人類最古の毒殺者セミラミス。

アサシンでありながら、そのスキルによってキャスターの霊基も兼ね備える彼女が本気で毒を盛ろうとしたのなら。

元より神の子の遺したソレとは別物と認識されている聖杯を争う、この聖杯大戦。

冬木の第三次聖杯戦争で、あくまで監督にのみ努めて居た聖堂教会の神父がマスターであったこともあるだろう。

現代の魔術師では、それを回避するのは極めて困難である。

「驚くべき事にそれを回避し、時計塔とも連絡可能な赤のマスターとはこれから接触予定だが、少なくとも君達にはこの事実を伝えるべきだと判断した」

「あの神父……、舐めた真似してくれたじゃねえか」

アキレウスに、怒気により呼応する英気が迸る。

彼は極めて義理堅い性格だ。

魔術師は外道だと認識しているが、それでも自分を頼った者に応えるために召喚に応じたのだ。

何より、アキレウスの心情であり願望——それ故に、ここで憤らねばそれは英雄ではない。

「吾はマスターに毒を盛られたこと自体は、特に思う処は無い」

「姐さん……アンタさあ」

幼少期を山奥で過ごしたアタランテの死生観は、大きく自然に寄っている。

戦いの前に毒を盛られ、戦いに参戦すら出来なかった己のマスターの無様を、彼女は野山で毒草を食べる不注意と断じるだけである。

「だが、我等を謀ったのもまた事実。同陣営とはいえ、虚言を弄し都合の良い駒にしたのだ。いや、同陣営だからこそそう易々と赦す訳にはいかん。

……しかし、吾はルーラー陣営に与する訳にはいかぬのだ」

「勿論。解っているさ」

ルーラー陣営に参入する絶対条件。

それは聖杯を、己の願望を諦める事である。

「吾には、叶えたい願いがあある」

「ふむ……うん。折角だ、二人にはこの聖杯大戦の参戦動機を聞いても構わないだろうか？」

「参戦動機？」

「実はルーラー陣営として、全サーヴァントとマスターの『聖杯の運用用途』を確認していてね——」

こうして、およそ不可能だと思われた赤のサーヴァントへの聴取が行われた。



アキレウスにとって、その聴取は殆ど意味を成していなかった。彼は、英雄である。

アキレウスの聖杯に捧げる願望は、元来存在していない。

——『英雄として生き続ける』。

人間としてのアキレウスを残してくれた英雄ペレウスと、不死と多くの祝福を授けてくれた女神テティス。

この両親二人に恥じぬ生き様を歩み続ける事こそ、アキレウスにとって最も重要な行動指針である。

そしてその根幹は、彼を人理最速として英霊の座に召し上げた。だからこそ、英雄として在り続ける。

逆に言えば彼は、英雄以外に成ることを許されていないのだ。

「——この世全ての子供たちが、愛される世界」

故にアタランテの願いに対して有益な言葉など、アキレウスは持ち合わせていなかったのだ。



「先ず、結論から話そう」

アラヤはアタランテに優しい視線を投げ掛け、故に虚偽なくその事実を伝えた。

「アタランテ。この聖杯大戦の聖杯では、君の願いは叶わない」

「な———、そんな馬鹿な!？」

アラヤの言葉に、怒りさえ込めて叫ぶ。

英雄、純潔の狩人アタランテは———孤児である。

男児を望んだアルカディア地方の王イーアソスに、女児であったが故にパルテニオン山の泉の傍に捨てられ、女神アルテミスに拾われ、彼女の聖獣たる牝熊に育てられた。

そんな出自故に弱肉強食の原理に従って冷徹だが、自身の生い立ちから「子供は庇護し、愛情を注ぐべき」と考える。

こと子供が関わる事態となれば、自然の如き冷徹さが打って変わって夢想家となる。

「聖杯は、万能の願望機ではないのですか!? 子供がただ幸せになる世界! そんなありふれた願いを、何故叶えられないというのですか!？」

この世に生を受けた子供は皆、両親からも周囲の人々からも愛され、そうして育った子供たちが新たに生まれた命を愛する。それが世界の循環であると。

ただ当たり前に子供が慈しまれ、愛される世界。

美しい、目も充てられぬ程眩しい無垢過ぎるその願いは、しかし夢物語と呼ばれてしまうモノでもあった。

だからこそ、聖杯に奇跡を願うのだ。

「ではまず、聖杯の願望器としての仕組みを説明しよう」

最早鬼気迫るアタランテに対して、アラヤは顔色一つ変えずに乾いた喉を潤しながら話し始めた。

「冬木の聖杯戦争は、元来英霊の魂を七騎集め、根源への到達を目指す試みだ」

召喚した七騎もの、霊長最高の魂を焚べれば、それは聖杯の中身を満たすに相応しい最高純度の魔力となるだろう。

そして通常の聖杯戦争と違い、聖杯大戦において片方の陣営を打倒するだけで聖杯は完成する。

「その魔術儀式に七人の魔術師が必要である為、『万能の願望器の奪い合い』というお題目を用意し、外部の魔術師達を呼び寄せた」

「な、なら、万能の願望器というのは、嘘偽りだと?」

「いや、冬木の聖杯は『万能の願望器』と呼ぶに相応しい機能は確かに備えていたんだ。少なくとも魔術師にとってはね」

第三魔法の再現を求め聖杯をこそ造れたが、中身を用意出来なかった錬金術の大家、アインツベルン。

時計塔の魔術師であり、しかし当時不可能とされた『境界記録帯』^{ゴーストライナー}の論文を残したウクライナの蟲使い、マキリ。

そしてその大魔術儀式を成立させる為、時計塔の影響を受けない土地を提供した第二魔法の系譜、遠坂。

『始まりの御三家』と呼ばれたこの三家は、一つの宿願の為に盟約を結んだ。

「第三魔法たる『魂の物質化』を以て、この世全ての悪を根絶する。

そんな善なる願いによって造られた聖杯は、持ち主の求める願いを、その『過程を省略して叶える』事が出来る。

ソレ抜きにしても、現代の魔術師にとって一生懸けても使い切れない無尽蔵の魔力炉心だ」

第三魔法、^{ヘヴンズファイル}天の杯。

人が悪を御し切れぬというのなら、御し切れる存在に人を昇華させる。

魂そのものを生き物にして、次の段階に向かう生命体として確立する五つの奇跡の一つ。

「まあ土台となる魔法陣こそ出来たが、大聖杯を起動させるまでに一代経てしまって、結果戦争という形に成り、今に至る訳だが」

「で、では何故吾の願いが叶えられないと——」

「聖杯は確かに過程を省略し、個人では成し得ない規模で結果を齎す。

——だが、所詮は道具だ。扱う人間がその『過程』を知らなければ、聖杯に入力出来なければ叶えようがないんだ」

無論、大聖杯には元と成ったホムンクルス。

大聖杯建造のために自ら生贄となった、冬の聖女ユステイーツア・リズライヒ・フォン・アインツベルン。

そんな彼女を元にした人工智能が、使用者をサポートすることはできる。

だが、だからこそ彼女が手段^{過程}を用意出来ない場合、必要な手段^{データ}の入力は使用者に委ねられる。

とある世界線に於いて、人を殺す事ではか人を救えない男が聖杯を手にした。

そして『争いの根絶』『人類の恒久的な平和』という夢を、妻の姿を形取った聖杯に託し。

しかしその結果として、その男が行ってきた手段での救済——

——『人類殲滅』という回答が提示されたように。

「アタランテ。君は現代の子供たちを、どう幸せにする？」

「——それは」

その問い掛けに、彼女は答えられない。

親に捨てられ、獣に育てられ英雄となった彼女が答えられる訳がなかった。

ギリシヤ神話に登場する、アルゴス王タラオスとリュウシマケーの息子パルテノパイオス。

彼は一説では、アタランテの息子ともされる。

しかし彼女はその一説に於いて、かつて自分がそうされたのと同じ様に、パルテニオス山中に赤ん坊の彼を棄てたという。

子供に対して甘すぎるアタランテは、果たしてそんな事をするだろうか。

例えばオリュンポス十二神。

彼等ギリシヤの神々がその実、外宇宙から来訪した星間航行船団である以上、伝説の全てが真実という訳ではない。

例えば日本の英雄、金太郎こと頼光四天王の一人、坂田金時。

彼は妻と息子を迎えたときされるが、サーヴァントとして召喚された彼にその記憶は曖昧模糊で、ほぼ無いと言ってもいい。

それは、『純潔の狩人』という側面をサーヴァントとして召喚されたアタランテも同様であった。

幼少期に親を亡くした、或いは虐待を受けた子供。彼等は親になった際に、子供との関係に亀裂が生じやすいという。

それは、自身に経験が無いからかも知れない。

そしてアタランテは実の親に育てられた事は無く、子供を育てた経験などありはしない。

そんな女が、一体どうすれば子供の幸せを思い描けるといいのか。



アキレウスは英雄である。

故にアタランテの願いに対して有益な言葉など、持ち合わせていない。

「——ライダー」

「姐さん……ッ」

「吾は、^{わたし}どうすればいいのだ」

万軍に対し、孤軍奮闘し打ち破れと言われれば、笑いながら敵を薙ぎ倒すだろう。

国から少女を護り抜け、と言われれば華麗に護り抜いてみせよう。

しかし、今の道に迷った幼子のような彼女に、アキレウスは何も言えなかった。

彼に、今の俯き英気が失われたアタランテを導く事も、救う事も出来ない。

彼女の願いを美しいと思えても、同時に夢物語としか思えない。

アタランテに、英雄は必要ない。

「だからアタランテ、君は聖杯で受肉しなさい」

「え？」

きつと彼女に必要なのは、己ケイローンの師の様な存在なのだ。

「実は僕はね、孤児院や保育園などの養育施設のスポンサーをやっている。保育士なんかは色んな理由で人手不足なんだ」

「あ……え？」

「流石に子供を産めとか、起訴不可避のセクハラをする訳にはいかな
いからね。」

受肉したら、子供を育てる仕事に就いてみるのはいかがかな？ 勿論
戸籍は用意するし、資格取得の為の環境も用意しよう。提案している
のはこつちだからね。それぐらいのフオローはするさ。まあ貸しを
作るのが嫌なら、それこそ聖杯を使えばいい」

だからそれは、紛れも無いアタランテにとっての希望と言えた。

「君の願いを聖杯で叶える手段を、私は提示出来ないし、してはいけな
い。それに聖杯で直接他者に幸せを施す事は、ある意味怠惰と言える
かもしれないからね。」

だから君に提示できる手段は地道で、しかし君の願いに対して確実
に益となるものだ。

『急がば回れ』とは、僕の実家の国の諺だったかな」

子供を育てた経験が無いというのなら、受肉して現代で学べばい
い。

その記録を『座』に持ち帰れば、それは確実にアタランテにとって
掛け替えのない価値あるものに成るだろう。

本来聖杯戦争での英霊召喚は稀ではあるが、亜種聖杯戦争が多発し
ている世界線では、また召喚される事もあるかもしれない。

アタランテも紛れもない、ギリシヤに名だたる英雄なのだから。

「あ、貴方はっ……」

「まあ確かに、君の願いは聖杯でも叶える事が困難な夢物語かもしれ
ない。だけど、人は夢物語を現実出来る生き物だ。人が神の加護も
魔術も無く、月に至った様に」

聖杯の様な、都合の良い物では無いかも知れない。

だが夢想と現実の差異と、無意識な諦めと理想との矛盾から逃避するよりも、余程健全である。

「それに、君のその願いの尊さが損なわれる事は決してない。

聖杯に捧げるまでもなく、当たり前前に持ち続けて良いものなんだ。俯く必要はない、顔を上げて胸を張るんだ。

——君は決して、間違つてなど居ないんだから」

彼女に対し欠片も下心を持たず、まるで迷子に帰り道を示すように語り掛ける。

アキレウスは、その優しい眼差しにケイローンを思い出した。

そうだ、彼女に必要なのは英雄などではない。

「立場上表立って出来ないけど、聖杯大戦に勝利すれば関係が無い。

その時僕は、君の夢に全力で協力するさ」

「あ、ああああああああ……ッ！」

神が人間に対するモノよりも、もっと身近で当たり前なものなのだ。

アキレウスにとって、ペレウスとテティス、ケイローンから与えられた様に。

「……そりゃ、俺じゃ土台無理な話だ」

アキレウスが、小さく呟きながら悔しそうにアタランテを見る。

先程まで途方に暮れていた女性は、もう何処にも居ない。

それはきつと、ソレを見届けたアキレウスにとって羨ましく、そして生前感じた事の無い程の敗北感を与え。

「全く、とんだ厄日だぜ」

だけど、不思議と嫌な気持ちになれなかった。

それはきつと、彼が『良い奴』に他ならないからか。

アラヤ・トオサカの正体とか、特性とか、能力とか、■とか。

そんなものとは、一切の関係が無く。

彼女に与えられた言葉は、英霊アタランテにとって致命的なものであった。

アタランテは、溢れる涙を止められない。

ならばきつと、その時アタランテに生じた感情はとても普遍的なものなのだ。

そしていずれ結実する感情を、人は恋と呼ぶかもしれない。

第十四話 叛逆者の解体

トゥリフアスの街並みを、美女と美少女、美幼女が買い物袋を抱えて歩いていった。

即ち、ジャンヌとジャック、六導玲霞の三者である。

玲霞とジャックは、まるで本当に親子の様な微笑ましきを見せているが、裁定者^{ルーラー}ジャンヌ・ダルクは己の必要性を自問していた。

——果たして、裁定者^{ルーラー}のサーヴァントはこの聖杯大戦に必要なか？

思わず己の頬を殴り付けなかったのは、両手が買い物袋で塞がっていたお蔭であった。

それでも、顎が砕けんばかりに歯を噛み締める。

それは、己に対する無力感と灼熱の如き羞恥である。

「なんとという卑劣……ッ」

千丈の堤も、螻蛄の穴を以て潰ゆ。

奇しくもとある復讐者に城塞とまで呼ばれた精神に生じた、まるで石垣の積載を蟻が崩すが如き僅かな亀裂。

それを叱咤一つで叩き直す。

一体何を考えた？

己のマスターの有能さと行動力、そして優しさ。

そして先達への遠慮を言い訳に甘えて、一体何を考えたのか。

彼がどれだけ功績を上げ、裁定者の陣営に有益を齎そうとも、そもそも彼は巻き込まれただけの被害者である。

無辜の民草を、聖杯大戦の災禍から護るのはお前の役目だろうが。

己の懦弱に吐き気をもよおしながら、裁定者たる聖女は己の城砦を再び築き上げる。

だが、現状巻き込まれたマスターに大きく比重が寄っているのは事実。

いつそ彼には前線に連れ添うこと無く、知覚共有での指示役に徹してもらおうべきか？

いや、既にルーラー達は二度も襲撃を受けている。彼を護ることは、ある意味に於いて最優先事項だ。

それはルーラー以前に、ジャンヌ・ダルクという英霊にとって――

「えいやつって」

「むあ」

意識の外。

英霊としての格は兎も角、裁定者のクラスで現界しているルーラーは非常に強力なサーヴァントだ。

特権クラス故に、かの冠位召喚には遠く及ばないにせよ、トップサーヴァントと呼ばれる最上級の英霊達に準ずる程のクラス補正を与えられている。

取り分け感知能力は、トウリファス全域に及ぶ。

そんなルーラーの虚を、二十そこらの小娘の指先が突いた。

頬を玲霞に突かれ、変な声を漏らしながら彼女は理解する。

あのアラヤが、他の孤児達とは違い態々己の傍に玲霞を置く理由を。

「大変なのは解るけど、変に思い詰めるのは駄目よ」

「……………ふう。その通りですね」

異端。

卓越した魔術の才があるとか、魔眼や超能力があるとか。そういった分かり易いものではない。

聖杯大戦という、紛争地帯さえ比較にならない戦地に於いて、サーヴァントを気遣える精神性。

そして赤のアサシンから逃げ切った胆力と技術。

不意打ちでは二流相当の魔術師に捕まる脆弱性―――普遍性を持ちつつ、ジャック・ザ・リッパーという危険極まるサーヴァントのマスターを担える、根拠無き逸脱。

現代にあるまじき傑物の雛。

六導玲霞は、所謂そのような人間なのだろう。

平均である事が是とされる現代では、成る程生き辛いだろう。

だからこそ、アラヤは彼女を他の孤児達とは異なり、傍に置いたのだ。

単純な才人なら環境を与えるだけでいいが、異端となれば現代社会で生きられるとは限らない。

せめて魔術回路があれば、魔術使いとして育てられただろうに。

彼の苦渋が伺えた。

アラヤは人を救う玄人であっても、導くとなると玄人とは言えないのだから。

「……行きましょう。先日、赤のサーヴァントと会合の機会を得られたとマスターから聞いています。予定の擦り合せもしなければ」

「そうねえ。あの人、放って置いたら何でも一人でやってしまう悪癖があるから。私も少し苦労したわ」

玲霞の言葉に、ふと思い返す。

そう云えば、この地に来てからずっと振り回されっ放しだ、とルーラーは思い出した。

生前多くの兵士を戦場に駆り立てて来たが、あるいは彼等はこんな心境だったのか。

「……フフ。そうですね、困ったマスターです。戻ったらしっかり言い聞かせなければ」

「あら、まるでお姉さんみたいね」

「私、5人兄妹の長女でしたので！」

「(男兄弟に初めての女の子は、普通甘やかされる。——っていうのは、現代特有の価値観なのかしら)」

そんな想いを馳せるルーラーの心持ちは、そんな戦友との記憶とは裏腹に。

啓示を貰うずっと前、ただの村娘ジャネットだったものだったことに——

——果たしてその致命的な有り様に、彼女は何時気が付くか。

しかし致命的とはいったものの、それが悪しき未来に繋がるかは、彼女次第。

一方、言い聞かせるどころか、赤アキレウスのライダーと赤アタランテのアーチャー相手にボードゲームに興じているマスターを目撃するまで、後数分後。

彼を顔真つ赤で叱り付ける裁定者の姿が見られたのは、全く以て完全な余談である。

第十四話 叛逆者の解体

「それで？ ルーラーと今日会合するってのか」

「何だ、随分不機嫌そうだな」

トウリファスのとある喫茶店にて、二人の声小さく木霊する。

片割れは180センチ以上の鍛え上げられた体軀にジャケットを纏い、サングラスに隠された瞳にはその強面に相応しい疵痕が刻まれている。

魔術師というよりマフィアのそれ故、その人柄に反して頻繁に職質を受け、その度に不本意な暗示で切り抜ける羽目になる男性。

赤のセイバーのマスター、ネクロマンサー死霊魔術師獅子劫界離である。

片割れはそんな相方と真逆な、小柄な金髪の少女だった。

へそ出しのチューブトップに、真つ赤なレザージャケットという高い露出度。

ポニーテールに結び上げられた美しい金髪に、不機嫌さに満ちた表情で整った容姿を歪めている。

獅子劫が召喚したサーヴァントである、赤のセイバー・モードレッドであった。

「そもそもルーラーとかいう、仕切り屋気取りが気に入らねえ。何様だ」

「はっはっは、だからといって向こうが手を出す前に噛み付いてくれるなよ」

「誰が犬だ誰が」

どっちかって言うかと猫だろ、と。

先日ロード・エルメロイ二世との通話中、猫と戯れていたのは誰だ——そんな言葉を飲み込みつつ、獅子劫は依頼人である時計塔からの報告を思い返す。

「他の赤のマスターは全滅、か。そこそ腕の立つ奴も居たんだがなあ」

「情けねえ。どいつもこいつも簡単にあの毒婦にやられやがって」

「俺はサーヴァントに恵まれたからな。お前の直感に従って助かったぜ」

「ハッ、当たり前だ」

モードレッドを持ち上げつつも、赤の陣営で単独行動を選んだが故に、唯一の生き残りとなった獅子劫は己のサーヴァントの功績を決して否定しない。

赤のセイバー、叛逆の騎士モードレッド。

騎士王アーサー率いる円卓の騎士の一人であり、その不義の息子を自称しながらブリテンを直接的に終わらせた反英雄。

それが女性であったのは驚いたが、ソレを含めたNGワードの多さたるや。

正直、非常に扱い辛いサーヴァントであることなのは確かだ。

だが、その能力の高さは折り紙付きである。

獅子劫が召喚に使用した触媒は、円卓の欠片。

つまり円卓の騎士の中から、特に獅子劫当人と相性の良い、或いは類似点のある英霊がサーヴァントとして召喚される最高のチケットだった。

獅子劫にとって、最高のサーヴァントに最も近いのがモードレッドという訳である。

必然死体を利用する死霊ネクロマンサー魔術師である自分には、太陽の騎士や聖槍の騎士より叛逆の騎士の方が余程遣りやすい。

死体と共に幼少期を過ごした彼にとって、清廉な騎士よりアウトローな彼女の気質は有り難かった。

事実、高ランクの直感スキルでの判断だったのだろうが、言峰神父

とそのサーヴァント・セミラミスに彼女が抱いた忌避と嫌悪。

それは決して、彼女自身の身の上から来るだけのものではなかった事が証明されたのだから。

陣営内で単独行動を取る、というチーム戦である聖杯大戦に於いて危険な行動は、獅子劫界離を赤の陣営唯一の生き残りのマスターとした。

無論他の赤のマスターが死んでいると断ずる訳では無いが、神代の魔術師に毒を盛られた時点で死んだも同然だ。

「で？　どんな奴なんだよ、そのルーラーのマスターは」

「……厄介だな。一応は敵じゃねえってのが、心底安心する程度にはな」

ロード・エルメロイ二世から伝えられた情報。

時計塔から派遣された赤のマスターが、獅子劫を除いて事実上全滅したこと。

そしてその情報は、黒のアサシン組を保護したルーラー陣営から齎されたということ。

そしてそのルーラーのマスターが、魔術使いの彼にとって数少ない友人と呼べる人物であったこと。

「何度か仕事を共にしたことがある。アイツは救助者セイヴァーなんて名前が有名だが、アルビオンの迷宮の専門家って訳じゃない。アラヤ曰く、『星の内海からの帰りに、善行を積んでいるだけ』なんだとよ。まったく、その時点で前人未踏だったのに」

「……アルビオンの、迷宮？」

「あー、そっからか」

一部の単語はモードレッドも理解できる。

アルビオンは勿論、土地神同然だったモルガンの被造物ホムンクルスである彼女は、星の内海についてもある程度の知識を持ち合わせていた。

だが魔術師でもないモードレッドは、アルビオンの遺骸が迷宮化していたのは知らなかった。

剩えその遺骸が、魔術師達の探掘場所として使われているなどと。

そして彼女の魔術師としての比較対象は、マーリンとモルガンであ

る。

当然、星の内海と地上を行来する事が可能な存在が、どれだけ異常なのかピンと来なかったのだ。

「魔術の腕どうこう以前に、人間なのか怪しい。後これまた別の案件で、コッチはアラヤも関わってなかったヤツなんだが——知り合いの死霊使いが、妖精を利用してしようとしてブツ殺された話なんだが」
「何だよその馬鹿は」

妖精とアーサー王時代のブリテンは不可分である。

そもキヤメロットは妖精と人の願い、そして円卓と聖剣によって成立した聖城であり。

円卓の騎士の多くは、妖精由来の聖剣や出自を持つものが多く存在している。

妖精と巨人達にして、神代最後の時代こそが西暦500年のブリテンだ。

妖精の恐ろしさは、円卓の末席に座ったモードレッドは良く理解している。

妖精を利用するなど、逆に利用されて破滅する末路しか想像出来ぬ程度には。

取り敢えず、トレヴァー・コドリントンなる己の死後に地上と妖精郷との門を作り上げた、偉業なんだか厄災なんだかを招いた大馬鹿の話は置いておこう。

獅子劫の話の中核は、その際工房の一部として利用されていた妖精である。

「あの時初めて妖精を見たが……、アラヤにも違いが有れど似たような異質感は感じた事がある。勿論、妖精のソレとは異なっていたがな」

「……チツ」

無論、アラヤが妖精などという事実は一切無い。

だが獅子劫は死霊ネクロマンサー魔術師。

人の残骸や人だったモノを扱う彼は、それを直感として理解していた。

「その後偶然アイツにまた会った時、確信したよ。『ああ、コイツ人間じゃねえんだな』って」

モードレッドの脳裡に浮かぶ、二人の人を救う人ならざる者。

憎むべき偉大な王と、その宮廷魔術師を務めた妖魔。

前者は概念受胎によって竜の因子を出生段階で組み込まれ、魔力炉心と出力端子を兼ね備えた。

その存在の精髓は、その現身であるモードレッドも持ち合わせている。

後者に至っては、極めて単純に人外の血が混ざっていた。

即ち――。

「――混血か？」

「……どうだかな。そういう単純な話なら、いつそ楽なんだが。ただ奴の恐ろしい処は、アイツが人間社会で当たり前な顔で人を助けてる姿に、人じゃねえって解った上で違和感がねえんだ。そんなのあり得るか？」

死体や木偶人形が人間面で闊歩している方が、獅子劫にとって、まだ納得がいく。

そういうレベルの違和感である。

なまじ友好的で有益な存在なのだから質が悪い。

拳句、友人は多く慕う人間は数えきれないのだろうと、己も友人である事を許容してしまっている。

「……面倒クセエ」

「全くだ。――……来たぜ。気張れよセイバー、ただ叩ツ斬れば終わらねえのがアラヤだ。そういう意味じゃ、アイツはそこいらのサーヴァントより余っ程厄介だぜ」

学生服らしき装いの金髪のサーヴァントを連れた、いつそ不気味な程に美しい少年が姿を見せる。

彼は旧知との再会で、その美麗を笑顔に染めていた。

「――やあ、久しぶりだね界離」

◆

「お前は辞退したって話を、俺にこの案件を依頼した召喚科学部長から聞いてたからな。それがマスター処か、審判役として関わってくるとは思わなかったよ」

「そこら辺は大聖杯の管理人格か、それに介入した抑止力あたりにも聞いておくれ。僕としても割に合わないんだよ？ 審判役だから聖杯に手を出す訳にはいかないし、面倒な立ち位置だからか両陣営にも狙われやすい。タダ働きも良い処だ。まあそれを言うなら僕以上に、ルーラーが貧乏くじを引いたんだけど」

旧知故に、邂逅は極めてスムーズに進んだ。

しかしそれはマスター同士の話。

サーヴァントの二名は、双方沈黙を選んでいた。ルーラーは己のマスターにツツコミたい気持ちを抑え込んだ。

一見優等生に見えるルーラーと、出生理由から反骨の化身の赤のセイバー。

聖女のブツ飛びファンキー具合を直視するまで、モードレッドの隔意が無くなるのは難しいだろう。

「で、時計塔の今後の方針は？」

「聖堂教会へ宣戦布告——とは、行かないらしい」

聖堂教会と魔術協会の関係を一言で表すなら、水と油である。

元々聖堂教会が「主の秘跡だけが地上に存在すべき神秘である」という方針である以上、それ以外の神秘を保全・運用する魔術師は問答無用で異端認定である。

魔術協会は『彷徨海』と『アトラス院』、そして『時計塔』の三大部門それぞれ方向性や在り方は異なれど、それは変わらない。

その内『移動石枢』の異名を持つ最古の魔術協会であり、「文明による魔術の進歩・変化を認めず、神代の魔術のみを魔術とする」を絶対原則とする『彷徨海』。

彼等はそのも神代の神秘を残す為なのか、自分達の工房である絶

海の孤島ごと宇宙から消失済みである。

中興の魔術協会である『アトラス院』は「人類の保存と滅亡の先延ばし」を至上命題に掲げ、その過程として他勢力と衝突する事はあつても、権力争いなんぞやっている暇などない。

今もアトラス院の錬金術師たちは、日夜行き止まりとなりつつある破滅への延命措置を、自殺者を出しながら必死に行っている。

たとえ無数に存在する滅びを回避すべく真面目に考えれば考えるほど、逆に世界を滅ぼす手段が増えてしまうとしても。

そして最新の魔術協会である、倫敦を本拠に構える『時計塔』。

魔術王ソロモンの直弟子であるブリシサンが院長を務め、同輩である魔法使いゼルレッチが魔道元帥を務めていた、魔術を学問として遺す為に興した学び舎。

神代と共に真エーテルの消滅によって失われる筈の神秘は何故か継続し、千年前に現魔道元帥を務めるバルトメロイの参入と共に貴族社会に染まった果ての現在。

神秘の衰退を前にしながら、手段の為の権力闘争が目的に成り果てながらも、今日まで継続してきた時計塔。

表立って聖堂教会と衝突し、停戦協定が結ばれてからも小規模な争いは絶えない関係である。

「表面上だけ見れば、聖堂教会が時計塔を出し抜いた形だね」

「面子を叩き潰した上でな。怖い怖い」

時計塔に向けた宣戦布告によって始まった戦争。

そこに通例として監督役として首を突っ込んだ、聖堂教会から派遣された神父。

一級講師を含めた時計塔が選りすぐった精鋭達に、それが立場を利用して毒を盛り、生殺与奪の権と共にサーヴァントを奪い去った。

時計塔が買った喧嘩を、始まる前に潰された形である。

控えめに言って、時計塔の面子は粉微塵だ。

それが、監督役の言峰神父の独断でなければ——だが。

「聖堂教会も、どうやらかなり困惑している様だよ」

「教会にもツテあんのかよ。お前が孤児院に出資してんの、そういう

「思惑もあつたのか？」

「あるわけ無いでしょ。フランスで仕事があつた時、偶々寄つた町の一般家庭の娘がマグダネルの坊っちゃんロイド・トランベリオの倍以上の最大魔力生成量を持つてた時の衝撃たるやつて話さ。

——埋葬機関の第七位は、僕が後見人だ」

「またエライ名前が出たよ。ビックリ箱も大概にしるよな」

「はっはっはっは」

特別な出自や後ろ盾を、欠片も持ち得ないただのパン屋の娘。

それが時計塔のロードの中でも、最大魔力生成量の記録保持者レコーダーを上回っていた。

勿論魔力効率では劣るが、一般町娘が持つて良い能力ではない。

神代を含めても、人類の頂点の素養である。

そんな彼女の保護と魔術の教育を名乗り出たのは、アラヤにとって必然ですらあつた。

この子は、放置したら不幸にしかない——と。

「下手に時計塔に行くのも、彼女の来歴から悪手だったからね。取り敢えず後見人になって、護衛手段と知識だけは教え込んだんだけど……。大体十年ほど前に、埋葬機関にスカウトされていた」

「パン屋ヤベエな」

埋葬機関は聖堂教会の抱える異端撲滅の、正しく主の代行者たる武装した戦闘信徒——そんな対異端専門の精鋭の、更に選りすぐられた七人いる頂点。

一般的に連想される祓魔師エクソシストではなく、悪魔殺しエクスキューターである七人の超越者。

そんな人類の到達点の一つに、パン屋の娘が至つていたと笑顔で報告された時、アラヤは正しく宇宙を背景バックグラウンドにしていた。

ちなみに完全な余談ではあるが、この編纂事象世界線に於いて転生無限者アカシヤの蛇と呼ばれる死徒とはある『運命の出会い』を経ることがない。

それによりとある並行世界と比較した場合、思想こそ歪みはしなかったが存在として著しく弱体化していた。

またとある神父を陥れ監獄島に閉じ込めた事で、その神父に救われ

た世界一有名な復讐者によって1800年頃に滅ぼされている。

よって、とあるパン屋出身の埋葬機関第七位の女性に、その死徒の影は欠片も存在していない。

「ルーラーとは、大戦が終わったら顔合わせの予定ね」

「えッ!？」

閑話休題。

そんな縁から、聖堂教会の第八秘蹟会から派遣された言峰神父の情報を、時計塔とは別の情報筋から得られ——黒と判断した。

「断言する。主導はマスターの方だ」

玲霞が接触時に感じた所感と、何処ぞの誰かと類似する経歴の符合。

そして聖堂教会の困惑っぷりを、逸早く知ったアラヤの判断は、言峰神父をアウトよりのアウトと判断した。

「ところで二世からは何か聞いているかい?」

「絶賛協議中だよ。今頃、倫敦で責任の擦り付け合いしてんのかね? まあ現場には関係無いから、俺はお仕事続行って訳だ」

「そして君達は、言峰神父率いる赤のサーヴァントと黒の陣営がぶつかり合っている所を、漁夫の利かな?」

「ハッ、どうだろうなあ」

凜猛な笑みを浮かべつつ、内心「もうヤダコイツ」とげんなりする獅子劫は、ロード・エルメロイ二世からの情報を思い出した。

即ち、アラヤから行動予定のソレを。

「で、俺等にもやるのか? 例の問答」

「その予定だよ。既に黒の陣営の聴取は終わっている。——君の場合は、契約の破棄……いや、踏み倒しかい?」

「……まあ、そうだな」

「ああ!？」

獅子劫とアラヤは旧知。故に彼が聖杯を求める願望にある程度察しが付いていた。

アラヤの問いへの静かな是に、モードレッドがいきり立つ。

「オイマスター! 俺は子孫繁栄って聞いてたぞ! 俺を謀ったのか

!？」

「大声出すな、別に嘘言つた訳じゃねえよ」

反英雄の怒り、というには可愛らしいレベルの怒気に眉間を揉みながら、サーヴア^{モードレッド}ントのマスターは否定する。

チラリ、とそんな遣り取りを微笑ましく見守っているアラヤを、彼のサーヴア^{ジャンヌ・ダルク}ントが見遣る。

「どういうことですか？」

「これは界離の一族の話だからね。当人以外が語るべきではないさ。勿論、ルーラーとしてはそうはいかないだろうから、後で話すけどね。一応、界離も構わないだろう？」

「……ああ」

「ああ、じゃねえぞマスター！」

詰め寄るモードレッドを押し返しながら、界離は億劫そうに己の一族に巢食う宿痾を口にした。

即ち、一族の業を。

「大昔、先祖が悪魔と契約してその代償が俺の代で来たってだけだ。つーか、オレルアンの聖女の前でそんなホイホイ言えるかっての」「……成程」

「悪魔との契約だあ？」

獅子劫家の血に巢食う契約。

彼の一族は七代続く魔術の名門で、歴史はアラヤが名乗る姓こと遠坂家よりも長い。

だが元々は日本出身の魔術師ではなかった彼等は、諸事情で極東の地に渡る必要があつた際に自分達の魔術基盤を失う事と成つた。

これは一例ではあるが——マキリという冬木における聖杯戦争成立の一つである、三千年続いたウクライナの蟲使いの一族があつた。

しかし五百年前に血統的全盛を迎えながら、聖杯戦争における御三家の一つと成つた際に日本に渡り魔術基盤を失っている。

現在は大聖杯をドイツ軍に奪われた事で、人を喰らいながら生き続けていた当主が呆けると共に訪れていた衰退が、遂に極致に到達。

現存する子孫の魔術回路が完全に閉じ切り、既に魔術師の一族としては完全に潰えてしまっていた。

たとえそれが、魔術王の遺した呪いの血筋システムであっても。

それと同じく獅子劫家は同様の経緯で魔術的衰退を迎えた際、それを覆す為に悪魔と契約を交わす事で再興に成功した過去を持つ。

そして、契約には代償が付き物だ。

それが悪魔との契約ならば、代償も殊更である。

——『子供が出来ないのでなく、産まれること無く死ぬ』。

一族の再興を望んだ末路は、一族の断絶であった。

それこそ聖杯でもなければ、悪魔との契約の債権放棄など不可能な願望である。

元より聖杯大戦への参戦は時計塔からの依頼ではあったが、獅子劫にとつて決して無視できる案件では無かったのだ。

亜種聖杯という万能の願望器が乱造される昨今に於いて、間違いなく神域のアーティファクトと呼べる程の代物は。

「——界離」

「あん？」

だが、アラヤはそんなことは些事であるかのように、悪魔と祖先に呪われた魔術師に問い掛ける。

一族の繁栄などに、獅子劫界離は既に価値を見出していないのだと。

彼が、真に無意味にしたくないモノは——。

「聖杯への願望は、彼女の蘇生ではないんだね？」

「——あの子は死んだ。……死んだんだ。」

あの子の死を、俺が貶める訳にはいかない」

「……そうか、そうだね。済まなかった」

アラヤは謝罪の言葉を口にしながら、静かに眼を伏せる。
まるで黙祷を、誰かに捧げる様に。



そうしてマスターへの詰問が終われば、その矛先はサーヴァントに向く。

「さて、では君の願望を聞かせてくれないだろうか。円卓の騎士、モードレッド卿」

「チツ、真名もお見通しかよ」

「それが、ルーラー私の特権の一つでもあります」

先程までのやり取りでの話が、己のマスターの軽々に暴いてはいけない臓腑はらわたなのだと、セイバーとて理解できている。

故に赤のセイバー・モードレッドは、先程の空気など知らぬと云う様に真昼間から酒を呷る獅子劫に、しかし何も言えなかつた。

そしてそんな彼女は、己の行き場の無い感情を全て鬱憤に変えて、ルーラーとそのマスターに吐き捨てる事に決めた。

『何でお前らに手前の願望を話さなきゃならねんだ』

———これはないな。

と、反骨心十割の返答を、モードレッドは辛うじて呑み込む。

己の願望、あるいは野望ともいえるモノを語る事を憚る。

それはモードレッドとしても無しだった。

こと父王アーサーに関する事に於いて、彼女は嘘をつくのは絶対に許されない事だったからだ。

故に涉々、されど堂々と獅子劫に話した言葉を復唱するが如く、言い放った。

「オレは偉大なる騎士王、その唯一にして正当な後継者！ 俺の目的は、聖杯の力で以て選定の剣に挑戦する事だ！」

「……アーサー王にとって代わって、かい？」

「あの王は出自だけで俺を認めなかつた。俺の才能も……何もかもな。それが間違いだと、選定の剣を抜く事で証明する」

円卓の騎士モードレッドは、不義の子である。

アーサー王の精髓を写し取った妖姫モルガンは、彼女を打倒する駒としてモードレッドを造り出した。

必然その出自もまともなものではなく、その在り方と製造過程は人造人間ホームンクスと称するのが正しい。

作成段階で母モルガンから呪詛を込められ、しかし騎士王に憧れた事で円卓の騎士として仕える事を選んだ。

そんなアーサー王を慕うモードレッドに痺れを切らして、その出自を明確に告げた事で彼女に『欲』が生まれる。

即ちアーサー王に仕える数ある騎士ではなく、その全てを継ぐ騎士王にとつての特別である事への、欲である。

だが、騎士王はモードレッドを拒絶した。

円卓の騎士になる以前から、モルガンの言いつけで兜で隠し続けたアーサー王に瓜二つの素顔。

それを明かした彼女を、しかし己の嫡子として認めず一蹴した。

憧憬と敬愛は反転し、憎悪に染まった。

だから台無しにしたのだ。

ブリテンに侵略していたローマへ攻勢に入り、有利な和平条約を結ぶために不在だったキャメロットを掌握。アーサー王に不満を持つ諸侯を、円卓を抜けた造反者トリスタンの戯言を用いて扇動した。

当時ブリテンの食糧供給を一手に支え、アーサー王を上回る支持を得ていた円卓最強と謳われた湖の騎士が、ギネヴィア王妃との不貞により離反した直後だったのも、崩壊を後押しした大きな要因だっただろう。

一度は栄華を誇ったブリテンは、結果的に妖母の望み通りに崩れ去った。

ブリテンの崩壊が確定し、ローマ遠征から帰還したアーサー王とのカムランの丘での一騎打ちで敗北したものの、その命と引き換えに致命傷を与えるに至った——アーサー王を死に至らしめた叛逆の騎士。

それが、反英雄モードレッドである。

そしてそれは、死後英霊の座に招かれても変わらない。

アーサー王に己を認めさせる事が、召喚された彼女の願望である。

「……………うーん？ うーむ」

そんな叛逆者の宣言に、裁定者のマスターは困惑気味に頭を傾げた。

己の願望を言い放ったモードレッドとしても、眉は顰めても激昂する程ではない。

そんな、話が噛み合わない事を理解したような——疑問符の後の考慮。

「あんまり、オススメはしないかなあ」

「あ？」

その返答に、モードレッドの脳が怒りで沸騰する直前。

「君は王に成った後、何を為したいんだい？」

「——」

その言葉に、彼女は答えられなかった。

二の句が継げず、咄嗟に答えようとしても言葉が出てこない。

——アーサー王に己を認めさせる。

その手段として、アーサー王が王と成った逸話である選定の剣への挑戦を選んだ時点で、それはアーサー王の代わりにモードレッドが王に成る事を意味する。

だがその質問に、彼女が答えられる訳がなかった。

「それを即答出来ない時点で——君が、選定の剣を抜くことは決してないよ」

答えられないという事実は、モードレッドにとって残酷な真実を意味していた。

何故なら彼女にとって選定の剣に挑戦する理由は、アーサー王に認めさせる為のもの。

王になった後の展望などなく、王という地位も父の持つ要素だから欲しているだけ。

少なくとも、アーサー王はそれらを王になる前から兼ね備えていた。

そう在るべく創られ、育てられたのだから。

王として創られ国の為に身を捧げた者を差し置いて、利己的な癩癩で国を滅ぼした者が——王として選ばれる訳がないのだから。